学位請求論文

配慮表現としての「ちょっと」の研究

秦 暁麗（QIN XIAOLI）

目　次

第１章　研究の背景と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
【注】・・5

第２章　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2.1. 配慮表現の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2.2. 配慮表現の背景となる理論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2.3. 配慮表現としての「ちょっと」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
2.4. 日本語教育における「ちょっと」の扱い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
【注】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

第３章　自然会話の「依頼」・「断り」に見られる「ちょっと」の考察・・・・・・22
3.1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
3.2. 研究の対象と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
3.3. 分析の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
3.3.1.「依頼」に見られる「ちょっと」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
3.3.2.「依頼」の予告としての「ちょっと」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
3.3.3.「ちょっと」が用いられない場合の「依頼」の表現形式・・・・・・・・・・・26
3.3.4.「依頼」に見られる否定的内容の前置きとしての「ちょっと」・・・・・・・・28
3.3.5.「依頼」に見られる自分の願望・行為・状態を控え目に表す「ちょっと」・・・・31
3.3.6.「断り」に見られる「ちょっと」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
3.3.7.「断り」に見られる聞き手への負担要求を軽減する「ちょっと」・・・・・・・34
3.3.8.「断り」に見られる否定的内容の前置きとしての「ちょっと」・・・・・・・・35
3.3.9.「ちょっと」が用いられない場合の「断り」の表現形式・・・・・・・・・・・37
3.4. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
【付記】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
【注】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

第４章　携帯メールに見られる「断り」の考察
―日本語母語話者と中国人学習者を比較して―・・・・・・・・43
4.1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
4.2. 研究の対象と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

4.3. 日本語母語話者に見られる「断り」の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
4.3.1.「断り」の構造について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
4.3.2.「断り」の付加成分について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
4.4. 中国人学習者に見られる「断り」の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
4.4.1.「断り」の構造について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
4.4.2.「断り」の付加成分について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
4.5. 携帯メールに用いられる断り方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
4.6. 断定的な断り方と「ちょっと」についての分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
4.6.1. 断定的な断り方をする理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
4.6.2.「ちょっと」を用いた「断り」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
4.7. 携帯メールに見られる絵文字の使用・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
4.8. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
【付記】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
【注】・・58

第５章　自然会話の「雑談」に見られる「ちょっと」の考察
―日本文学作品と比較して―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
5.1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
5.2. 研究の対象と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
5.3. 分析の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
5.4. 聞き手への負担要求を軽減する「ちょっと」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
5.5. 自分の願望・行為・状態を控え目に表す「ちょっと」・・・・・・・・・・・・・・64
5.6. 否定的内容の前置きとしての「ちょっと」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
5.6.1. 文学作品の会話部分において・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
5.6.2. 自然会話において・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
5.6.3.「ちょっと」の使用構造について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
5.7. 否定的内容の前置きとしての「ちょっと」の中国語訳との対照・・・・・・・・・72
5.8. 否定的内容の前置きとしての「ちょっと」に見られる日中文化差・・・・・・・・76
5.9. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
【付記】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
【注】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78

第６章　結論および今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
6.1. まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
6.2. 今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83

【参考文献】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
【引用コーパス】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
【分析対象リスト】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90

第１章　研究の背景と目的

日本語を母語としない日本語学習者が、日本語母語話者とコミュニケーションを行う際には、言葉の意味解釈からさまざまなすれ違いが生まれることがある。なかでも平易に思われがちな「ちょっと」は、文脈によって意味用法が異なるため、誤解が生じやすい。

たとえば、日本語学習者が知り合いの日本語母語話者に「すみませんが、賃貸マンションの保証人になってもらえませんか」と依頼して、「ちょっと考えさせてください」、あるいは「ちょっと難しいなあ」という答えが返ってきたとしよう。日本語学習者は相手の表情やことばのニュアンスを読み取るよりも文字通りの意味を、まずは理解しようとする傾向があるため、「ちょっと」は断りの機能ではなく、「少し」の意味として理解しがちである。したがって、「短い時間だけ」考える、あるいは「少し」難しいと解釈し、保証人になってくれることを期待するであろう。ところがあとになって「保証人になることができません」という意味であったことが判明すると、なぜ始めにはっきり言ってくれなかったのかと不信感を抱く人がいるかもしれない。一方、依頼された方は断ったつもりであるため当惑するばかりであろう。

このようなあいまいな「ちょっと」の使い方について、日本語母語話者同士であれば、その意味解釈を比較的容易に行えるであろうが、日本語非母語話者が文脈や非言語行動からその真意を推測するのは厄介である。意味解釈のすれ違いにより、日本語母語話者とミスコミュニケーションを生じるおそれも考えられる。

上記に挙げた「ちょっと」の例は、日本語教育においては、初級の教科書で断りを表す「ちょっと」として紹介されるほど有名である。しかし、このような例以外にも、「ちょっと」は日本語母語話者の話しことばのなかで何気なく頻繁に使用され、日常生活のなかで、空気のようにさまざまな場面に現われている。以下に日本語学習者も読者として想定している『日本語文型辞典』に「ちょっと」の用法として示されているものを見てみよう。例文の番号もそのまま引用している。下線は筆者によるものである。

1　**ちょっと〈程度〉**

(1) ちょっと食べてみた。

2　**ちょっと**

a ちょっと〈程度のやわらげ〉

(4) すみません、ちょっと手伝ってください。

b ちょっと〈語調のやわらげ〉

(3) この問題は君にはちょっと難しすぎるんじゃないかな。

c ちょっと〈言いさし〉

(1) A:この写真ここに飾ったらどう？　B：それは、ちょっとね…。

3　ちょっと〈プラス評価〉

(2) この先にちょっといいレストランをみつけた。

4　ちょっと…ない

a ちょっと…ない〈プラス評価〉

(3) こんなおいしいもの、ちょっとほかでは食べられない。

b ちょっと…ない〈語調のやわらげ〉

(1) A:田中先生の研究室はどちらですか。B:すみません、ちょっとわかりません。

5　ちょっと〈呼びかけ〉

(2) ちょっと、これは何ですか、スープの中にハエが入っているじゃないの。

6　ちょっとしたN

a ちょっとしたN〈程度のやわらげ〉

(3) 酒のつまみには、何かちょっとしたものがあればそれでいい。

b ちょっとしたN〈プラス評価〉

(1) かれは、両親の死後、ちょっとした財産を受け継いだので、生活には困らない。

『日本語文型辞典』より（pp.223-225）

上記の、１～６における「ちょっと」を見れば、「ちょっと」が文脈によって、違う用法をもっているのがわかるだろう。日本語学習者にとって、これらの用法の中で、１の「程度」、５の「呼びかけ」としての「ちょっと」は、最もわかりやすいものとして挙げられよう。それぞれが副詞としての「程度」を表しているものと、呼びかけ語であり、強いイントネーションを伴い相手を非難する際に用いる場合を含む。また、３と４－aにおける「プラス評価」としての「ちょっと」、および６の「ちょっとした」という慣用的な用法としての「ちょっと」についても、それほど理解しにくいものではないと思われる。

しかしながら、２と４－b における「語調のやわらげ」または「言いさし」としての「ちょっと」については、日本語母語話者なら問題なく理解できるかもしれないが、日本語学習者にとっては、表現形式として覚えやすいものであるにもかかわらず、その意味・用法に対する理解は容易ではない。２と４－bにおける「ちょっと」は、筆者なりの解釈で言えば、以下のような機能が考えられる。

２－aでは、依頼場面において、依頼表現と共起し、相手にかかる負担度を「ちょっと」を用いてなるべく軽減したいという配慮を示している。

２－bでは、「この問題は君にとって難しすぎる」という相手に対する非難を「ちょっと」を用いて小さくするという配慮の表れである。

２－ｃでは、「写真はここに飾るのはよくない」という否定的内容を「ちょっと」を用いて言いさし、つまり、不同意のニュアンスを相手に暗示することによって、相手への配慮を示しながら、提案に反対することができる。

４－b では、相手の質問に対して、自分が答えられないことによって、相手に不都合な状態を招いてしまう。「ちょっと」は相手の不都合に対する配慮を表している。

以上の例文から、「ちょっと」は文脈に依存してさまざまな役割を果たすという複雑さが観察できる。また、日本語母語話者なら容易に想像できる文脈が前提となって「ちょっと」の機能が生まれるという特徴をもっている。

この文脈に依存した「ちょっと」についての理解の困難さは、単なる「ちょっと」の修飾の複雑さだけではなく、言語の文化差にもあるのではないかと考えられる。

たとえば、２－b の「この問題は君にはちょっと難しすぎるんじゃないかな」を中国語の“这个问题对你来说太难了”に訳すように、「ちょっと」は“太（とても）”に訳され、日本語と正反対の用法として使われている。つまり、日本語では、相手に対する非難を、直接的に指摘するのではなく、「ちょっと」を用いて間接的に示し、相手と適度の距離を置く志向が示唆される。そうすることによって、ありたいと話し手の思う関係へのシフトを促すことができる。それに対して、中国語では、相手に対する非難を直接的に表現することによって、親近感を示す志向がよく言われる。

このような文化差の影響もあるなかで、中国語を母語とする日本語学習者（以下「中国人学習者」）の場合は、２－b、または４－b のようなわかりにくいものにぶつかると、往々にして母語を媒体にして解釈する傾向がある。つまり、日本語を中国語に置き換えて理解するということである。２－b のように、中国人学習者が「ちょっと」を“太（とても）”の意味として理解してしまうおそれがあるため、対人コミュニケーションにおける「ちょっと」の機能についての理解は、ますますわかりにくくなるのではないかと思われる。

このように、「ちょっと」の使用は、日本語母語話者とのコミュニケーションを微妙に調整するものとして、日常生活のなかで頻繁に用いられる。日本語母語話者とのミスコミュニケーションを避け、良好な人間関係を維持できるように、まず、日本語母語話者がどのような場面で、どうのように使用しているのかを的確に理解することは非常に重要だと感じている。また、上記で見た１～６のような「ちょっと」の対人コミュニケーション機能について、特に、中・上級の日本語学習者にとっては、理解するだけではなく、適切に運用する能力も身につける必要があると思われる。さらに、より「ちょっと」の使い方を理解できるように、単なる言葉の違いだけではなく、異文化の理解も重要視されるのではいかと感じさせられる。

これまで、「ちょっと」についての研究は、文レベル、談話レベルといった視点からのものが数多く見られる[1)]。しかし、管見によれば、「ちょっと」についての研究は、体系的な研究が十分になされているとは言えない。また、「ちょっと」には対人配慮という機能があると言われているものの、実際に

分析対象をしているのは書きことばである場合が多い。自然会話という話しことばを用いる研究は多いとは言えず、日本語学習者の理解に効果的な場面の提示が少ないように見える。さらに、「ちょっと」に関する対照分析の視点からの研究も少ないのが現状である。

そこで、本研究では日本語教育の立場から、従来の研究であまり提示されていない自然会話に着目し、「ちょっと」の副詞としての役割ではなく、談話レベルにおける「ちょっと」の使われ方に焦点を当てて、日本語母語話者がどのように用いているのか考察していく。また、書きことばと話しことばにおける「ちょっと」の使われ方について、どのような特徴を持っているのか、さらに、「ちょっと」の日本語原文と中国語訳を対照し、対照分析の視点からの考察も試みる。それらの研究は、初級の日本語学習者だけではなく、中・上級の日本語学習者に対する説明と教育を考える上で有益であると思う。

本研究において明らかにしようとすることは次の３点である。

１．日本語学習者から見たあいまい性を持つ「ちょっと」について、自然会話において、どのように使われているのかを、まずは、「依頼」、「断り」の場面を通して明らかにしていく。そして、中国人学習者から見た場合に何が学習上の困難点となるかについて検討する。これは、日本語学習者に明確な意図がある場面について、自然会話における「ちょっと」の使われ方を理解させるためである。

２．「上下関係」の異なる依頼者に対する、携帯メールの「断り」において、日本語母語話者がどのような表現を用いて、相手に配慮しながら断っているのか、「ちょっと」の使用はどうなるかについて、中国人学習者と比較する形で考察する。これは、自然会話と違い、携帯メールという書きことばを中心とする媒体に見られる「ちょっと」の現れ方について調査し、日本語学習者に文体が異なる場合の断り方を理解させるためである。

３．意図が明確とは言えず、話題の変更に制限がない「雑談」の場面において、「ちょっと」がどのように用いられ、どのような機能を果たしているのかについて明らかにしていく。また、自然会話と日本文学作品を比べた場合の、それぞれの特徴を明らかにしていく。中国人学習者により複雑な自然な配慮表現としてのインプットを提示する有効性について考える。これは、意図が明確な場面と明確とは言えない場面を比べた場合、「ちょっと」の使われ方がどう変わるか、また文学作品の場合どうなるかについて、日本語学習者に理解させるためである。そして、「ちょっと」の日本語原文と中国語訳について、対照分析の視点からの考察も試みる。これは、中国人学習者に異文化の視点で「ちょっと」の意味用法に対する認識を持たせるためである。

以上のことを明らかにし、中・上級の日本語学習者はもちろん、初級の日本語学習者に対してもわかりやすい説明と教育を考えることが本研究の目的である。

【注】

1）詳しくは、工藤(1983)、周（1994)、真嶋・濱田（1999)、三宅（2003)、彭（2004)、笹本（2006)、岡本・斉藤（2004)、秋田（2005)、山岡他（2010)、辻（2011)、鄭（2011）などを参照されたい。

第２章　先行研究

2.1. 配慮表現の定義

まず、「配慮表現」という用語について考える。

「配慮表現」という用語が、はじめて用いられたのは、山岡他（2010）によると、生田（1997）(「ポライトネスの言語学」『言語 26』(特集)）においてである。

生田（1997，68）は、日本語のポライトネスを敬語体系と考えることを誤解であると指摘し、ポライトネスと配慮表現について、次のように述べている。

> ポライトネスは、当事者同士の互いの面子を保持、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケーションを図ろうとする社会的言語行動を指す。その意味では、言葉のポライトネスは「配慮表現」、言語的「配慮行動」などと呼ぶ方が適切かもしれない。ここで「配慮」と呼ぶのは、対人配慮、つまり相手に対する配慮だけではない。話者自身の面子保持、さらに両者の関係維持に対する総合的な配慮が含まれている。

上記の「面子」は、当然ポライトネス理論における「フェイス」を意識したものであろう。つまり、生田（1997）が言及している「面子」は中国語や日本語における「面子」のように、社会的に固定的なものではなく、文脈により変化する動態的なものであろう。「配慮表現」には日本語の敬語体系が含まれるが、そこから大きく離れて総合的で動態的なものとして捉えられている [1)]。

また、守屋（2003,48）は、「配慮表現」について、次のように定義している。

> 人が伝達する際に、話し手の立場認識を過不足なく打ち出しつつ、聞き手との人間関係をも損なうことのないよう勘案される言語表現の総体を「配慮表現」と呼ぶ。

つまり、守屋（2003）の定義では、話し手と聞き手の立場認識を出発点として「配慮表現」が捉えられており、両者の人間関係に配慮した言語表現を総体的に捉えたものである。これは生田（1997）の定義と共通点をもつものである。

「配慮表現」が「対人的コミュニケーション」において生じることを明示的に述べたのが山岡他（2010,143）である。その定義を以下に引用する。

> 対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現

山岡他（2010）の定義では、生田（1997）と守屋（2003）と基本的な部分では共通するが、「対人的コミュニケーション」に現れるものとして配慮表現が捉えられている。つまり、配慮表現は対人コミュニケーション活動において、話し手と聞き手の人間関係に考慮して行われる言語表現だと認識することができる。

本研究では、山岡他（2010）の定義を採用し、「ちょっと」を配慮表現に相当する言語表現の１つとして分析していく。

2.2. 配慮表現の背景となる理論

日本語の配慮表現を考えていく際に、その背景となる理論として、次の２つの理論がよく言及されている[2)]。本節では、それぞれの理論を概観するとともに、「ちょっと」を考える上で、どのようにかかわるものかを考えていく。

（1）Leech（1983）のポライトネスの原理

Grice（清塚（訳）1989）の「協調の原理」[3)]を補うものとして、Leech（池上・河上（訳）1983,190-191）は、ポライトネスの原理（Politeness　principle）を提唱した。発話行為の類型ごとに、次の６項目を原則として立てている。

（Ⅰ）気配りの原則（行為賦課型と行為拘束型において）

(a)他者に対する負担を最小限にせよ

(b)他者に対する利益を最大限にせよ

（Ⅱ）寛大性の原則（行為賦課型と行為拘束型において）

(a)自己に対する利益を最小限にせよ

(b)自己に対する負担を最大限にせよ

（Ⅲ）是認の原則（表出型と断定型において）

(a)他者の非難を最小限にせよ

(b)他者の賞賛を最大限にせよ

（Ⅳ）謙遜の原則（表出型と断定型において）

(a)自己の賞賛を最小限にせよ

(b)自己の非難を最大限にせよ

（Ⅴ）合意の原則（断定型において）

(a)自己と他者との意見の相違を最小限にせよ

(b)自己と他者との合意を最大限にせよ

（Ⅵ）共感の原則（断定型において）

(a)自己と他者との反感を最小限にせよ

(b)自己と他者との共感を最大限にせよ

また、以上の原則の重要性について、Leech（池上・河上（訳）1983,191-192）は、以下のように指摘している。

> これらの原則や副原則のすべてが等しく重要であるわけではない。対をなす原則(Ⅰ)から(Ⅳ)までのうち、(Ⅰ）の方が（Ⅱ）よりも、(Ⅲ）の方が（Ⅳ）よりも、会話行動に対してより強力な制約であるように思われる。このことは、もしそれが事実なら、丁寧さは自己よりも他者の側に関心がより強く集中されるという、より一般的な原理を反映していることになる。さらにまた、各々の原則の中では、副原則（b）の方が、副原則（a）よりも重要性が低いように思われる。そしてこのこともまた、消極的丁寧さ（不一致を避けること）の方が積極的丁寧さ（一致を求めること）よりもより重要な考慮である。

つまり、ポライトネスの原理は、より良い人間関係を築こうとする我々の願望とその方法を示したものだと言えよう。(Ⅰ）から（Ⅵ）の（a）については、「ちょっと」との関連が容易に推察でき、たとえば、日本語で相手に依頼する際に、「ちょっと駅まで迎えに来てくれない？」のように、自分の依頼が相手に負担をかけるであろうと自覚し、「ちょっと」を用いて、なるべくその負担を軽減するのである。もちろん実質的な負担が減るわけではないが、配慮が必要だと理解していることを示すことによって、対人コミュニケーションの相手に値する人間であることを示すのである。このような「ちょっと」は、(Ⅰ）気配りの原則の「(a)他者に対する負担を最小限にせよ」に沿う言語行動であろう。また、「ちょっとその服似合わないんじゃない？」においては、相手への非難を小さくするための「ちょっと」だと考えられる。これはまた、(Ⅲ）是認の原則における「(a)他者の非難を最小限にせよ」で説明することができるだろう。

本研究の対象となる「ちょっと」が消極的丁寧さを示す（Ⅰ）―（Ⅵ）の（a）として分析できるかどうかを考えていく。

(2) Brown　& Levinson (1987) のポライトネスの理論

Brown & Levinson(1987)は、ゴフマン（1967）[4] の概念を踏まえ、フェイスとポライトネスについて、以下のように述べている。

> フェイスとは、人が誰でも、かつ同時に抱く二種類の基本的欲求、すなわち、ネガティブ・フェイス＝“他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない”欲求とポジティブ・フェイス＝“他者に受け入れられたい・よく思われたい”欲求のことである。前者は自己決定の欲求であり、後者は他者評価の欲求であると言い換えることができる。こうした同じ相反した欲求を持った

人間同士が対面するというのが、コミュニケーションの状況なのである。そこから、自分と相手のどの欲求にどう配慮するかという問題が生じてくる。これが対人関係の調整手段としての「ポライトネス」である。

また、発話行為には、それをおこなうことで不可避的に相手や自分のフェイスを侵害してしまうものがあり、Brown & Levinson (1987) は「フェイス侵害行為 (face threatening act[FTA])」と呼んだ。そして、ポライトネスを「会話の場において表現・伝達される、主として相手のフェイスを侵害することに対する軽減的・補償的な言語的配慮のことである」とあらためて定儀している。さらに、ポライトネスが表現・伝達される具体的な手段のことを、「ストラテジー (strategy)」と呼んでいる。

Brown & Levinson (1987, 68-74) が考えたポライトネス・ストラテジーを以下に引用する。

【フェイス・リスクの大きさとストラテジー】

フェイス・リスク小

↑ (意図伝達を明示的におこなう)

フェイス侵害の軽減をしない

(1) 直言 (bald record)

フェイス侵害の軽減を明示的におこなう

(2) ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)

(3) ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)

(意図伝達を非明示的におこなう)

(4) ほのめかし (off record)

(意図伝達をおこなわない)

↓ (5) 行為回避 (don't do the FTA)

フェイス・リスク大

以上の５つのストラテジーにおいて (2)、(3) のストラテジーでは、対人配慮のバランスをとりながら FTA を行うことによって、意図伝達を確実なものにするということである。

滝浦 (2008) は、「“他者に受け入れられたい・よく思われたい”という他者評価の欲求を顧慮するストラテジーが、ポジティブ・ポライトネスである (p.34)」とし、またポジティブ・ポライトネスには、「直接的表現と近接化的表現によって、相手との距離を縮め、相手とともに事柄に直接触れようとする、表現の共感性が特徴となる。(p.34)」としている。典型的な表現としては、相手をほめる、一致や共感をできる点を見いだそうとする、相手の小さな変化に気づく、申し出や約束をすることで行為の共同性に訴えるといったものが挙げられている。

そして、ネガティブ・ポライトネスについては、「“他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない”という自己決定的欲求を顧慮するストラテジーが、ネガティブ・ポライトネス（p.39)」とし、その特徴について「相手の領域に踏み込むことや直接名指すことを避け、遠隔化的表現と間接的表現によって、相手を遠くに置き、事柄に直接触れないようにする、表現の敬避性を特徴とする。(p.39)」と指摘し、負荷を最小化する、謝罪する、敬意を示す、“わたし－あなた”を明確化しない語り口などがその典型的な表現として挙げている。

Brown & Levinson (1987) が提唱したポライトネス理論は、コミュニケーションをよりスムーズに進める上で必要とされる配慮に基づくものだと言えるが、どのように配慮を行うかは言語や文化によって異なる。英語や中国語に比べると、「日本語は対人的な距離が大きく、ネガティブ・ポライトネスが優勢である（滝浦,2008, 46)」と考えられる。

たとえば、日本語では、相手を指摘する場合、「君の字はちょっときたないなあ」のように、「君の字はきたない」と言わず間接的な言い方で、相手と一定の距離を保ちながら、「ちょっと」を用いて控え目に表すネガティブ・ポライトネスが優勢的に示される。一方、同じような状況を中国語で表現するなら、“你的字太难看了。”「ちょっと」を“太（とても)”に訳され、直接的に表すことがむしろ親しい間柄では好まれて、ポジティブ・ポライトネスが優勢になる。

このように、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown & Levinson（1987）のポライトネスに対する考え方には、日本語の「ちょっと」の機能を捉えるのに役立つものがある。

本研究では、それぞれがどの程度「ちょっと」の機能を説明できるかを考えていく。

2.3. 配慮表現としての「ちょっと」

本節では、配慮表現としての「ちょっと」に注目していく。

山岡他（2010）は、配慮表現としての「ちょっと」について、「君の文章はちょっと荒いな（p.141)」という例を挙げて、以下のように説明している。

> (C-a)「他者への非難を最小限にせよ」との原則に反するベクトルを持った《非難》の発話を行いつつ、この原則の方向のベクトルを持った表現を用いて緩和するわけである。これも、相手の非を指摘したいという発話そのものの目的と、人間関係維持のための配慮表現の目的とが、相反するベクトルを持って共存していることを意味する。(同掲書 p.141)

この（C-a)とは、Leech（池上・河上（訳）1983）のポライトネスの原理のうちの（Ⅲ）是認の原則（(a)他者の非難を最小限にせよ(b)他者の賞賛を最大限にせよ）を示す。この例においては「君の文章は荒いな」という非難に「ちょっと」をつけることによって、話し手は非難を小さくしようという気持ちがあることを示すというのである。

また、山岡他（2010，192）は他に、Leech（池上・河上（訳）1983）のポライトネスの原理のうちの（Ⅰ）気配りの原則（(a)他者の負担を最小限に(b)他者の利益を最大限に）や、（Ⅴ）合意の原則（(a)自己と他者との意見相違を最小限に(b)自己と他者との意見一致を最大限に）などによって説明が可能であるとして、「日本語の副詞には、配慮表現としての用法を持つものが少なくない」としている。

山岡他（2010）の研究は、「ちょっと」の機能を、Leech（池上・河上（訳）1983）のポライトネスの原理によって説明しようとしている点が興味深いが、実際の自然会話を分析したものではないという問題点が挙げられる。

また、鄭（2011，55－79）は、小説[5]を対象に、会話文に見られる「ちょっと」の発話機能に注目し、「ちょっと」を配慮表現の立場から「慣用的な用法」、「感動詞的な用法」、「文末に用いる」の 3 つの用法に分けて考察している。3 つの用法にはともに「相手の負担を軽減する」配慮効果があるとし、「『ちょっと』は会話の中で用いられる話し手と聞き手の人間関係（上下・内外）や場面によって、『聞き手への配慮』、『自分への配慮』、『配慮なし』、『会話の場への配慮』などに分類できる」と指摘している。

上記の４つの分類について、鄭（2011，77-78）は、以下のように解説している。

① 「聞き手への配慮」

コミュニケーションをする際には、必然不可避的に相手のフェイス[6]を侵害してしまう。相手のフェイス侵害を軽減するためのポライトネス・ストラテジー[7]の中で、「ほのめかし[8]」「ネガティブ・ポライトネス」ストラテジーを指す。つまり、「間接的に相手に発話意図を表す」「相手の欲求を妨げないようにする・FTA を行う際に、謝罪する・直接的表現を避ける・慣習化された婉曲的表現を用いる」など、なるべく相手の負担を少なめにする言語行動を指す。

② 「自分への配慮」

対人コミュニケーションにおいて、相手への配慮より、自分のために用いるすべての言語行動を指す。

③ 「配慮なし」

言語行動の中で、相手に気配りをしているのではなく、むしろ相手を傷つけるような「不満」、「非難」などのマイナス的な感情を指す。

④ 「会話の場への配慮」

会話の中で、「会話がスムーズに流れるように」「話がまとまりがあるように」いわゆる「会話の展開」と関わりがあるものを指す。

また、以上の分類について、鄭（2011）は、それぞれに例文を挙げた上で、以下のように説明して

いる。例文の番号は鄭（2011）による。

① 「聞き手への配慮」の例

(6) 真理「何？どうしたん」

郁子「うん、ちょっと……」

玲子「今日は、このあと食事して飲むんやけえ。郁子、判っとるよね」

郁子「着替えてからすぐ行くから……。正面玄関で待っとって」（p. 61）

「うん、ちょっと……」という返事は、「うん、ちょっと」に比べて、相手の質問への拒否の気持ちが少なく感じられる。「……」があることによって、いいにくいさや質問されて困っている心境を表し、わざとではなく、何かの理由があって、返事できないことを言いさしている。よって、相手の質問を直接拒否しなくて済むので、相手の面子に配慮する効果がある。

②「自分への配慮」の例

(1) 千昭「あれ、おまえ、自転車は？」

真琴「ちょっとね」

千昭「乗れ、後ろ」

真琴「送ってくれるのん？ラッキー」（p. 65）

相手に事実を正直に言うのは格好悪いので、「ちょっとね」を用いて誤魔化し、質問を避けている。自分の領域に入り込んで欲しくない気持ちを消極的に表している。

③「配慮なし」の例

(4) 千昭「グダグダ言ってって投げっぞ」

真琴「ちょっと」

高瀬「なお、投げろよ」（p. 63）

千昭が興奮して「グダグダ言ってって投げっぞ」と発言している。真琴の「ちょっと」は、緊急事態に発する感動詞のような用法として、禁止の意味を表している。このような「ちょっと」は「やめなさい」などの用語に比べて、より話し手の緊張感や強い意志が伝わり、禁止の意味が強い。

④「会話の場への配慮」の例

(1)　藤本「ちょっと、よろしいですか」

「じつはね……」

安南「ハイ……」（p.74）

「ちょっと、よろしいですか」は会話の中で、本題に入る前の前置きのような働きをしている。

鄭（2011）の研究は、「ちょっと」を用いた言語表現が何への配慮により現われているかを分析した点は注目に値する。しかし、日本語学習者にとってわかりやすいものだとは言えない。また、分析対象が小説であり、実際の対人場面で現われる「ちょっと」とは異なる可能性があるという課題を残す。

談話における「ちょっと」の機能に注目して、自然談話を分析対象とした研究に秋田（2005）が見られる。秋田（2005，74－87）は、自然談話データをまとめた『女性のことば・職場編』における実際の会話を対象に、程度副詞としての「ちょっと」が、談話においてどのような機能を持っているのかを考察し、「自分の行為が大げさに響かない」と「聞き手の負担を軽減する」機能があるとしている。それぞれの例として挙げられているのが以下である。

・帰りもちょっと見てみようかな（p.78）。　（自分の行為が大げさに響かない）

・今そちらにお回ししますので、ちょっとお待ちいただけますかー（p.84）。

（聞き手の負担を軽減する）

また、秋田（2005，86-87）は、「ちょっと」の特殊性について、このように述べている。

「ちょっと」の使用が、小量・小程度を伝達しようと思っているのか、そうではないのか、すなわち、現実場面と文の意味が同じなのかどうかは、一文や作例の中では言及できない。すべて談話単位でみなければならない。人間関係をも含めて、文脈次第であるというところに、「ちょっと」の特殊性がある。また「ちょっと」は言いさしになる場合や、かかり先が特定できない場合が多い。このような通常の程度副詞とは違う場面をもっている点も「ちょっと」の特殊性である。

秋田（2005）の研究は、自然談話を分析対象にしたことが注目に値する。また、「ちょっと」の用法について考える際に、「人間関係をも含めて、文脈次第であるというところに、『ちょっと』の特殊性がある。」と指摘し、「ちょっと」の意味・機能は文脈により大きく変わり得ることを示した点が示唆

にとむ。

2.4. 日本語教育における「ちょっと」の扱い

岡本・斉藤（2004,69－71）は、日本語教育の視点から、「ちょっと」が本来の意味である「物理的な量の少なさ」、「程度が低いこと」、「程度が高いこと」の他に聞き手への気配りを押し出しながら、話し手の責任を回避する役割があるとして、以下の６つのコミュニケーション機能を挙げている。

① 依頼や、希求、指示行為の負担をやわらげる

依頼や指示など相手に行為要求を求めるときに、その行為の負担をやわらげる機能は「～てください」「～てくれ」「～てほしい」「てもらえないか」などのように聞き手の意思を尋ねる形式に用いられ、相手に求める行為を軽くさせ、受け入れの寛容さに働きかける。すなわち、「ちょっと」のやわらげ効果によって相手がその行為を受け入れやすくなる。

② 否定的内容の前置き

「ちょっと」が否定的な内容のマイナス度を小さくする枕ことばとなる。マイナスイメージの表現や、重大ではないが不利益なこと・不都合なことなど利害関係が起こる可能性がある場合に用いられる。「ちょっと」を用いることによって、聞き手にその負の内容を受け止める心の準備を与えたり、話し手の心理的な負担を弱めたりする働きになる。

③ 断りを受けやすくする

「(日曜日は）ちょっと…。」と言いさし、重要な述部を省略してしまう表現形式をとり、話し手が相手の期待にそえず申し訳ないという意味を創り出す。同時に、言いにくい述部を聞き手に察してもらう方法をとることで、話し手の意思決定に聞き手を参加させ、共同作業の会話に引き込みながら断りの了解を得ることができる。

④ 呼びかけ

「ちょっと」自体に感動詞として、注意を喚起する働きがある。ただし、「ちょっと、これは何ですか。スープに虫が入っていますよ」のように、相手が目の前にいる場合は抗議など感情を示す場合もある。

⑤ とがめ

自分の利益を聞き手によって損なわれたと思ったとき、「ちょっと」を用いることでその不満、怒りを表出できる。「ちょっと」にプロミネンスを置くことにより話し手の不満や怒り、

威嚇、詰問、抗議などの感情を強めることができる。

⑥　間つなぎ

「あの、そのう、ちょっと、こう、なんて言ったらいいのか」のように、言いよどみを埋める間投詞の働きがあり、沈黙を回避しようとする場合に用いる。「ちょっと」自体に意味はない

また､以上の①－⑥コミュニケーション機能を支えているものについて､以下のように述べている。

これらのコミュニケーション機能を支えているのは「ちょっと」の意味根幹である「少し」を用いることによって、文内容を軽減し、婉曲的な表現にすり換えられる働きがあることであろう。これはポライトネスの視点から、岡本ら（2003）が述べているように､「ちょっと」には聞き手と話し手の双方のフェイスを守るコミュニケーション機能があることと重なる（p. 70)。

そして、日本語初級教科書における「ちょっと」の使用に照らしながら、その指導法について、次のように指摘している。

「ちょっと」を適切に解釈するには、話し手と聞き手の関係をはじめ、各意味用法・機能の違いが明確になるような場面設定をできるだけ多く提示することが重要である。（中略）学習者の初級レベル終了時までには、機会を設けて「ちょっと」の多様な用法を整理する。特に､「程度が高い」意味の「ちょっと」の用法や､「呼びかけ」､「間つなぎ」の機能は軽視されがちであるが、これらが日本語学習者にはミスコミュニケーションの要因となっていることを踏まえ、運用よりも、まず理解のための意味用法・機能の知識定着を重視する。それにより､「ちょっと」の過剰使用や、書きことばや改まった表現にも「ちょっと」を使ってしまう誤用も防げると考える（p. 73)。

岡本・斉藤（2004）の研究は､「ちょっと」のコミュニケーション機能から、教え方までを提示しており、日本語学習者にとって大変示唆的な研究であると思われる。しかし、実際に収集された自然会話をもとにして分析されたものではない点に課題を残している。

次に、複数の日本語教科書において､「ちょっと」がどのように扱われているのかを比較した研究を見ていく。

真嶋・濱田（1999，32）は、『日本語文型辞典』[9] の「ちょっと」の分類をもとに、13 種類[10] の初級日本語教科書でどのように扱われているかを分析している。分析した結果を示す表を以下に引用する。

表２：「ちょっと」の意味・用法の教科書の扱われ方

意味・用法 教科書	量・程度 1	婉曲 2	＋否定的意味 3.1	＋否定形 3.2	否定の暗示 4	呼びかけ 5
JFB	△	○				
IMJ	◎	○＊				
初歩		○				
CMJ		○＊	◎		○	
BJ	○		○		○	
JSL	◎＊	◎＊	○＊	○＊	◎＊	
文化	○	◎	○		○	
基礎	◎	◎				
J 初級	△				○	◎
話そう	◎	○	◎	◎		
SFJ	◎＊	◎＊	○	◎＊	◎＊	◎＊
TJ	○	◎			◎	○
初級 J	○	◎	○		▽	

◎＊；ダイアログに提出され、練習問題、説明がある

◎　；ダイアログに提出され、練習問題がある

○＊；ダイアログに提出され、説明がある

○　；ダイアログに提出されるが、練習・説明なし

△　；語彙の紹介のみ

▽　；練習問題にのみ提出

それぞれの例として挙げられている教科書の例文を以下に示す。下線は、真嶋・濱田（1999）によるものである。

・「量・程度」

不動産屋：このアパートは総武線の東中野と東西線の落合の間です。

西条敬子：どちらの駅のほうが近いですか。

不動産屋：落合の方がちょっと近いです。でもどちらもだいたい同じくらいですよ。

（文化 18 課）

・「婉曲」

「ちょっと待ってください」　（文化 27、初歩 14 課、基礎２課、IMJ10 課）

・「＋否定的意味」

京子：「良子さんのコート暖かそうですね。」

良子：「ええ、暖かいですよ、でもちょっと重たいんです。」　（文化 23 課）

・「＋否定形」

A:お兄さんいらっしゃいますか。

B:兄ですか。ちょっとおりませんけど。　（JSF11 課　Drlli）

・「否定の暗示」

ルイン：それから、きょうはこの本を借りたいんですが。

司書　：あ、その本はちょっと。

ルイン：え。

司書　：黄色いラベルのついた本はだめんなんです。　（CMJ　11 課）

・「呼びかけ」

木村：ああ、山下くん。ちょっと。

山下：はい、あ、先生。こんにちは。

木村：こんにちは。　（SFJ　1 課）

上の表２から、真嶋・濱田（1999, 32-33）は、a～e の点を指摘している。以下に引用する。

a.「少し」の意味で用いられる「ちょっと」（分類１）は、意外にも学習項目にあまり入っていない

b.程度の軽さ・依頼の婉曲表現（分類 2）は、どの教科書でも比較的よく扱われている。

c.「ちょっと」を会話表現として重要視している教科書とそうでない教科書の差がみられる。

d.特に〈SFJ 〉〈JSL〉には、詳しい説明が教科書に記述されているが、他の教科書で教師によって説明されるようになっている可能性もある。

e.語彙としてのみ提出される場合、学習者は実際に使えるようになることを期待されている

のだろうか。

また、真嶋・濱田（1999）は、上級の日本語学習者に「自分が『ちょっと』の意味・用法を理解しているかどうかを判断してもらう」というアンケート調査を行った。その結果として、「上級になっても『ちょっと』の用法が完全には理解されていないことがはっきりした。」と結論づけている。

つまり、真嶋・濱田（1999）の調査から、初級の教科書における「ちょっと」の扱いにばらつきがあること、また、「ちょっと」の意味・用法については、上級の日本語学習者にとってもわかりにくいものであるということがわかった。

これまで「ちょっと」に関する先行研究について概観してきた。以下の課題が考えられる。

- 自然会話を分析し、「ちょっと」がどのように使われているのかを、実際の場面を通して調べる。
- 「ちょっと」の意味・用法について、初級の日本語学習者はもちろん、中・上級の日本語学習者に対するわかりやすい説明と教育を考える。

【注】

1）滝浦（2008, 11）によると、フェイスについて、ゴフマンは、中国語の「面子」に示唆を得て「フェイス」の概念を立てた。ただし、東洋的な「面子」や「体面」が、すでに確立した社会的地位などを反映した比較的固定的な自己像であるのに対して、ゴフマンの「フェイス」は、出会いごとに異なるような流動的な自己イメージであり、両者はかなり異なった概念であるとしている。

2）詳しくは、鈴木（1997）、彭（2004）、守屋（2003）、山岡他（2010）、姚(2005)などを参照されたい。

3）Grice（清塚（訳）1989,37）は、協調の原理（cooperative principle）について、次のように述べている。

会話の中で発信をするときには、それがどの段階で行われるものであるかを踏まえ、また自分の携わっている言葉のやり取りにおいて受け入れられている目的あるいは方向性を踏まえた上で、当を得た発言を行うようにすべきである。

また、Grice（清塚（訳）1989,37-39）は、この原理が実効性を持った原理であることを論証するために、量、質、関連性、様態の４原則を立てた。詳しくは、以下のようになる。

・量の原則

1.（言葉のやり取りの当面の目的のために）要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい。

2.要求されている以上の情報を与えるような発言を行ってはならない。

・質の原則

真実であることを発話すること

1. 偽だと思うことを言ってはならない。

2. 十分な証拠がないことを言ってはならない。

・関連性の原則

関連性のあることを言いなさい

・様態の原則

明瞭な言い方をすること

1. 曖昧な言い方をしてはならない。

2. 多義的な言い方をしてはならない。

3. 簡潔な言い方をしなさい（余計な言葉を使ってはならない）。

4. 整然とした言い方をしなさい。

4）ゴフマン（1967）は、フェイスを以下のように定義している。

そのつどの出会いのなかで、さまざまな社会的属性を尺度として自分と相手がそれぞれに想定し相互に認知しあう、互いの自己についての積極的価値のことである。

5）鄭（2010）が用いた用例は、以下の小説によるものである。

『点と線』松本清張

『恋せども、愛せども』唯川恵

『天国までの百マイル』浅田次郎

『暗いところで待ち合わせ』乙一

『フラガール』白石まみ

『チルソクの夏』佐々部清・橋口いくよ

『天使』佐藤亜紀

6）フェイスについて、鄭（2011）は、以下のように説明している。

人間はだれもがフェイスを持っている。B&L によれば、対人コミュニケーションに関わる人間の基本的欲求に、次のような二つの相反する欲求がある。

「ポジティブ・フェイス」⇒他者から理解され、共感され、称賛されたいという欲求。他者との心理的距離を縮めたいという欲求。

「ネガティブ・フェイス」⇒他者に立ち入ってほしくない、邪魔されたくないという欲求。他者との心理的距離を保ちたいという欲求。

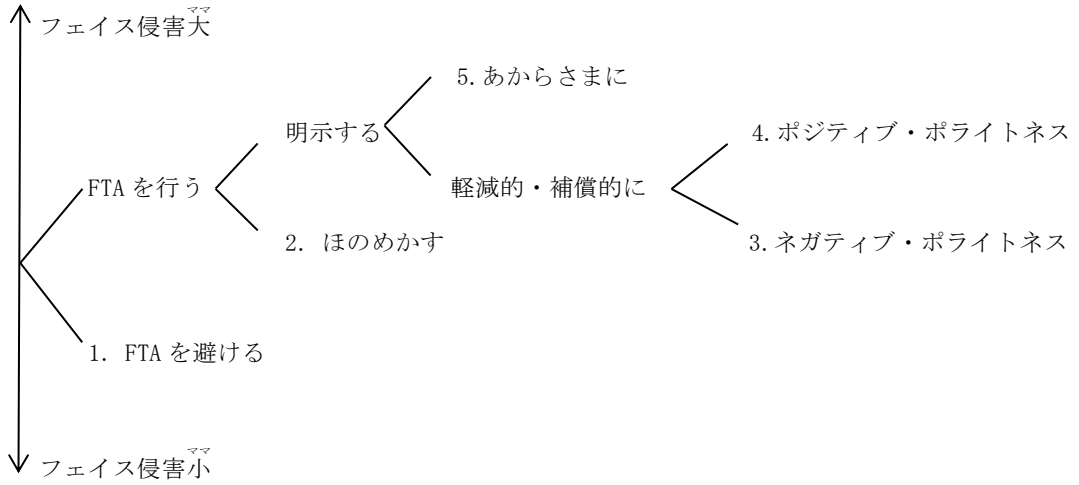
しかし、対人コミュニケーションにおいて、大抵の場合、不可避的に相手や自分のフェイスを侵害してしまうものがあり、B&L（1987）は「フェイス」侵害する行為と呼んだ。

7）「ポライトネス・ストラテジー」について、鄭（2011）は、以下のように説明している。

日常会話で相手のフェイスをなるべく侵害しないように、或いは相手のフェイスを侵害する際に、そのフェイスの侵害度を軽減するために、表現・伝達される具体的な手段のことを、「ポ

ライトネス・ストラテジー」と呼ぶ。B&L(1987)は、下の図表（1）を提出しその場面での FTA の度合（W 値）が大きいほど番号の大きいポライトネス・ストラテジーを使用するとしている。日常の言語行動において、相手のフェイス侵害が一番少ないのが、フェイス侵害を行わないことで、番号１にあたる。

図示（1）



8)「ほのめかし」について、鄭（2011）は、以下のように説明している。

「ほのめかす」⇒相手とのやり取りの言語行為の中で、FTA を行わないわけではないが、FTA を行うことを避けることを優先とし、間接的に相手に発話意図を表すストラテジーが、ほのめかしである。「ネガティブ・ポライトス」⇒相手のネガティブ・フェイスを満たす働きかけ。

9)『日本語文型辞典』における分類は、以下のようなものである。

1.量の少なさ・程度の低さ「ちょっと」	
2.程度の婉曲「ちょっと」	
3.否定的意味の和らげ	3.1.「ちょっと」
	3.2.「ちょっと…ない」
4.否定の暗示「ちょっと」	
5.呼びかけ「ちょっと」	

10）真嶋・濱田（1999）が用いた 13 種類の教科書は以下のようなものである。＜＞のなかは、真嶋・濱田（1999）が略称したものである。

Japanese For Beginners	＜JFB＞（1976）学研
Introduction to Modern Japanese	＜IMJ＞（1977）The Japen Times
日本語初歩	＜初歩＞（1981）国際交流基金

A Course In Modern Japanese	＜CMJ＞（1983）名古屋大学
Business Japanese	＜BJ＞（1984）日産自動車海外部
Japanese：the Spken Language	＜JSL＞（1987）Yale University
文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ	＜文化＞（1987）文化外国語専門学校
新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ	＜基礎＞（1990/1994）スリーエーネットワーク
日本語初級Ⅰ・Ⅱ	＜J 初級＞（1991）東海大学留学生教育センター
日本語で話そう 1・2	＜話そう＞（1991-92）ELEC
Situational Functional Japanese	＜SFJ＞（1991-92）筑波ランゲージグループ
Total Japanese 1	＜TJ＞（1994）早稲田大学　国際部
初級日本語　新装版	＜初級 J＞（1994）東京外国語大学留学生日本語教育センター

第 3 章　　自然会話の「依頼」・「断り」に見られる「ちょっと」の考察

3.1. はじめに

本章では、対人コミュニケーションのなかで、明確な意図が存在する「依頼」、「断り」の場面に注目し、「ちょっと」がどのように用いられているのか、それぞれの場面において、どのような役割を果たしているのかについて明らかにしていく。また、「ちょっと」の機能について、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown & Levinson（1987）のポライトネスの理論でどの程度説明できるものであるのかについて試みる。そして、同じ「依頼」・「断り」であっても「ちょっと」が用いられない場合、日本語母語話者がどのようなストラテジーを用いて、お互いの人間関係を調整し、配慮しているのかについて調べる。さらに、「ちょっと」の使われ方について、中国人学習者から見た場合に何が学習上の困難点となるのかについて考えてみたい。

3.2. 研究の対象と方法

研究対象とするデータは以下である。

宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011 年版』　（以下、自然会話「BTSJ」とする）」のうち、「依頼」、「断り」[1] という場面である。分析対象としたのは、このコーパスに収録されている 39 会話のうち[2]、36 会話（47 分 25 秒）である。それぞれの場面における「ちょっと」を抽出して、その機能を以下の①－⑨に分類する

これらの場面を選んだ理由は２つある。１つ目は、自然会話「BTSJ」は、日常生活における自然な会話を集めたものであり、話しことばとして分析の価値が高いことが挙げられる。２つ目は、「依頼」、「断り」の場面は、日常生活の中で、日本語学習者が日本で生活している以上、必然的に遭遇する場面でもあるため、それを理解するためのインプットとして重要性の高い場面と考えられるからである。

研究方法について、以下に説明する。

- 「ちょっと」の談話機能について、岡本・斉藤（2004）の分類を踏まえて分析するが、　①の「依頼や、希求、指示行為の負担をやわらげる」を「自分以外の人（多くの場合は聞き手）に行為を求める場合、負担を軽減する（以下「聞き手への負担要求を軽減する」）」とし、依頼の内容という本題に入る前に用いられる場合は、「依頼の予告」とする。また、③の「断りを受けやすくする」という「断り」自体が否定的内容だと判断されるため、③を②の「否定的内容の前置き」として分析する。
- また、秋田（2005）の「自分の行為が大げさに響かない」という分類を参考に、「自分の願望・行為・状態を控え目に表す[3]」と拡大し新たに設けた。さらに「程度」、「量」という基本用法も加えて分析していく。

・ つまり、本章で用いる分類は、次の①ー⑨となる。なお、明確に①ー⑨のいずれかに分類できないものについては、前後の文脈によって、より近いものに分類した。分析にあたって、「ちょっとした～」、「ちょっとだけ」、「ちょっとしか」のような固定した用法については、分析対象外とする。

①「聞き手への負担要求を軽減する」

依頼や指示など相手に行為要求を求めるときに、その行為の負担をやわらげ、相手の心的負担を軽減する役割を果たすものである。

②「依頼の予告」

相手に何かをしてもらいたいときに、その意図を前もって告げ知らせる働きがある。

③「否定的内容の前置き」

「ちょっと」が否定的な内容のマイナス度を小さくする枕ことばとなる。マイナスイメージの表現や、重大ではないが不利益なこと・不都合なことなど利害関係が起こる可能性がある場合に用いられる。

④「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」

ある物事に対する自分の望ましいという気持ちを表したり、また、自分の行為や状態を表したりすることを控え目に表す。

⑤「呼びかけ」

「ちょっと」自体に感動詞として、注意を喚起する働きがある。

⑥「とがめ」

「ちょっと」を用いることでその不満、怒りを表出し、「ちょっと」にプロミネンスを置くことにより話し手の不満や怒り、威嚇、詰問、抗議などの感情を強めることができる。

⑦「間つなぎ」

「あの、そのう、ちょっと、こう、なんて言ったらいいのか」のように、言いよどみを埋める間投詞の働きがあり、沈黙を回避しようとする場合に用いられる。

⑧「程度」

物事の程度を表し、その程度は文脈により「高」、「低」を表す場合がある。

⑨「量」

数量・時間などが少ないことを表す。

3.3. 分析の結果

3.3.1.「依頼」に見られる「ちょっと」

「依頼」、「断り」の場面のうち、「依頼」に用いられている「ちょっと」について分析した結果が以下の表１である。

表１ 「依頼」における「ちょっと」の機能による分類 単位：個

「ちょっと」の機能分類	出現回数	代表例
① 聞き手への負担要求を軽減する」	7	ちょっと協力してもらえ(ママ)かなー(63-13.2)
②「依頼の予告」	28	あのー、ちょっとお願いがあるんだけど、(88-12.1)
③「否定的内容の前置き」	41	ちょっと都合が悪くなっちゃったので(82-29)
④「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」	17	私ちょっと“やり、あ、やってみます”って言っちゃったんですけど, (59-18.4)
⑤「呼びかけ」	0	
⑥「とがめ」	0	
⑦「間つなぎ」	0	
⑧「程度」	5	月曜日の朝 9 時から、ちょっと遠いところなんだけど。(66-13)
⑨「量」	2	なんか、(うんうん)ちょっとこないだ(うん、はい)なんかゼミのほうでなんか (59-18.1)
合 計	100	

表１からわかるように、「ちょっと」の談話機能による分類のなかで、③「否定的内容の前置き」が多く現われている。次に、②「依頼の予告」、④「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」と続く。「～てもらえ（る）かなー」のような依頼表現とともに、用いられる①「聞き手への負担要求を軽減する」は、わずか７個しかなく、決して多いとは言えない。具体的な依頼内容を伴わない「ちょっとお願いがあるんだけど」のような表現とともに用いられることが多く、ほぼ４倍であった。つまり、このデータにおいて「ちょっと」は、その後接する負担を軽減するというより、予告するという機能

を大きく担っていると考えられる。

以下では、表１に多く見られる②、③、④について、実際の会話例を検討し、「依頼」における「ちょっと」の機能について改めて考えてみたい。

3.3.2.　「依頼」の予告としての「ちょっと」

本項では、表１における②「依頼の予告」を表す「ちょっと」について、その前後にどのような表現形式、要素と共起しているのかを見ていく。「ちょっと」を中心とした部分[4)]を分析した結果が表２である。

表２　依頼の予告としての「ちょっと」の使用　　Ｎ＝28　　単位：個

前接表現		後接表現	文末表現
・言い淀み　:21(75%) ・日時　:2(7%) ・謝罪　:1(4%) ∅:　4　(14%)	**ちょっと**	**・依頼・用件の予告:24(86%)** ・都合の確認　:4(14%)	・言いさし:20(71%) ∅:　8　(29%)

注：「∅」という記号は使用がないということを表している。

表２から、「ちょっと」の前接には「言い淀み（あの、あのさ、あのね)」といった表現が際立っている。また、後接表現では「都合の確認」より、「依頼・用件の予告（お願いがある)」のような表現は圧倒的であるのがわかる。そして、文末表現における「言いさし」について、具体的には「けど」、「あって」、「かな」といった表現が多く見られた。つまり、「ちょっと」はその前後にさまざまな要素と共起し、予告する場合のしかたがあるということがわかる。

表２で見た表現形式を用例で示すと、次のようになる。

例１　あ、あの、　**ちょっと**　お願いがあったりするん<ですけど>{<}。4-58-9
（言い淀み）　（依頼・用件の予告）　（言いさし）

例２　ごめんね、なんか急になんだけど、**ちょっと**、お願いがあっ　てね、
（謝罪）　（依頼・用件の予告）　（言いさし）
4-90-11.2

例３　今　**ちょっと**　時間平気かな？
（日時）　（都合確認）　4-82-7

例１～例３からわかるように、「お願いがある」、「時間平気かな」といった表現は、依頼の内容を指しているのではなく、話し手が今から依頼という行為を遂行しようとする意味を表し、前に「ちょっ

と」を用いることによって、聞き手にその依頼を受け止める心の準備を与えようとする依頼の予告としての働きが大きく、先行研究で見たような「聞き手への負担要求を軽減する」機能より、「聞き手の心構えを作らせる」機能が中心となっている。このような表現は、依頼の決まり文句として位置づけることができるだろう。

そして、そこに用いられる「ちょっと」は、それぞれ Leech（池上・河上（訳）1983）の原理における「他者に対する負担を最小限にせよ」という「気配りの原則」と、Brown & Levinson（1987）の「他者に邪魔されたくない、踏み込まれたくない」というネガティブ・フェイスに配慮したネガティブ・ポライトネスとして、動機づけられたものだと考えられる。

それでは、「ちょっと」を用いない場合、日本語母語話者はどのような表現を使用し、聞き手に配慮を表しながら依頼しているのだろうか。次節で考察する。

3.3.3. 「ちょっと」が用いられない場合の「依頼」の表現形式

「ちょっと」を用いて、依頼内容を軽減することがないならば、日本語母語話者はどのようなストラテジーを用いて、聞き手に配慮を表しているのだろうか、本章での調査では、以下の４つの特徴が観察された。会話例とともに見ていく[5)]。（下線と太字は筆者、以下も同様）

〈1〉１人称化ストラテジー：表現例「～と思う」

例４

A1： 明日、あの、言語調査の実験に参加する予定だったんだけど、行けなくなったんですよ。

B2： あーー。

A3： それで、うん、「JOK09 名」さんなんか、うん、行ってもらえるかなー**<u>と思ったんです</u>**<u>けど</u>。

B4-1：〈あー、ごめんね〉{〉}、〈明日ねー〉{〈},,

A5： 〈ううん〉{〉}。

B4-2：そう、午前中バイトが入っててー。 4-61-13

例４における「と思う」というのは、当然のことながら「私はあなたに行ってもらいたいと思う」という意味をしている。つまり、２人称への働きかけとして表現するのではなく、「私」の問題として述べることによって、聞き手が感じる心的負担を軽減する役割があると考えられる。その上に、「かな」を用いて疑問の意味が添加されることにより、依頼を受けるか断るかの意思決定権を相手に委ねるという配慮も示されている。

〈2〉３人称化ストラテジー：表現例「っていう」

例５

Ａ1-1：そこでなんか、あの、言語調査の実験があって,,

Ｂ2：　うん。

Ａ1-2：で、それに明日行くはずだったんですよ。

Ｂ3：　うん。

Ａ4：　で、なんか行くはずだったですけど、(うん)急にどうしても行けなくなっちゃって。

Ｂ5：　うん。(中略)

Ａ6-1：もし…、もしお願いできたら,,

Ｂ7：　うん。

Ａ6-2：代わりに行っていただけませんか**っていう…**〈笑いながら〉。　　4-55-35.3

例５における「っていう…」という表現には「お願い」が省略されているのがわかる。つまり「代わりに行っていただけませんかっていうお願いです」であり、他人事のような表し方を用いることにより、聞き手に与える心理的負担を相対的に軽減することができる。

〈3〉例示化ストラテジー：　表現例「～たり」

例６

Ａ1：　あの一、国立国語研究所っていうところで、(はい)言語調査に関する実験に参加する予定だったんですよ、私が。

Ｂ2：　はい。

Ａ3-1：で、それに行けなくなっちゃったんで,,

Ｂ4：　はい。

Ａ3-2：あの、もしよかったら代わりに、行っていただけ**たり**したらなあと思うんですけど。

Ｂ5：　国立研…〈笑いながら〉。

Ｂ6：　えっ、それはなん、なんか…〈笑いながら〉。　　4-48-12.2

例６では、聞き手に依頼の内容を強制するのではなく、「例示」を表す「～たり」という表現を用いて、「他の選択肢もある（断ってもいいよ)」ということを聞き手に暗示し、聞き手が断りやすい形を提供するという話し手の配慮が読み取れる。

〈4〉「笑い添加」[6] ストラテジー

上記の例５、６における「笑いながら」も「笑い添加」ストラテジーになる。

例７

Ａ1：「JSK04 名」空いてないかなと思って。

Ｂ2：空いてはいるけど行きたくない〈笑う〉。

Ａ3：〈2 人で笑う〉行ってよー〈笑いながら〉。

Ａ4：行ってくれよー〈**笑いながら**〉。　4-69-17

例７では、「行ってくれよー」と、直接依頼した直後に、「笑い」という表現を挿入することによって、「依頼」による聞き手にもたらす不快感を緩和する役割が考えられる。

以上の〈1〉～〈3〉は、直接的に依頼することを避ける間接化であると言えよう。また、〈4〉のように直接的に依頼しても「笑い」を用いて緩和する配慮が見られる。

このように、自然会話における依頼場面では、「ちょっと」というよりは、むしろ１人称化の「～と思う」、３人称化の「っていう」、例示化の「～たり」、「笑い添加」といった表現が配慮表現としての機能を担っているのが大きいと言えよう。そして、これらの表現は、負担を軽減する表現方法の多様性を示すものであり、そのほとんどがネガティブ・ポライトネスに重きを置く日本語の特徴を示していると言えるだろう。

また、この結果により、初級の日本語教科書で、相手に行為を要求する場合の例文として頻繁に登場する「ちょっと～てください（～てもらう）」という単純な表現形式について、中・上級レベルの日本語教育においては、さらに複雑な配慮表現の指導が必要であることが示唆される。

続いて、③「否定的内容の前置き」としての使われ方について見ていく。

3.3.4.「依頼」に見られる否定的内容の前置きとしての「ちょっと」

本項では、表１に多く見られた③「否定的内容の前置き」としての「ちょっと」について考察していく。「依頼」に見られる否定的内容の前置きとしての「ちょっと」について、（１）使用の多様性と（２）否定的内容の２点から見ていく。

（1）使用の多様性について

否定的内容とは、形式として否定形を伴うということではなく、文脈あるいは前提から、その内容が否定的だと考えられるものを指している。「ちょっと」は、具体的にどのような否定的内容の前置きとして用いられ、何の否定的内容を予告するのか、その役割とは何か、またそれは中国人学習者の視点から見た場合、何か学習上の困難点となるのかについて考えてみたい。

分析資料から、「ちょっと」が予告する否定的内容について、以下のような多様性が見られた。その代表例を以下に示す。

a.「あの、実はですね、**ちょっと**部活とは関係ないんですけれども、（54-4.1）」

b.「うん…、まあ、お金とかも出ないんで**ちょっと**、頼みにくいんだけど。（69-41）」

c.「そう、なんかね、欠員が出ると、実験だから**ちょっと**足りなくなると困るって言われちゃって…（82-44）」

d.「でも、なんかそれに**ちょっと**急用できて行けなくなってしまって,,（88-22）」

a の「ちょっと部活とは関係ない」というのは、話し手がこれから聞き手に依頼しようとする事柄は、話し手と聞き手が属している部活と関係がないために、聞き手にとって、「当然引き受けるべき負担ではない負担を求められる」という否定的内容が予告されている。

b の「ちょっと」については、聞き手が自分の頼みの受け入れを拒否するということを察知しながら、さらに頼もうとするという否定的内容が暗示されている。

c の「ちょっと」は、自分が参加すべき実験に欠席してしまうと、その実験ができなくなるという困った状況を、まったく関係のない聞き手に提示し、聞き手に生まれる共感の負担になってしまうという否定的内容を表している。

d に用いられている「ちょっと」は、一見自分（話し手）の出来事について述べているように見えるが、実は、このような出来事があったから、本来自分が持つべき負担であることを、聞き手に負わせるという否定的内容が予告されている。

以上の用例からわかるように、「ちょっと」が修飾するのが、それに後接する部分と考えると、ますます意味が理解しにくくなるという修飾の複雑さがあり、その背後には、文脈を読むことが強く求められる特徴が見られた。それが前提となって、「ちょっと」の意味・機能が生まれるという複雑さが現われている。このような使われ方について、おそらく母語話者である日本人は簡単に認識できるかもしれないが、中国人学習者の場合は、容易には見極めることができず、使用することはもちろん、理解するだけでもきわめて困難となろう。

（2）否定的内容について

「ちょっと」が修飾する否定的内容について、実際の会話のやりとりのなかで、どのように用いられているのかを見ていく。

例 8

A1：　あのね、(はい)あのね、明日実は私が、(はい)明日の朝 9 時ぐらいから、(はい)国立国語研究所って知ってる?。(中略)

B2：　はい。

A3：　なんかそこに行ってね、言語調査に関する実験に参加することになってたんだ。

Ｂ４：　はい。

Ａ5-1：でも、なんかそれに**ちょっと**　急用できて行けなくなってしまって,,

Ｂ６：　はい。

Ａ5-2：もしよかったら行ってもらえないかなと思ったんだけど。

Ｂ７：　それはどこでやるんですか?。

Ａ８：　あの一埼玉のほうなんだけど。　　4-88-22

例 8 では、文脈からわかるように、Ａ5-1 における「ちょっと」は「行けなくなってしまう」という否定的内容にかかっているようにみえるが、実は聞き手であるＢに行ってもらいたいという話し手の本音を表しているＡ5-2「もしよかったら行ってもらえないかなと思ったんだけど」にかかっていることを、日本語母語話者は普通に認識しているのであろう。

つまり、もともと話し手自分自身が責任を持ってやらなければならないことを、Ｂに負わせようとすることが含意される＝相手の負担で自分の利益を得ようとするもので、Leech（池上・河上（訳）1983）の「気配りの原則」に違反するものだと考えられる。しかし、「ちょっと」を用いて、もちろん相手にかかる負担度が減るわけではないが、配慮が必要だと理解していることを示し、対人コミュニケーションの相手に値する人間であることを示すのである。これこそが日本人の配慮のメカニズムのあり方だと認識することができよう。

このような「ちょっと」の複雑な配慮の表し方は、中国人学習者にとって、非常にわかりにくいもので、その上、日本語学習者は往々にして、文字通りの意味をとる傾向があるため、「ちょっと」はＡ5-2 の内容にかかっていると理解できず、直後の「急用できて行けなくなってしまって」にかかっていると思い込み、単に話し手は自分の不都合について述べているというふうに捉えてしまう可能性が高いと思われる。

続いて、次の用例について見てみよう。

例 9

Ａ1-1：なんかねー、国立国語研究所っていうところでね、（うんうん）日本語の会話調査に関する実験っていうのがあって,,

Ｂ２：　〈うん〉{〈}。

Ａ1-2：私さ、こ、高校の時の友達と行く予定だったんだけど（中略）行けなくなっちゃって。

Ａ３：　「JSK04 名」空いてないかなと思って。

Ｂ４：　空いてはいるけど行きたくない〈笑う〉。

Ａ５：　行ってくれよー〈笑いながら〉。

Ｂ６：　うんーーー、い、いやだ〈笑う〉。言語でしょ?、だって。

Ａ７：　言語。うん、なに、だめ?。

Ｂ8：　苦手。

Ａ9：　〈軽い笑い〉うん…、まあ、お金とかも出ないんで**ちょっと**、頼みにくいんだけど。

Ａ10-1：とか言いながら,,

Ａ10-2：〈頼ん〉{〉}でるけど。

Ｂ11：〈笑いながら〉えーーーーーえーと。　4-69-41

例９では、Ｂ4 の「行きたくない」、Ｂ6 の「いやだ」、Ｂ8 の「苦手」といった表現から、聞き手ＢはＡの依頼を受けたくないという意志を表しているのがわかる。これを聞いたＡは、本当は聞き手Ｂの意志通りに「わかりました」と自分の頼みを断念すべきであったが、Ａ9 の「ちょっと頼みにくいんだけど」という発話では、「ちょっと」を添加することによって、その頼みにくさを小さくしているようなニュアンスが読み取れる。つまり、聞き手の意志に反するものとなり、Leech（池上・河上（訳）1983）「合意の原則」に破る言語行動になると判断できよう。しかし、Brown ＆ Levinson（1987）の理論で説明すると、話し手が無理に頼む＝「相手の私的領域を踏み込む」という行為に配慮したネガティブ・ポライトネスとしての働きが考えられる。

これに対して、中国人学習者の視点から見た場合、Ａ9 の発話は「ちょっと」を入れることによって、「自分の頼みはそんな難しいことではない」という意味に捉えられ、聞き手への気遣いに欠ける表現になると普通は思うであろう。なぜなら、Ａ9 の「ちょっと」は前後の文脈に依存するもので、「うん…、まあ、お金とかも出ないんで**ちょっと**、頼みにくいんだけど」を中国語に訳されると“嗯…，也得不到什么钱，**真的是太**（本当に／とても）难拜托你了。”[7] になり、「**ちょっと→真的是太**」のように、日本語と正反対の意味として訳されるべきであるからである。つまり、日本語では、いくら強引に頼みたい場合でも「ちょっと」を用いて、間接的に表現し、相手と適度な距離を置きながら人間関係を調整するネガティブ・ポライトネスへの志向が示唆される。それに対して、中国語では、直接的な表現を用いて、「あなたは私の依頼を受けていれてくれると信じている」と親近感を示すポジティブ・ポライトネスへの志向が見られる。

こういった母語の影響を受ける可能性があるなかで、「ちょっと」がネガティブ・ポライトネスとして機能するということがわかりにくいのであろう。

3.3.5.　「依頼」に見られる自分の願望・行為・状態を控え目に表す「ちょっと」

本項では、自分の願望、あるいは行為・状態を表す場合、日本語母語話者は「ちょっと」を用いてどのように表現するかについて、具体的な会話を通して見ていく。

例 10

Ａ1-1：あの調査があるって言われて、それでなんか興味ある人やりませんかって話してて,,

Ｂ2：　うんうん。

A1-2：私**ちょっと**“やり、あ、やってみます”って言っちゃったんですけど,,

B3：　うーん。

A1-3：なんかそれは明日になってて、(あ)でなんか、なんか夏に**ちょっと**通訳のバイトしようとしてて,,

B4：　<そっか>{<}。

A1-4：<そっちで>{>}なんかそれの連絡がきてて、なんかそれの採用テストみたいなのが(はい)明日になっちゃったって言われて、(中略)

B5-1：でもね、(はい)ごめん,,

A6：　はい、いいです。

B5-2：私ね、今青森県にいるんだ。

A7：　あーー、そうですか[とってもびっくりしたようで]。　4-59

例 10 では、A1-2 と 1-3 における「その言語調査をやってみる」と、「通訳をやりたい」といった言行はもっぱら、話し手自分自身の希望・願望・状態を表す表現であるため、聞き手に受け入れやすくするよう、傲慢な印象を与えないよう「ちょっと」を用いて控え目に表現している。つまり、自分の願望に対して、聞き手はどのような意見を持っているのかについての予想が困難なもので、なるべく相手との意見相違を小さくしようとする話し手の謙遜を込めた日本人の配慮を表している。すなわち、Leech（池上・河上（訳）1983）の「合意の原則」によって動機づけられたものだと解釈できる。

このように、日本語ではたとえ、自分自身のことについて言及しても、常に聞き手の気持ちを予測し、考慮する日本語母語話者の心構えが示されている。このような現象は、日本語母語話者なら当たり前なことであるかもしれないが、中国人学習者にとっては、他者の気持ちまでかかわるものとしての理解が困難なもので、単なる自分のことについて述べたり、または文法レベルの量・程度が「少し」として捉えたりする可能性が考えられる。

以上、「依頼」における「ちょっと」の使われ方について考察してきた結果を、以下にまとめる。

1）「依頼」に用いられる「ちょっと」は、「聞き手への負担要求を軽減する」機能というより、むしろ、依頼の予告として「聞き手の心構えを作らせる」機能が大きいと考えられる。また、依頼表現において、配慮表現として用いられているのは、「ちょっと」とよりも、1人称化の「～と思う」、3人称化の「っていう」、例示化の「～たり」、「笑い添加」などといったストラテジーと併用していることが明らかになった。

2）否定的内容の前置きを表す「ちょっと」について、否定的内容との修飾関係が複雑で、さらにその背後には、前後の文脈を読まないとわからないような、文脈を読むことが強く求められる特徴があった。依頼することによって、相手の私的領域に踏み込むことに対するネガティブ・ポライトネスとしての働きが考えられる。

3）また、たとえ自分自身の願望・行為・状態について言及しても、聞き手と違う意見にならないように、常に聞き手の気持ちを予測し、考慮する日本語母語話者の心構えが示されている。

4）そして、中国人学習者にとって、依頼表現としての「ちょっと」に比べ、否定的内容の前置きと自分の願望・行為・状態を控え目に表す「ちょっと」の使用背景と動機に対する認識が難しく、さらに「ちょっと」の捉え方についても、文化の差の影響も考えられるため、理解が難しいだけではなく、習得することは一層困難だと予想される。

次節から、「依頼」、「断り」のうちの「断り」における「ちょっと」について見ていく。

3.3.6.「断り」に見られる「ちょっと」

本節では、「断り」に見られる「ちょっと」の使われ方について、実際の会話の中でどのように用いられているのか、どのようにして相手との関係を損なわずに断っているのかについて考察する。

まず、「ちょっと」の分類機能について考察してきた結果を、以下の表３に示す。

表３　「断り」における「ちょっと」の機能による分類　　単位：個

「ちょっと」の機能	出現回数	代表例
①「聞き手への負担要求を軽減する」	4	あーーーー、あ、ちょっと待ってね、(65-21-1)
②「依頼の予告」	0	
③「否定的内容の前置き」	25	うんー、ごめん、ちょっと〈無理かも〉{〈}。(55-123)
④「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」	0	
⑤「呼びかけ」	0	
⑥「とがめ」	0	
⑦「間つなぎ」	2	あーー、こう、うんーーー、ちょっと、〈笑い〉、うん…、どうしたら・・・、　(84-31)
⑧「程度」	1	ちょっと電波悪いみたいなんで。(82-13)
⑨「量」	2	午前中、えっ?、えっ、ちょっとなら（時間）。(75-8)
合　計	34	

表３からわかるように、③「否定的内容の前置き」という機能の使用は、ほかの機能に比べて明らかに多かった。それは、「断り」では、当然のことながら「断り」という否定的内容が多くなるからであろう。そして、①「聞き手への負担要求を軽減する」機能が２番目に多いが、わずか４個しかなかった。しかし、①に分類されている「ちょっと」は、形式的にその分類に属しているが、実際の会話のなかでは、前後の文脈を見てみると、それと異なる働きがあるように見える。具体例を次項で見て

いく。

3.3.7.「断り」に見られる聞き手への負担要求を軽減する「ちょっと」

主に「依頼」で見られるであろう聞き手の負担要求を軽減する機能が、「断り」にも出現している例があった。以下の会話例を用いて検討していく。

例 11

A1-1：あのですね、(うん)国立国語研究所とかいうところで,,

B2：　うん。

A1-2：やる言語調査に,,

B3：　うん。

A1-3：あのー、参加する予定だったんですけど、(うんうん)こう協力者として??,,

B4：　うんうん。

A1-4：(略)急に行けなくなっちゃって、代わりに(うん)行ける人探してるんですよ。

B5-1：　あーーーー、あ、ちょっと待ってね、今、あ、(中略)明日ね、そうなんだよね、新宿に、で(はい)コンタクトを<買いに行かなきゃいけないから>{<},,

A6：　<あーーー>{>}。

B5-2：たぶん難しいんだけど。

A7：　あ、そうですか。　4-65-21-1

例 11 では、A1-4 の間接的な依頼に対して、受け入れられない事情のあるＢがどう返事したらいいか困っているのがわかる。文脈から見れば、ここでの「ちょっと待ってね」の用い方は、依頼であることを理解したＢが、断りの理由を考える時間を確保するための発話だと考えられる。つまり、「依頼すること」を「待って」＝「やめて」と解釈できよう。すなわち、例 11 における「ちょっと」は「聞き手の負担要求を軽減する」というより、実に話し手自身が「断る」という言語行動を避け、自分の立場を守るための働きとしての解釈が適切であるように思われる。

これは、Leech（池上・河上（訳）1983）の「気配りの原則」に違反するものだと判断できよう。しかし、Brown ＆ Levinson（1987）の理論による説明が通じるものとして、相手を断ること＝相手のネガティブ・フェイスを脅かす行為になるため、「ちょっと」はそれを配慮したネガティブ・ポライトネスだと考えられる。

しかし、初級の日本語教科書でもはやい時期に提出されているこの「ちょっと待って（ください)」について、中国人学習者から見た場合、相手に何らかの動作を働きかけるものとしての固定観念があるため、話し手自身にかかるものとしての理解が難しいと思われる。

3.3.8.「断り」に見られる否定的内容の前置きとしての「ちょっと」

否定的内容の前置きとしての「ちょっと」について、具体的にどのような表現形式、要素と共起しているのか、「ちょっと」を中心とした部分[8]を分析した結果が表４である。

表４　断り側に見られる「ちょっと」の使用　　Ｎ＝25　　単位：個

前接表現		後接表現	文末表現
否定的マーカー:11(44%) 日時:6(24%) 謝罪:1(4%) ∅:7(28%)	ちょっと	理由:11(44%) 不可の暗示:8(32%) 不可:3(12%) …(理由と不可の省略):3(12%)	不可のやわらげ:9(36%) 不可の言いさし:8(32%) ∅:8(32%)

表４から、「ちょっと」の前接表現では、否定的マーカー（ええっと、うんー）の表現との共起が多く現われている。ほかには、日時（明日・３時間）、謝罪（ごめん）、といった表現もあった。また、後接表現では、断りを表す「理由（部活があるんです）」が多く、「不可の暗示（微妙・きつい）」や「…（理由、あるいは不可の省略）」などの表現形式も見られた。そして、文末表現においては、「不可のやわらげ（無理かなー、だめかもしれない）」や「不可の言いさし（部活・用事があるんですが…）」といった表現が観察された。つまり、「ちょっと」は断りの場合でも、さまざまな要素と共起しながら、なるべく断りの明言を回避するという特徴が見られた。

表４の特徴を表す具体例を、以下に示す。

例 12　ええっと、　**ちょっと**　部活があるんです　が。　4-89-13
（否定的マーカー）　（理由）　（不可の言いさし）

例 13　3時間まず、　**ちょっと**、　きつい、きついかなー。　4-55-119
（日時）　（不可の予告）

例 14　うんー、ごめん、**ちょっと**　〈無理　かも〉{〈}。　4-55-123
（謝罪）　（不可）　（不可のやわらげ）

続いて、実際の「断り」の文脈において、「ちょっと」がどのように用いられているのかを見ていく。

例 15

A1：　なんかね、(うん)あのー、国立国語研究所っていうところで、(はい)ある(はい)あのー、言語調査に、(うん)参加、私が参加する予定だったんだけど、(略)急に用事行けなくなっちゃって、(はい)代わりに行ってもらえる人探してるんだけど。

Ｂ2：　あーー、そっか。

Ａ3：　うんうんうん。

Ａ4：　9 時からなんだけどね。

Ｂ5：　あー、**ちょっと…**(うん)9 時から、うん…。

Ａ6：　忙しい?。

Ｂ7：　うん、**ちょっと**用事あるんで、はい。

Ａ8：　あ、そっかそっか。

Ｂ9：　〈はい、すいません〉{〈}。

Ａ10：〈わかった〉{〉}。　　4-86-24・26

例 15 では、まずＢ5 の発話について、文脈から、Ａ1 の間接的な依頼に対して、「ちょっと…」という「…」部分に、「無理」あるいは「行けない」という「不可」の内容が省略されていると考えられる。つまり、Ａの依頼を受け入れられないという事情を、「ちょっと」を用いて少しずつ予告、暗示し、なるべく不可の明言を避け、断りの意図をＡに伝えることによって、人間関係の維持を図ろうとするＢの配慮が捉えられる。

「断る」という行為は、相手にとって不利益になるため、Leech（池上・河上（訳）1983）の「気配りの原則」に違反するが、Brown ＆ Levinson（1987）の理論で説明できるものとして、依頼者の断れたくないというネガティブ・フェイスを侵害する行為に配慮したネガティブ・ポライトネスだと考えられる。

以上で見てきた「断り」における「ちょっと」の使用形式と内容により、いくつかのことが考えられる。まず、表４の結果により、「依頼」に見られた複雑で多様的な否定的内容に比べ、「断り」では、「不可」という否定的内容を表す単純さが見られた。したがって、「断り」より、「依頼」に用いられている「ちょっと」は、中国人学習者にとって、理解の難易度が高いと予想される。

また、自然会話における断りでは、「否定的マーカー＋ちょっと＋理由」という形式の使用傾向が高く、重要な述部である「不可」を「ちょっと」を用いて予告、暗示し、あるいは省略しているのは、お互いの音声が直接聞ける状況が要因だと思われる。お互いの音声が聞けない書きことばの場合なら、違う結果が得られると予測できる。

そして、以上のような断り表現のなかで、最も注目したいのは、例 15 にあるような「ちょっと…」という省略の表現形式のことである。日本語初級教科書でも、同様な形式として「さしみは、ちょっと…（『初級日本語 16 課』）」のように、かなり早い段階で日本語学習者に提出されているのが確認されている。これは表現形式として単純で、日本語学習者にとって学習しやすいものである。しかし、その使われ方の使用背景にある日本文化についての理解は、物事をはっきり言う傾向のある中国人学習者にとって、困難なものだと思われる。

続いて、「ちょっと」が用いられない場合、日本語母語話者はどのような表現を用いて、相手に断っているのかについて、考察する。

3.3.9.「ちょっと」が用いられない場合の「断り」の表現形式

本項では、「ちょっと」が用いられない場合、日本語母語話者は、以下で見る４つのストラテジーを用いて、相手に配慮しながら断っていることを考察する。

〈1〉謝罪表示ストラテジー：　表現例「ごめんなさい」

例 16

A1：　私明日ね、その、ボランティアで国立国語研究所っていうところに行って、(はい)そのなんかげん、言語調査に関する実験、を手伝いに行くのね。

A2：　なんか友達と 2 人で行って、(うん)その 2 人の会話をなんか調査するっていうか調べるみたいなんだけど。

A3：　それで、(うん)それをなんか私だけ急に行けなくなっちゃって、(あー)明日の 9 時朝 9 時からなんだけど、(はい)私の友達と(はい)「JYK02 あだ名」で…(はい)<行ってもらいたい…>{<}。

B4：　**<u>くごめんなさい</u>**、私明日>{>}バイトなんですよ。

A5：　あ、そうなんだ。

B6：　はい。

A7：　そっか。

B8：　**<u>ごめんなさい</u>**。　4-80-9

例 16 における「ごめんなさい」という「謝罪」表現について、その依頼を受け入れられないことにより、依頼側に不利益を与えてしまう自分の行為に対する罪の自覚があり、積極的に「謝罪」を行い、人間関係の維持を図ろうとする断る側の配慮を表現している。

〈2〉「笑い添加」ストラテジー：　表現例「…〈笑い〉」

例 17

A1：　あのー、国立国語研究所っていうところで、(はい)言語調査に関する実験に参加する予定だったんですよ、私が。

B2：　はい。

A3-1：で、それに行けなくなっちゃったんで,,

B4：　はい。

A3-1：あの、もしよかったら代わりに、行っていただけたりしたらなあと思うんですけど。

Ｂ5：　国立研…〈**笑いながら**〉。えっ、それはなん、なんか…〈**笑いながら**〉。（中略）

Ａ6：　すいません[小さい声で]。　4-84-15

例 17 では、「…」という省略記号と「笑い添加」表現には、「断り」を表す「無理、行けない」といった否定的内容を含意していることが読み取れる。「笑い」表現は依頼側との人間関係を維持するために用いられた配慮表現として考えられる。

〈3〉代替案提示ストラテジー：　表現例「ほかにあたってみて、全然だめそうだったら、うん、私も考えてみる」

例 18

Ａ1：　なんか言語調査に関する実験なんだけどね、(うんうんうん)なんか私がなんか(うん)ほかの男友達と約束を(うん)してたんだけど、(うんうん)（略）用事ができてて行けなく(はいはい)なっちゃって、(うんうんうん)で、代わりに「JSK06 名」、行ってもらえるかなと思ったり

Ｂ2：　えっ、うそ。（中略）

Ａ3：　でもなんか、代わりに行くだけでもいいんだ。（中略）

Ｂ4：　うんーー、どうしよかな。

Ｂ5：　もし、(うん)**ほかにあたってみて**、(うん)**全然だめそうだったら**、(うん)**うん、私も考えてみるんだけど**。

Ａ6：　あ、うん。　4-71-56

例 18 においては、相手の依頼に応えられない自分が、〈1〉のように「謝罪」をするのではなく、「ほかにあたってみて、全然だめそうだったら、うん、私も考えてみるんだけど」のような「代替案提示」というストラテジーを用いて、依頼側と一緒に解決案を模索しあい、良好な人間関係を保ちたいというポジティブ・ポライトネスが示されている。

〈4〉「断り」を直接表示ストラテジー：　表現例「行けない」

例 19

Ａ1-1：で、私(ほー)もともとそういうの興味があるんで、参加しようと思ってたんですけど,,

Ｂ2：　ほー。

Ａ1-2：（略）明日突然行けなくなっちゃって、代わりに行ってもらえる人がいないかと思って探してまして。

Ｂ3-1：〈あーーーー〉{く},,

Ａ4-1：<それで>{>},,

Ｂ3-2：そっか。

Ａ4-2：なんですけど…。

Ｂ5：　明日は**行けない**なーー(<笑い>)[大きな声で]。

Ａ6：　そうですね、7 時からじゃ無理です<よね>{<}。　4-60-27

例 19 における「明日は行けない」という直接的で率直な断り表現について、人間関係を損なう危険性が最も高いものであるため、その危険性を小さくし、その直後に「なー」や「笑う」といった終助詞や「笑い」表現の挿入が見られ、「断り」の語気をやわらげようとする断る側の気遣いを表している。

このように、いくら親しい関係であっても、「断り」という人間関係の緊張感が高まる場面においては、ネガティブ・ポライトネスが欠かせないことを改めて感じられた。そして、例 18「代替案提示」のような、相手とのありたい人間関係を示すポジティブ・ポライトネスもあるということが観察された。

以上、「断り」における「ちょっと」の使われ方について考察してきた。その結果を以下にまとめる。

1）「断り」における「ちょっと」は、断りの事情やニュアンスを「ちょっと」を用いて少しずつ予告、暗示し、断りの明言を回避し、依頼側のネガティブ・フェイスに対するネガティブ・ポライトネスとしての機能が示唆された。しかし、少ない例ではあるが、「断り」に見られた「聞き手の負担要求を軽減する」としての「ちょっと」が、形式的にはその分類に属しているが、実際の会話では、文脈に依存するものとして、「断る」という命題を避け、自分の立場を守るための働きが見られた。

2）「断り」という否定的内容を表す「ちょっと」は、さまざまな要素と共起している複雑さが見られたが、そのかかり先が「不可」という否定的内容を表す単純さがあった。

3）「ちょっと」を用いない断りでは、日本語母語話者は「謝罪」等のネガティブ・ポライトネスを表すストラテジーを多用しているという特徴が見られた。さらに、「代替案提示」のような、良好な人間関係を維持するポジティブ・ポライトネスも見られた。

4）中国人学習者にとって、「依頼」に比べて、「断り」における「ちょっと」は、理解や習得しやすいものであるかもしれないが、話しことばか書きことばか、また「目上」か「同等」かによって、その断り方は一様ではないことも考えられる。

3.4. まとめ

本章では、実際の自然会話における「依頼」・「断り」の場面を中心に、そこに用いられている「ちょっと」の使われ方、および「ちょっと」が用いられない場合は、日本語母語話者はどのようなストラテジーを用いて、お互いの人間関係を調整し、配慮しているのかについて考察を進めてきた。考察

の結果は以下のようになる。

1）「依頼」に用いられる「ちょっと」は、依頼の前置き、または依頼の予告として「聞き手の心構えを作らせる」機能が考えられる。また、依頼表現において、配慮表現として用いられているのは、「ちょっと」というより、1人称化の「～と思う」、3人称化の「っていう」、例示化の「～たり」、「笑い添加」といったストラテジーであることが明らかになった。そして、たとえ自分自身の願望・行為・状態について言及しても、聞き手との意見相違にならないよう、常に聞き手の気持ちを予測し、考慮する日本語母語話者の心構えも「ちょっと」を通して観察された。

2）一方、「断り」における「ちょっと」は、断りの事情やニュアンスを「ちょっと」を用いて暗示し、断りの明言を回避する特徴がうかがわれた。また、「ちょっと」を用いない断りでは、「謝罪」、「笑い添加」、「代替案提示」といったストラテジーが観察され、それは、相手との人間関係を維持するための配慮表現としての機能を担っていることが示される。

3）否定的内容の前置きを表す「ちょっと」はネガティブ・ポライネスとして、「断り」では、さまざまな要素と共起している複雑さがあったが、そのかかり先が「不可」という否定的内容を表す単純さが見られた。それに比べて、「依頼」では、否定的内容との修飾関係が複雑であった。その背後には、前後の文脈を読まないとわからないような、文脈を読むことが強く求められるという特徴があった。

4）そして、「ちょっと」を使用する動機について、「依頼」では、依頼表現、または依頼の予告としてのものは、Leech（池上・河上（訳）1983）とBrown & Levinson（1987）の理論で説明できるが、否定的内容を修飾する場合、前者に違反していることがわかった。また、自分の願望・行為・状態を表す場合は後者で説明できないということが示された。しかし、「断り」の場合、後者で説明できるのに対して、前者に違反しているということがわかった。

また、3.3.4 で見た「お金とかも出ないんでちょっと、頼みにくいんだけど」のような、中国人学習者にとって、「頼みやすいことになる」という日本語と正反対の意味として理解してしまうようものについて指導する場合、たとえば、まず依頼するという行為は相手の「与害行為」になるということを理解させる。また、日本語では、依頼する場合、なるべく相手にかかる負担度を減らそうというネガティブ・ポライトネスに対する志向を持っていることを、Leech（池上・河上（訳）1983）の理論で説明するのがわかりやすいであろう。

本章での研究を通して、中国人学習者に、母語話者である日本人の「依頼」、「断り」における「ちょっと」の使われ方、およびその使用する動機と背景にある日本文化との関連性についての理解、さらに、「ちょっと」が用いられない場合、日本語母語話者はどのようなストラテジーを用いて相手に配慮を表しているのかについての指導を行うための基礎的資料を提供できたと思う。

【付記】

本論文は、2013 年 11 月大阪大谷大学大学院国語学国文学専攻院生発表会において、発表したものを加筆、修正したものである。

【注】

1) この場面では、依頼者に対する①先輩、②後輩、③同級といった３つの人間関係によるものではあるが、実際の会話の内容を見てみると、明確な上下関係を表す言語形式の使い分けが見られなかった。

2) 39 会話のうち、内容が重複しているものが２会話（71 番と 72 番が重複、75 番と 76 番が重複）、会話の内容（パソコンシステム上の問題で）が見られないのは 1 会話（85 番）、合計３会話を分析対象から除外した。

3) 秋田（2005）の「自分の行為を大げさに響かない」という分類を参考に、本研究における「えっちょっと、覗いて見たいね=。」、「ちょっと発掘したい=。」のようなものについて、「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」として分析する。

4) 「ちょっと」を中心とした部分について、たとえば、「あのさ、ちょっと　お願いがあって電話してるんです　けど（69-4)」のように、「ちょっと」の前の「あのさ」は前接表現とし、その後ろの「お願いがあって電話してるんです」は後接表現とし、最後の「けど」は文末表現として分析した。

5) 例４における「4-1」と「4-2」は、１発話文であることを表している。１発話文について、宇佐美（2011）は、会話例を挙げた上、次のように判定している。話者が一旦交替しても、同一話者によって発せられた「１発話文」とみなすもの（2-1 と 2-2 とで１つの発話文とみなす）

　　1　A　もう、もろ駅前商店街。
→2-1　B　北浦とか、もっと、それよりもっと,,
　　3　A　そうそうそうそう
→2-2　B　駅前。
　　4　A　あの、「店名」とかの近くです。

6) 早川（2011）は、「笑い」の機能について、以下のように述べている。

笑いは基本的には実質的発話ではなく、実質的発話に付加されたり、または単独で、その前後の実質的発話の補助機能を担う。その使用意図は実質発話の内容の緩和、促進、継続であり、談話展開機能としては談話の展開を協調方向に動かそうとするものである。（p. 177）

相手に何かを要求したり、相手に関して何かを意見を言ったりして、相手の領域に踏み込んで何かを言うとき、笑いによって相手領域に踏み込む厚かましさを和らげることができる。（p. 180）

7) 「ちょっと」の中国語訳については、中国社会科学基金と日本国際交流基金助成の共同研究プロジェクトとして作成された「中日対訳コーパス」における日本文学作品の会話部分の中国語訳では、次のように“太（とても）”という日本語と反対の使い方として訳されているものが見られた。

・「女の子はもう少し上品に煙草を消すもんだよ（中略）それじゃ**ちょっと**ひどすぎる。それからどんなことがあっても鼻から煙を出しちゃいけない。→“女孩子熄烟要熄得文雅一点。你这熄法**太**残忍了。另外无论如何不能从鼻孔里出烟”」

『ノルウェイの森』

・「それなのに税務署員ってねちねちねちねち文句つけるのよね。収入**ちょっと**少なすぎるんじゃないの、これって。冗談じゃないわよ。→“尽管这样，税务员还是横挑鼻子竖挑眼，什么收入是不是**太**少了等等。笑话”」 『ノルウェイの森』

8) 「ちょっと」の前後要素についての分析方法は注４と同様である。

第 4 章　携帯メールに見られる「断り」の考察
—日本語母語話者と中国人学習者を比較して—

4.1.　はじめに

文字を媒体とする携帯メールなどでは音調や表情を使うことができず、さらに相手を見ながら調整することもできないため、相手への配慮を適切に伝えられないというリスクが考えられる。そのため、日本語を母語としない日本語学習者は、特に断りの場面で、日本語母語話者がどのようにしてそのリスクを軽減し、相手に配慮を示しながら断りを遂行しているのかについて、関心を寄せているものである。

そこで、本章では、書きことばを中心とする携帯メールに見られる断り表現に注目し、「目上」と「同等」という異なる関係の依頼者に対して携帯メールで断らなければならない場合、日本語母語話者がどのようにして配慮を示しながら断っているのかを調べる。同時に中国人学習者についても調べて、両者の特徴にどのような違いがあるのかについて明らかにし、携帯メールおける断り表現の特徴について考察していく。

4.2.　研究の対象と方法

本章に用いる研究対象は、筆者が独自で調査を行ったものである。それを以下に示す。

- 被験者は、大阪府南部の大学の日本人大学生（以下「日本語母語話者」とする）34 人（男性 16 名，女性 18 名）と奈良県北部の大学の中国人日本語学習者（以下「中国人学習者」とする）「N1（日本語能力 1 級)」16 人、「N2（日本語能力 2 級)」9 人、「N3（日本語能力 3 級)」5 人、計 30 人（男性 16 名、女性 14 名）[1)]である。
- 依頼した内容は、「①同等（友人)」、「②目上（先生)」のそれぞれからの依頼を携帯メールで断るというものである。被験者に「それぞれの依頼内容をメールで断ってください。できるだけ普段のやり方に近い表現を使ってください。また絵文字の使用もかまいません」と指示し、筆者のメールアドレスに送ってもらった。依頼の内容は以下の①、②に示す[2)]。また、同じ日本語母語話者の大学生には事後アンケートも行った。この場面を設定した理由は、同等関係と上下関係で、日本語母語話者と中国人学習者がそれぞれどのように断るのかを調査するためである。調査内容は以下である。

① <u>仲のいい友人から</u>今日中に大学祭のポスター30 枚を学内に貼るのを手伝ってくれとメールで依頼されました。でも、あなたはアルバイトで今日は時間がありません。

② <u>クラブでお世話になっている先生から</u>今日中に講演会のポスター30 枚を学内に貼るのを手伝ってくれとメールで依頼されました。でも、あなたはアルバイトで今日は時間がありません。

分析方法としては、携帯メールに使われている断り表現の特徴を明らかにするために、まず断りの基本構造[3)]を、「理由」と「不可」の組み合わせとして分析する。「理由」に分析した基準は、「から、ので、ため、」などの「理由」を表す形式とする。たとえば「今日は用事があるので」の下線部分を指す。また、「不可」に分析した基準は、「無理だ、行けない」などの「不可」の内容を表す表現形式とする。たとえば「今日はバイトがあるから、行けない」の下線部分を指す。また、その断り表現をより明確にするために、「理由」と「不可」の前後にある付加成分、たとえば、「ごめん用事があるから、ちょっと無理です、すみません」）の下線部分のような表現についても、それぞれ「理由前接・後接」、「不可前接・後接」として分析していく。まず日本語母語話者の調査結果から見ていく。

4.3.　日本語母語話者に見られる「断り」の分析

4.3.1.　「断り」の構造について

日本語母語話者 34 名から収集したデータを分析した結果は、次のようになる。

表１　日本語母語話者の断りの構造の使用　　N=34　　単位：人

断りの構造	相手が目上			相手が同等			総合計
	男	女	合計	男	女	合計	
①理由＋不可	１４（88%）	１５（83%）	２９ **(85%)**	9（56%）	１３（72%）	２２ **(65%)**	５１（75%）
②理由のみ	1（6%）	3（17%）	4（12%）	4（25%）	5(28%)	9（26%）	１３（19%）
③不可のみ	1（6%）	0	1（3%）	2（13%）	0	2（6%）	3（4%）
④不可＋理由	0	0	0	1（6%）	0	1（3%）	1（2%）
合　　計	16（100%）	18(100%)	34（100%）	16(100%)	18(100%)	34（100%）	68（100%）

表１からわかるように、「目上」と「同等」に共通する特徴として、断りの基本構造である①「理由＋不可」という構造が際立つ。②「理由のみ」の構造は２番目に多いが、①に比べて遥かに少ない。また、③と④の使用も少ないのがわかる。

しかし、①「理由＋不可」の使用について見てみると、「目上」では９割弱が見られたのに対して、「同等」では７割弱という結果が得られた。この２割の差から、「同等」でも高いが、「目上」ではより高いことがわかる。つまり、「目上」に対する断りは「理由」と「不可」を述べる必要性が相対的に高いが、「同等」に対しては必ずしもそうではないことがうかがわれた。

次節では、「理由」と「不可」の付加成分について見ていく。

4.3.2.　「断り」の付加成分について

本節では、「理由」と「不可」の前後にある付加成分の表現形式について考察する。考察した結果を

示したのが表２である。

表２　日本語母語話者に見られる断りの付加成分の使用　N=34　単位：人

形式／関係	理由前接		理由後接	不可前接		不可後接
相手が目上	**謝罪**：25(73%) 挨拶＋**謝罪**：2(6%) **謝罪**＋前置：1(3%) 挨拶＋用件の告示：1(3%) 用件の告示＋前置：1(3%) 用件の告示：1(3%) 前置：1(3%) ∅：2（6%）	理由	ので型:16（48%） ため型：4（12%） なんで型:3(8%) て形型：3（8%）	ちょっと：2（6%） ∅：32（94%）	不可	**謝罪**：12(35%) 関係修復：6（18%） **謝罪**＋挨拶：3（9%） 関係修復+**謝罪**：1(3%) **謝罪**＋関係修復＋挨拶：1(3%) ∅：11（32%）
相手が同等	**謝罪**：23(67%) 前置：2(6%) **謝罪**＋前置：2(6%) 用件の告示＋**謝罪**：1(3%) 遺憾の意の表出：1(3%) 聞き返し：1(3%) 返事：1(3%)		から型:15(44%) ので型：2（6%） て形型：2（6%） ∅：15（44%）			**謝罪**：12(35%) 関係修復：4（12%） **謝罪**＋関係修復：2(6%) 関係修復+**謝罪**：2（6%） ∅：14（41%）

注：「∅」という記号は使用がないということを表している。

表２からわかるように、「理由前接」成分について、「目上」と「同等」でさまざまな形式が用いられている。そのなかで、太字で示したように、「謝罪」表現の使用が他の表現より顕著に見える。具体的には、「ごめん(;_;)」、「すみません」、「申し訳ございません」などがあり、絵文字と共起する特徴も見られた。

「理由後接」成分においては、使用率が最も高いのが、「目上」の場合は「ので型」、「同等」の場合は「から型」であった。つまり、「理由」を表す表現についてはフォーマルな形式として「ので型」、インフォーマルな形式として「から型」の使い分けがなされている。

「不可前接」成分では、表２の網掛け部分で見たように、「ちょっと」の使用は「目上」では２人(6%)が見られたが、それ以外の付加成分について「同等」も含め、一切現われていなかった。「ちょっと」はごくわずかであったのは、携帯メールにおいて、話しことばほど同時性がないためだと考えられる。

そして、「不可後接」成分では、「理由前接」と同じような傾向が見られ、「謝罪」表現の使用が目を引くものであった。具体的な表現は、「理由前接」と同様であった。

表２で見た断り表現の形式を表す代表例を以下に示す。その例を見ればわかるように、「同等」に「普

通体」、「目上」に「丁寧体」という使い分けがなされている。

・ ゴメン、今日バイトやから、どうしても無理やわ、ほんまにゴメンな。

（謝罪）　「理由　＋　不可」　（謝罪）　（No26・同等）

・ すみません、今日はバイトが入っているので、お手伝いできません。本当にすみません。

（謝罪）　「理由　＋　不可」　（謝罪）

（No5・目上）

このように、日本語母語話者は文字を媒体とする携帯メールを用いた断りでは、「理由＋不可」という基本要素のほか、かなりの確率で「謝罪」を用いるという特徴も見られた。

それでは、中国人学習者の場合は、日本語母語話者に比べて、どのような特徴を持っているのだろうか。次節で見ていく。

4.4. 中国人学習者に見られる「断り」の分析

4.4.1. 「断り」の構造について

中国人学習者 30 名のデータを分析した結果は、表３の通りである。

表３　中国人学習者の断りの構造の使用　（N=30）　単位：人

断りの構造	相手が目上			相手が同等			総合計
	男	女	合計	男	女	合計	
①理由＋不可	9(56%)	9(64%)	１８**(60%)**	１０(63%)	8(57%)	１８**(60%)**	３６(60%)
②理由のみ	6(38%)	4(29%)	１０(34%)	4(25%)	5(36%)	9(31%)	１９(32%)
③不可のみ	0	1(7%)	1(3%)	1(6%)	1(7%)	2(6%)	3(5%)
④不可＋理由	1(6%)	0	1(3%)	1(6%)	0	1(3%)	2(3%)
合　計	16(100%)	14(100%)	30(100%)	16(100%)	14(100%)	30(100%)	60(100%)

表３で見たように、①「理由＋不可」という基本構造が「同等」と「目上」には、ともに６割の使用が見られ、②「理由のみ」においても大きい差異がなかった。③と④の使用傾向は日本語母語話者と類似している。しかし、日本語母語話者は「目上」と「同等」での使用差があった。つまり①「理由＋不可」の構造について、上下関係の違いによって、日本語母語話者は使い分けをしているのに対して、中国人学習者にはその違いがなかったことが今回の調査でわかった。

また、ここで注目したいのは、中国人学習者が用いた「理由＋不可」という構造のなかで、以下の文も含まれていることである。

・ 申し訳ありません，今日はアルバイトがありますので（理由），ちょうっと…[4]（不可省略）。

（N06・目上・中国人学習者）

この文を、「理由＋不可」に分類したのは、「ちょっと」以下は省略されているものの、「無理、できない」のような断りのニュアンスが含意されている後件が現われるからである。

4.4.2. 「断り」の付加成分について

次に、「理由」と「不可」の前後にある付加成分の表現形式について見ていく。

表４　中国人学習者に見られる断りの付加成分の使用　　N=30　　単位：人

形式／関係	理由前接		理由後接	不可前接		不可後接
相手が目上	**謝罪**：19（64%） 挨拶：2（7%） 挨拶＋**謝罪**：1（3%） **謝罪**＋前置：1（3%） 挨拶＋用件の告示：1（3%） 挨拶＋用件の告示＋**謝罪**：1（3%） ∅：5(17%)	理由	ので型：15(50%) から型：3（10%） て形型：3（10%） ため型：3（10%） ∅：6(20%)	ちょっと：4（13%） ∅：26(87%)	不可	**謝罪**：11（37%） 関係修復：5（17%） 代案：2（7%） **謝罪**＋挨拶：1（3%） **謝罪**＋関係修復：1（3%） ∅：10(33%)
相手が同等	**謝罪**：20（67%） 遺憾の意の表出：2（6%） ∅：8(27%)		から型：12（40%） ので型：8（27%） て形型：2（7%） けど型：1（3%） ∅：7(23%)	ちょっと：4（13%） ∅：26(87%)		**謝罪**：10（33%） 関係修復：3（10%） 代案：2（7%） ∅：15(50%)

注：「∅」という記号は使用がないということを表している。

表４では、「理由前接」において、「謝罪」という表現の多用がほかに比べて明らかであった。使用率から見ても「目上」と「同等」には大きな差異がなく、この部分に関しては、日本語母語話者と同様な特徴として見られた。しかし、「目上」に対して、さまざまな表現を使っているのに対して、「同等」では使用の単純さが見られた。このような傾向から、「同等」より「目上」に対する配慮が多く払われているように思われる。

「理由後接」においては、「理由」を表す形式のなかで、「目上」に「ので型」、「同等」に「から型」の使用率がほかの形式に比べて高くなっており、この点については、表２で見た日本語母語話者の使用傾向とほぼ同様であった。

「不可前接」では、表４の網掛け部分で示しているように、日本語母語話者に比べ、「ちょっと」の使用がやや多く見られた。しかし、「目上」と「同等」で同様に現れていることは、日本語母語話者の場合と異なる。「ちょっと」の使い方について、中国人学習者がどの程度理解しているのか、日本語教科書の影響を受けているかについて、さらなる調査が必要だと思われる。

最後の「不可後接」では、表４を見ればわかるように、ほかの表現に比べて、「謝罪」を置く型が際立って見える。このような特徴は、「理由前接」と同じ傾向になるだけではなく、日本語母語話者と類似している部分があるということも示されている。

つまり、書きことばを中心とした携帯メールにおける断り表現の特徴は、両側から「謝罪」で「断り（理由＋不可）」をはさむ「サンドイッチ型」が考えられる。図示すると以下のようになる。

大変申し訳ないのですが、 （謝罪）	今日は用事があるので （理由）	行けません （不可）	ごめんなさい。 （謝罪）

携帯メールにおける断り表現

このように、両者の共通点となる「謝罪」表現の多用は、相手の依頼に応えられないという申し訳なさを表していると思われる。また、「断り」という行為はLeech（池上・河上（訳）1983）の「他者の利益を最大限にせよ」という「気配りの原則」に違反するものであるため、相手にもたらす不利益を「謝罪」を用いて補償し、良好な人間関係を維持しようとする断る側の配慮の表れだと見なしうる。

以上、携帯メールにおける断り表現について、日本語母語話者と中国人学習者を比較してきた。その相違点をまとめると以下のようになる。

- 断りの基本構造である「理由＋不可」という形式の使用が、両者ともに多く見られた。しかし、日本語母語話者が「目上」か「同等」かによって、使い分けをしているのに対して、中国人学習者にはその違いが見られなかった。
- 断りの付加成分について、両者ともに「謝罪」表現を多く用いるという共通点がある一方、中国人学習者は、「不可前接」では、話しことばの特徴を持つ「ちょっと」の使用が「同等」だけではなく、「目上」にも見られ、日本語母語話者より多く用いられているという違いが見られた。

次節では、携帯メールにおける断り方について、日本語母語話者と中国人学習者の違いについて見ていく。

4.5.　携帯メールに用いられる断り方

上下関係の異なる「目上」と「同等」からの依頼に対して、相手の顔が見えず、声も聞けない携帯メールで断る場合、日本語母語話者がどのように断っているのか、どのような配慮がどのような表現で示しているのかについて、中国人学習者と比較しながら考察していく。まず日本語母語話者から収

集したデータの代表例とともに見ていく。

例１： ゴメン（謝罪）、今日バイトやから（理由）、どうしても無理やわ[5]（不可）、ほんまに[6]ゴメンな（謝罪）。 （No26・同等・日本人）

例２： すみません（謝罪）、今日はバイトが入っているので（理由）、お手伝いできません（不可）。本当にすみません（謝罪）。 （No5・目上・日本人）

例１、例２における下線部分のように、日本語母語話者は「同等」に「無理やわ」、「目上」に「お手伝いできません」といった断定的な断り方が同じように見られた。このような特徴的な断り方について、実際のデータでは、「同等」より「目上」にやや多用されている傾向になっている。それに対して、「理由前接」と「不可後接」における「謝罪」表現の使用は、「同等」と「目上」で、共通の特徴として見られた。

しかし、よく考察して見れば、「理由前接」の「謝罪」と「不可後接」の「謝罪」とは異なる役割を有しているように見える。前者は相手の依頼に応えられないという自分自身の負罪感などの心情を表出しているのに対して、後者は相手の依頼を断ることによって、相手のネガティブ・フェイスを侵害してしまうことになるため、それを少しでも挽回して、人間関係の維持を図ろうとする話者の配慮を表すネガティブ・ポライトネスとしての役割が捉えられる。いずれにしても、相手にもたらす与害行為への補償として用いられたものだと考えられる。つまり、携帯メールに用いられる「謝罪」表現は、Brown & Levinson（1987）の理論によってなされる言語行動だと判断できよう。

次に、中国人学習者について見ていく。

中国人学習者のデータでは、以下の例３、例４に示しているように、「不可」をやわらげる特徴が目立つ。相手が「目上」であっても、「同等」であっても、同様であった。

例３：ごめん（謝罪）、今日バイトがあるんや（理由）、時間がないかも！（｀・ω・´）（不可）。 （No24・同等・中国人）

例４：先生申し訳ありませんが（謝罪）、今日はバイトがあるので（理由）、ちょっと手伝いに行けないんですが･･･（不可） （No53・目上・中国人）

例３、例４における「かも」、「ちょっと」、「～んですが…」といった表現から、中国人学習者の断り方には、話しことば的な特徴が多く用いられているのがわかる。これらのまるで相手と対面している場面に使われるような表現は、相手の顔が見えない携帯メールでは、日本語母語話者に違和感を持たせる表現になるおそれがある。つまり中国人学習者は、上下関係や文体の違いによって、断り方の区別をしておらず、表現の選択に問題があるように見えた。

次節では、中国人学習者だけでなく、おそらくほかの日本語学習者から見てもなかなか納得のいかない[7)]、日本語母語話者の「目上」に対する断定的な断り方について見ていく。

4.6.　断定的な断り方と「ちょっと」についての分析

4.6.1. 断定的な断り方をする理由

前節で見てきた携帯メールにおける日本語母語話者の「目上」に対する断定的な断り方を、中国人学習者から見た場合、失礼になるのではないかという疑問を持つだろう。それを解明するために、再び日本語母語話者の大学生 30 人に、「なぜメールの場合は、『目上』の人に断定的な断り方をするのか」という質問をして、回答してもらった。有効回答は 28 人であった。その結果をまとめたものを、表５に示す。

表５　「目上」を断定的に断る理由　　N=28

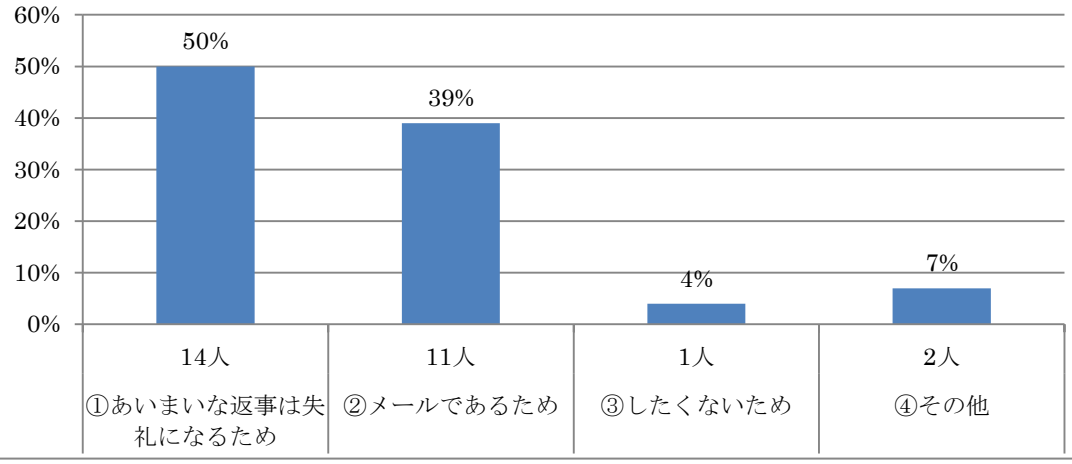


表５からわかる通り、「あいまいな返事は失礼になるため」という内容の回答が他に比べ 50%と高くなっている。そして、２番目が「メールであるため」約４割であった。①から④についての内容を、それぞれの代表的なものを用いて、以下に分析する。

①「あいまいな返事は失礼になるため」の中には、「目上」の人に断らなければならないときに、あいまいな返事をしたり、はっきり言わなかったりすることが失礼になるからだという意見があった。また、相手の顔が見えないから断りやすいという意見も得られた。ここで、実際の回答例の中から２例を紹介する。

・<u>回答者 7</u>：

目上の人にあいまいな返事をするのは失礼だと思うので→Yes か No でなやませないように、(時間をとらないように)。相手の顔がみえないので、はっきりとことわりやすい。でも、キッパリとしすぎる印象がわるかったり、強い拒絶に感じるので「すみません」でゆるめる。

・回答者 29：

目上の人に対して、あいまいな返答をしたら、「いいかげんな奴だ」と思われるかもしれないし、迷惑がかかるかもしれないからだと思う。

つまり、携帯メールを用いた断りにおいて、「目上」の人にははっきりと断るのが、かえって一種の礼儀、または配慮の表れだと捉えられている。

②「メールであるため」の中には、対面での会話と異なり、メールの場合は声のトーンや表情などが見えないため、はっきり断らないと、断る雰囲気が伝わらないという内容であった。また、メールの内容は相手にいつ伝わるのがわからないし、いつ見ても、自分は送った時点で「無理」だということが伝われるように、文面でははっきり断るという意見もあった。

実際の回答例を以下に挙げる。

・回答者 21：

相手と直接対面して言うときは、きっぱり断わると失礼な気がする。メールの場合は、「ちょっと」や「やっぱり」があるとやはり失礼な気がする。あと、「ちょっと」や「やっぱり」は口語であるので、書いたりする場合は使わない。

・回答者 24：

会話だと、直接相手に断るのが悪いかなぁって思ってしまうので、婉曲的だいたい会話だったら「うん」か「ちょっと…」のどちらかだし、声の雰囲気や表情でわかるので、あいまいでも正確によみとれる。メールだと、表情も声も見えないので、何回も謝罪して気を使いつつ、きっぱり断らないと伝えきれないのだと思う。「ちょっと無理かもしれないなぁ～」文面だったら、いけるのかいけないのかどっち？ってなると思います。その確認のために、またメールのやりとりをしなければならないので、手間だからだと思います。

上記の内容から、日本語母語話者は話しことばか書きことばかによって、断り方を区別するという意識がうかがえた。

③「したくないため」の中には、単純に依頼されたことを「したくないから」だという内容であった。

④「その他」の中には、「顔を合わせていないため、敬意の気持ちが薄れるため」、「日本人は顔が見えてない相手には、大きく出ちゃう人種だから」といった内容であった。

以上の調査により、「目上」に断定的な断り方をしているのは、失礼なことではなく、むしろ「目上」に対する一種の礼儀、または配慮の表れだと思われる。これは日本語母語話者なら、簡単に認識できるかもしれないが、中国人学習者の場合は、「目上」の人には、婉曲的な断り方をするものだと思い込

みがあるように見えた。今回の調査では、中国人学習者に見られた「かも」、「～んですが…」、「ちょっと（…）」といった表現がそれを示す好例となろう。

続いて、断定的な断り方と対照的な、「ちょっと」を用いた婉曲的な断り方について見てみる。

4.6.2.「ちょっと」を用いた「断り」

本項では、携帯メールに現われにくい「ちょっと」の働きについて考えてみる。

まず日本語母語話者から見ていくと、4.3.2 の表２の分析では、「同等」のゼロに比べ、「目上」での使用が２人見られた。それは全体の 6%しか占めていないが、実際の内容に照らしてみれば、携帯メールでの使用は、不適切であるように思われる。

例５：すみません（謝罪）、今日バイトなんで（理由）、ちょっと無理っぽいです（不可）。(NO.35)

例 6：すいません（謝罪）、今日はバイトがあって（理由）、ちょっとお手伝い出来そうにないです（不可）。本当にごめんなさい…！（謝罪） (NO.55)

例５、例６における「ちょっと」は、それぞれ直後の「無理」、「お手伝い出来そうにない」といった「不可」の内容をやわらげようとする断る側の配慮を表していると捉えられるであろう。しかし、対面の会話と違い、回答者７が言ったように「Yes か No でなやませないように、(時間をとらないように)」、つまり明確な返事を示すべきである。「ちょっと」のようなあいまいな、不明瞭な表現を使うと、相手を混乱させ、特に例５のような「ちょっと～ぽい」という表現は、「目上」の人に用いると、その気持ちを苛立たせる失礼な表現になってしまうのであろう。つまり、携帯メールにおける「ちょっと」の使用は、回答者 21 が指摘するように「メールの場合は、『ちょっと』や『やっぱり』があるとやはり失礼な」表現だということが理解できる。

一方、中国人学習者の場合、4.4.2 の表４で見たように、「ちょっと」の使用は、「同等」でも、「目上」でも、４人ずつ 13%の使用となっており、日本語母語話者よりやや高いのがわかる。その特徴を実例とともに見ていく。

例７：悪いけど（遺憾の意の表出）、今日はバイトがあるので（理由）、ちょっと…（不可の省略が考えられる）。 (NO.6・同等)

例８：申し訳ございませんが（謝罪）、今日はバイトが入ってるんで（理由）、時間のほうがちょっときついですが（不可の暗示）、バイトが終わってから全然大丈夫ですけ（ママ）ども、いいですか（代案）。 (NO.48・目上)

例８における「ちょっと」の使用問題は、例５で見た日本語母語話者と類似しているが、例７にお

ける「ちょっと…」は、人間関係を損なう危険性があると思われる。なぜなら、最も重要な情報を明言せず、読み手にとって、明確な返事（可か不可か）を読み取れるまでの時間や労力を消耗してしまうからである。このような返事をされると、場合によって、たとえ親しい友人同士でも、不快に感じてしまうのであろう。特に、「目上」の人に対しては、より一層失礼で配慮に欠けた言語行動になってしまうのである。

これらのリスクを、中国人学習者はなかなか察知できず、表現の適切さというよりも、相手に対する配慮を優先しようという姿勢があるようで、そのため、たとえ書きことばの場合でも、話しことばのように「ちょっと」を用いて、婉曲的な断り方で相手に配慮しているつもりでいるように見える。このような使用傾向が生まれる要因は２つ考えられよう。１つ目は、断り表現についての提示は、学校の教科書では話しことばを中心となる場面がほとんどで、書きことばの場面が少ないようである。２つ目は、携帯メール自体は基本書きことばが中心となる媒体であるということに対する認識が薄いことである。

以上の考察から、携帯メールを用いた断りでは、日本語母語話者は上下関係にもかかわらず、断定的な断り方をしている特徴が顕著であるのに対して、中国人学習者は話しことばの特徴をもつ表現の使用が目立ち、特に「ちょっと」が多く見られた。つまり、日本語母語話者は書きことばか話しことばかによって、断り方を区別しているのに対して、中国人学習者はその区別ができていないという問題点が明らかになった。

しかし、相手との人間関係をなるべく良好に保ちたいという配慮を「謝罪」表現を用いて表している点については、両者の共通点として観察された。それによって、携帯メールを用いた断りでは、「ちょっと」ではなく、「謝罪」表現が相手に対する配慮の表れとして中心的な役割を果たすと言えよう。

次節では、携帯メールにおける絵文字の使われ方について見ていく。

4.7.　携帯メールに見られる絵文字の使用

三宅（2011，203）によれば、書きことばを基本とする携帯メールでは、話しことばのような、音声情報であるプロミネンス、イントネーション、間、強調や視覚情報である顔の表情、身体の向きや動きなどがすべて欠如してしまい、その上、メールのコミュニケーションは基本的に交換（互いに感じ合う）的なものが多いため、情感や相手への配慮の表現を特に多く必要としているという。つまり、絵文字はその欠如した側面を補完するための一つの工夫であり、人関関係上では重要な役割を果たしていると考えられる。

さて、今回の調査では、日本語母語話者はどのような絵文字を使用し、どのような表現と共起して、どのような気持ちを表しているのだろうか。また、中国人学習者の場合はどうであろうか。以下に考察していく。

表 6　日本語母語話者の絵文字の使用

共起表現	使用される絵文字	
	同等	目上
①謝罪表現	、、、(;_;)、(>人<)、(ToT) 、	
②理由	(^q^)、(´ д `)、m(_ _)m、(ToT)、(´;ω;)	、(>_<)
③不可	、、、(>人<) 、(´;ω;)、(∵`)、(>_<)、(;_;)、	(° ω °)、m(__)m、(´ ; ω ; `)
④文末謝罪表現	、、、、、(´;ω;`)、(°ェ° `)、(´・ω・`)、(´;ω;)	、
⑤文末関係修復表現	、	

表 6 からわかるように、当然な結果として、絵文字の使用は「目上」より「同等」の場合に集中して使われている。以下では、「同等」と「目上」に見られる①から⑤の表現とともに使われる絵文字の特徴について見ていく。

①謝罪表現との共起

「同等」の場合では、「ごめん」、「すみません」といった表現の直後に、申し訳ない気持ちを表す、(;_;)、「ごめん」という謝罪のニュアンスを表す下向き矢印、困っている顔を表す(>人<)、と泣き顔を表す、(ToT)などのさまざまな絵文字が、謝罪表現と共起して、相手の依頼に応えられないという申し訳なさ、または気持ちのゆれを表しているように捉えられる。しかし、「目上」では、このような特徴がなかった。

②理由との共起

「同等」においては、たとえば、「その日バイトだぁ…(^q^)」のように、笑いを表す絵文字「(^q^)」を用いて、自分の状況を相手に理解してほしいという気持ちを表しているように思われる。また、謝りを表す「m(_ _)m」、しょんぼりとした顔を表す「(´;ω;)」などの絵文字も見られ、つまり事情があったため、あなたの依頼を受けたくても、受け入られないという残念な気持ちを表していると考えられる。一方、「目上」では、「」、「 (>_<)」のような絵文字が見られた。「目上」からの依頼を受け入れられないという恐縮の意を表しているのであろう。しかし、その気持ちが「目上」の人に適切に伝わるかどうかという点は不明である。

③不可との共起

表 6 を見ればわかるように、「不可」と共起する絵文字は①と②と重複しているのもあったが、「目

上」より「同等」の場合が多かった。これは当然なことながら、相手との友人関係が維持できるように、断りの雰囲気をやわらげるために添えられたものだと考えられる。さらに、あなたの依頼を応えられないという悲しい気持ちを表す「 」、相手との友人関係が損なわれるのではないかという不安を表す「 」汗つきの絵文字を用いて、自分の複雑な感情の動きを表している。

④文末謝罪表現との共起

文末謝罪表現と共起する絵文字については、「目上」より「同等」に使われる種類が明らかに多く、①、②、③で見ていたもののほか、「ごめんね 」のような、まるで対面でかのように両手を合わせ、相手の許しを乞う意味を表している。また「手伝えんくてごめん」という心が割れるほどの負罪感を表す絵文字を用いて、深い謝罪の気持ちを相手に伝えようとしている。

⑤文末関係修復表現との共起

関係修復表現と共起する場合は、たとえば「また今度何かあったら手伝うわまた言ってきてね～」のように、それぞれ「今度こそ大丈夫だよ」という意味と、「今度もまた気軽に言ってね」という感情を表す絵文字を添えて、相手との関係修復に努めようとしているように見える。

以上見てきたように、「目上」に比べ、「同等」の場合、バラエティに富んだ絵文字を用い、自分の気持ちを表しながら、相手との人間関係を良い方向にもっていけるように努める姿勢が見られた。このような傾向は、事後アンケート調査の回答にもあるように、「友人には、これから先もずっと仲良くしたいという気持ちがある（略）。(回答者 N08)」という心構えがうかがえ、絵文字を用いて断りの雰囲気をやわらげ、相手に与える不快感をすこしでも軽減したいというポジティブ・ポライトネスを表現している。しかし、「目上」に用いた絵文字に関しては、どう解釈すべきか考えさせられるものもあった。

次に、中国人学習者について見ていく。

表 7　中国人学習者の絵文字の使用

共起表現	使用される絵文字	
	同等	目上
①不可	、(`・ω・´)、(>~<)、[m(_ _)m]	
②文末謝罪表現	、[m(_ _)m]	
③文末関係修復表現	(^□^)	

表 7 からわかるように、日本語母語話者に比べて、中国人学習者の場合、絵文字の使用は「同等」のみとなり、共起する表現と種類の少なさも明らかである。

①<u>不可との共起</u>

「今日は多分無理(>~<)」のように、無理という不本意の言葉を言った時の顔の表情を表している。また、相手に対する謝りの気持ちを表す[m(_ _)m]もあった。

②<u>文末謝罪表現との共起</u>

この部分について、謝罪を表す[m(_ _)m]のほかは、相手との関係に緊張感を感じるような しか見られなかった。つまり、日本語母語話者に比べ、中国人学習者は絵文字との共起より、言葉だけで断る傾向が高いと考えられる。

③<u>文末関係修復表現との共起</u>

（^□^）という笑顔を表す絵文字は「今度手伝うよ」と共起している。相手との関係を修復しようという気持ちと、相手との親近感をも表しているように捉えられる。

このように、絵文字の用い方について、中国人学習者は「目上」には見られないし、「同等」に対しても、日本語母語話者ほどの使用数には達していなかった。つまり、絵文字を 1 つのコミュニケーション手段として使用する意識があまりないのではないかと思われる。

以上、携帯メールに見られた日本語母語話者と中国人学習者の絵文字の用い方について考察してきた。その結果を以下にまとめる。

・日本語母語話者の場合は、「目上」と「同等」ともに、絵文字の使用が見られたが、「同等」での使用が顕著であった。絵文字は「謝罪表現」、「理由」、「不可」、「関係修復表現」などと共起し、書きことばで欠如した顔の表情や身体の動きなどを補う役割があるだけではなく、相手の依頼を断ることによって生じた気まずい雰囲気のやわらげ、相手との友好関係を維持しようとする断る側の配慮をも表している。その配慮を「目上」より「同等」に多く払っていることが明らかになった。つまり、携帯メールにおける絵文字は、日本語母語話者にとって、一種のポジティブ・ポライトネスとして考えられる。

・それに対して、中国人学習者の場合は、「同等」のみの使用となっているが、絵文字の種類や共起する表現がきわめて少ないのが特徴的であった。つまり「目上」に対する絵文字の使用が失礼になるだろうという解釈ができるのに対して、「同等」関係の場合に用いられている絵文字は、友好関係を維持する役割に対する認識が薄いのではないかと思われる。

このように絵文字は、携帯メールを用いたコミュニケーションにおいて、ポジティブ・ポライトネスの役割を果たすものと言える。

4.8. まとめ

本章では、携帯メールおける「断り」の表現に注目し、日本語母語話者と中国人学習者の使い方に

ついて考察してきた。考察の結果は以下である。

1）「断り」の中心構造である「理由＋不可」の使用が多かったものの、日本語母語話者は「同等」より「目上」への場合の使用率が高くなっているのに対して、中国人学習者はその違いが見られなかった。また、「理由＋不可」の付加成分について、その前後に「謝罪」表現の使用が、両者の共通点として見られた。つまり、携帯メールにおける断り表現の特徴は、両側から「謝罪」で「断り（理由＋不可）」をはさむ「サンドイッチ型」が考えられる。そして、「謝罪」表現の多用は、両者に共通する対人関係への配慮を表していることの結果と考えられる。

2）断り方について、日本語母語話者の場合は、「目上」と「同等」で、ともに断定的な断り方をしているのに対して、中国人学習者の場合は、「不可」をやわらげる話しことばの特徴が「目上」でも「同等」でも同様に観察された。つまり、日本語母語話者は話しことばか書きことばかによって、「断り」の表現の使い分けをしているのに対して、中国人学習者は区別できていないという問題点がうかがえた。

3）携帯メールに用いられる「ちょっと」は、日本語母語話者より中国人学習者はやや多く用いられているが、インタビューの結果、「目上」に対しては失礼な表現となるため、配慮表現としての役割が考えにくい。すなわち、携帯メールを用いた断りでは、「ちょっと」というより、両者に見られた「謝罪」表現が相手に対する配慮の表れとして中心的な役割を果たすと言える。それはBrown & Levinson（1987）の理論によって動機づけられたものだと考えられる。

4）そして、携帯メールに現れる絵文字は、良好な人間関係を保つポジティブ・ポライトネスの役割として、書きことばで欠如した顔の表情や身体の動きなどを補う上で、断ることによって生じた不快感を緩和して、友人関係を調節していることが、「同等」の場合で明らかになった。

また、携帯メールに用いる断り表現について、中国人学習者は書きことばと話しことばの区別をしていなかったことと、「ちょっと」の使用についての指導を考える際に、たとえば、まず、携帯メールに使うべき文体は基本的に書きことばであることを指導し、意識させることが重要だと考えられる。そして、書きことばを用いた「断り」では、明確な表現を使用すること、あいまいな表現を使ってはいけないという使い分けの意識を持たせる。特に「目上」の人に使うのが大変失礼になることに注意を与える。さらに、単なる文体の違いから区別をしているのではなく、良好な人間関係を保ちたいという配慮があるからこそ、使い分けをしているという点に重点に置く指導も必要だと思われる。

本章での調査を通して、携帯メールを用いた断りで、日本語母語話者がどのような表現を使って、どのようにして相手への配慮を適切に伝え、断ることができるかを明らかにした。それは日本語学習者の理解に役立つ資料として提示できたと思う。また、話しことばではなく、書きことばで相手を断る場合、特に「目上」と「同等」の異なる上下関係の場合、どのような表現を使えば、失礼にならないかという点を説明することは、中国人学習者の運用につながると考える。

【付記】

本論文は、2012 年 6 月「平成 24 年度第 1 回日本語教育学会研究集会」において、発表したものを加筆、修正したものである。

【注】

1) 日本での滞在歴については，中国人学習者 30 人の中，最短 4 カ月，最長 10 年であった。

2) 本章では、依頼の内容が設定されているため、主に断り表現を中心に分析していく。

3) 断りの構造について、詳しくカノクッワン（1995，1997）を参照されたい。

4)「ちょうっと」は「ちょっと」の間違いと考えられる。

5)『日本国語大辞典』によると，「や」は「(「じゃ」の変化した語。活用は未然形「やろ」連用形「やっ」終止形「や」の形がみられる)。指定の意を表す。…だ。…じゃ。上方語。江戸末期頃からみられる。」という。また，大阪府の方言として，例「今日は日曜日や」（p412）が挙げられている。

6)「ほんまに」という表現は大阪府の方言となり、標準語である「本当に」の意味を表す。

7) なぜなら、３つの理由が考えられる。1 つ目は、普段日本語学習者が習っている断り表現は、学校の教科書では話しことばを中心となる場面が多く見られ、そこに書かれている指導ポイントとしては、相手の気分を害しないように、相手に失礼にならないような断り方をするという（『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話・指導のポイント』p. 5）からである。２つ目は、実際提出している例文の中では、婉曲的、あいまいな表現が多く用いられているため、日本語学習者はそのまま覚えてしまう可能性が高く、書きことばの場合でも同じ表現形式を使うおそれが十分考えられる。３つ目は、書きことばを中心となる断り表現についての提示と指導が重要視されておらず、日本語学習者が書きことばに適した断り表現に触れる機会が少なくため、話しことばと書きことばを区別する意識がなく、誤用につながる要因も考えられる。

第５章　自然会話の「雑談」に見られる「ちょっと」の考察
―日本文学作品と比較して―

5.1. はじめに

本章では、「依頼」と「断り」のような明確な意図が存在する場面と異なり、意図が明確とは言えず、話題の変更に制限がない自然会話の「雑談」の場面に注目し、そこにおける「ちょっと」が、どのように使われているのか、どのような役割を果たしているのかを明らかにしていく。

「雑談」の場面を選んだのは、日常生活のなかでは、意図が明確ではない場面も多く存在するからである。そのような場面では、中国人学習者にとっては、「ちょっと」を使用する動機が、最も読み取りにくく、中国人学習者の理解につながるものとして必要な場面だと思われるからである。

また、「ちょっと」に関する従来の先行研究では、小説という書きことばを対象としたものが数多く挙げられるが[1)]、自然会話と比較した場合にはどのような特徴をもっているのか、両者の違いについて見ていく。そして、中・上級の中国人学習者にとって、小説が有効的なインプットとなるのかについても考えてみたい。

さらに、「ちょっと」が、中国語に訳された場合、原文に比べてどのような特徴を持っているのかについて、対照分析の視点からの考察も視野に入れて比較を試みる。

5.2. 研究の対象と方法

本章に用いる分析対象は次の２種類である。

- 宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011 年版』　（以下自然会話「BTSJ」とする）のうち、「雑談」[2)] という場面における日本人の友人同士・女性２人による自然会話８組約 176 分間分（１つの会話は平均 22 分）を対象にした。この場面は雑談を中心とした内容が多く、日本語母語話者における「ちょっと」の使われ方がより広く観察することができるからである。
- 中国社会科学基金と日本国際交流基金助成の共同研究プロジェクトとして作成された「中日対訳コーパス」における日本文学作品を３つ選んだ。1)『砂の女』安部公房、2)『黒い雨』井伏鱒二、3)『ノルウェイの森』村上春樹。これらは戦後の日本文学の有名な作品で、日本だけではなく中国語に翻訳される等、海外でも広く知られているからである。

分析方法は、以下の１）―３）における「ちょっと」を抽出し、第３章と同様な分析方法を用いる。その機能を次の①－⑨に分類する。

1）自然会話「BTSJ」における「ちょっと」、「雑談」の場面に使用されているもの。

2）文学作品の会話部分における「ちょっと」、会話文を表す「　」という記号内で示された内容に加えて、終助詞等の話しことばの特徴を持つものも対象とする[3)]。

3）文学作品の非会話部分における「ちょっと」、いわゆる「地の文」で、会話以外の説明や叙述の部分。

「ちょっと」についての①－⑨の分類は、次のようになる。

①「聞き手への負担要求を軽減する」

依頼や指示など相手に行為要求を求めるときに、その行為の負担をやわらげ、相手の心的負担を軽減する役割を果たすものである。

②「依頼の予告」

聞き手に何かをしてもらいたいときに、その意図を前もって告げ知らせる働きがある。

③「否定的内容の前置き」

「ちょっと」が否定的な内容のマイナス度を小さくする枕ことばとなる。マイナスイメージの表現や、重大ではないが不利益なこと・不都合なことなど利害関係が起こる可能性がある場合に用いられる。

④「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」

ある物事に対する自分の望ましいという気持ちを表したり、また、自分の行為や状態を表したりすることを控え目に表す。

⑤「呼びかけ」

「ちょっと」自体に感動詞として、注意を喚起する働きがある。

⑥「とがめ」

「ちょっと」を用いることでその不満、怒りを表出し、「ちょっと」にプロミネンスを置くことにより話し手の不満や怒り、威嚇、詰問、抗議などの感情を強めることができる。

⑦「間つなぎ」

「あの、そのう、ちょっと、こう、なんて言ったらいいのか」のように、言いよどみを埋める間投詞の働きがあり、沈黙を回避しようとする場合に用いられる。

⑧「程度」

物事の程度を表し、その程度は文脈により「高」、「低」を表す場合がある。

⑨「量」

数量・時間などが少ないことを表す。

5.3. 分析の結果

まず、「ちょっと」の抽出結果について見ていく。３つの分析データから、「ちょっと」が 211 抽出された。それぞれ、自然会話「BTSJ」から 78、文学作品の会話部分から 83、文学作品の非会話部分から 50 となっている[4)]。

「ちょっと」の談話機能による分類について分析し、表にしたものが以下の表１である。

表１　「ちょっと」の機能による分類　　**単位：回**

「ちょっと」の分類	自然会話「BTSJ」		文学作品			
			会話部分		非会話部分	
①「聞き手への負担要求を軽減する」	10	57（73.1%）	14	48（58%）	0	
②「依頼の予告」	0		0		0	
③「否定的内容の前置き」	27		21		0	
④「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」	16		9		0	
⑤「呼びかけ」	0		4		0	
⑥「とがめ」	2		0		0	
⑦「間つなぎ」	2		0		0	
⑧「程度」	17	21（26.9%）	27	35（42%）	39	50（100%）
⑨「量」	4		8		11	
合　計	78（100%）		83（100%）		50（100%）	

表１からわかるように、文学作品の非会話部分においては、⑧「程度」39 回、⑨「量」11 回という副詞としての用法しか見られなかった。

この結果により、「ちょっと」は文学作品の非会話部分、いわゆる「地の文」に用いられる場合、あくまでも典型的な副詞としての用法しか扱われていないことが考えられる。つまり、「ちょっと」の談話機能は対人コミュニケーションの話しことばのなかで見られるということである。

文学作品の非会話部分における⑧「程度」、⑨「量」の具体例を挙げると、以下のようになる、下線は筆者によるものである（後見の各用例についても同様）。

・　そっと近づいて両手で掴まえたが、鳩の右の目はつぶれ、右側の肩のところの羽がちょっと焦げていた(略)。　1077『黒い雨』　「⑧程度」

・　永沢さんはどちらにもちょっと手をつけただけで、すぐに煙草を吸った。

2517『ノルウェイの森』「⑨量」

また、文学作品の会話部分と自然会話「BTSJ」における⑧「程度」、⑨「量」の代表例として以下に示す。

・　「いま、スコップを取りに行っているところだから、もうちょっとの辛抱だ」

1098　『砂の女』　「⑧程度」

・　「私、知りあいのスタッフの人に頼んでちょっとずつ買ってきてもらってるの」

1213『ノルウェイの森』「⑨量」

・　「私寝てて、あのーすごい吐いたら(うん)ちょっと気持ち悪くて」

249-30「自然会話」「⑧程度」

次に、自然会話「BTSJ」と文学作品の会話部分について見てみると、自然会話「BTSJ」では、①ー⑦といった機能分類が、全体の 73.1%を占めているのに対して、文学作品の会話部分では 58%となり、両者には約 1.5 割の差があった。一方、基本用法である⑧「程度」、⑨「量」については、自然会話「BTSJ」の 26.9%に比べ、文学作品の会話部分では 42%と上回っている。つまり、「ちょっと」は、話しことばとして文学作品の会話部分に用いられるとしても、実際の自然会話とは差があることが考えられる。

本章では、主に表１における自然会話「BTSJ」と文学作品の会話部分に出現回数が高い①、③、④といった談話機能について見ていくが、先に①と④を、次に、最も多い③「否定的内容の前置き」を中心に、両者における使われ方について考察していく。また、「ちょっと」の機能は、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown ＆ Levinson（1987）のポライトネスの理論で説明できるものであるかどうかについて分析を試みる。

5.4. 聞き手への負担要求を軽減する「ちょっと」

まず、文学作品の会話部分に見られた特徴について、その代表例を用いて見ていく。

例１　　**ちょっと**子供をお願いします。　722　『黒い雨』

例１は、「子供をお願いします」という話し手の利益になる行為を聞き手に要求しているのがわかる。

その実質的な負担は変わらないが、「ちょっと」を用いることによって、Leech（池上・河上（訳）1983）の「気配りの原則」に沿うよう努めている。また、依頼することは聞き手の消極的フェイスを脅かす行為になるため、「ちょっと」はまた、ネガティブ・ポライトネスとして、Brown & Levinson（1987）の理論でも説明できる。

文学作品の 14 例では、例 1 と同じような働きをもっているものがほとんどであったが、「パンツまでぐっしょりだったから、あなたちょっと脱いじゃなさい（略）」のような、むしろ聞き手の利益になるものが 1 例見られた。

それに対して、自然会話「BTSJ」においては、10 例のうち、その利益の受け手が話し手である場合はもちろんあったが、聞き手である場合 2 例、話し手と聞き手の共通利益である場合 4 例があった。

まず、利益の受け手が聞き手である場合の会話例[5]について見ていく。実際の会話がかなり長いため、その一部分だけを取り挙げることにする。以下の会話例も同様である。

例 2　A1：　ねえ[↓]、ゴキブリって何で出るんだろう、本当に。

B2：　もう、なんだ、“心底呪われろ”とか思ったのに、ゴキブリに(<笑い>)。

A3：　本当嫌だよね。

B4：　うん[小さな声で]。

A5：　私、部屋とかに出たら、まじ卒倒すると思う。

B6：　ねえー、部屋怖いよね=。

B7：　=部屋で食べ物食べちゃいけないそうですよ。

A8：　えー、あ、食べ物おいとくと湧くっていうこと?。

B9：　そうそう=。

B10：　=なんか、かすとかさ、ぽろぽろ落ちるじゃん。

B11：　けっこう狙われる<らしい>{<}[最後小さな声で]。

A12-1：<えー>{>}<えーー>{<},,

B13：　ゴキブリホイホイ設置ですよ。

A12-2：本当だー。

A14：　えっ怖い=。

A15：　=私の部屋にもういたらどうしよう。

B16：　**ちょっと**今日買ってかえんな。

A17：　うん、買って<帰る>{<}。

B18：　<もう>{>}それしかないよ。

A19：　うわー怖い。　19-248-327

例２からわかるように、B16 の「ちょっと今日買ってかえんな」は、ゴキブリ用の設置物を買ってかえりなさいという聞き手の利益となる助言を表している。つまり、ここでの「ちょっと」は、自分の聞き手に対する好意の表れだと解釈できる。すなわち、「他者に好かれたい」というポジティブ・ポライトネスとしての性格が見なしうる。これは「ちょっと」の新しい性格とも言えよう。

次に、話し手と聞き手の共通利益を表す用例について見ていく。

例３　B１：　最近、なんか、あれだよね、クラスの飲み会とかもないしね。

A２：　そうだよねえ。

B３：　ねえ。

A４：　うーん。

B５：　ああー、夏だ。なんか、ありっ??とかね〈笑い〉。

A６：　そうそうそう〈そう〉{〈}。

B７：　〈皆で〉{〉}。

B８：　**<u>ちょっと</u>**声をかけてみましょうよ。

A９：　そうですね、行きましょうよ。　19-248-399

例３では、B8 の発話から、クラスの飲み会がより楽しくなるよう、たくさんの人を集めるという２人の、あるいは２人を含む公の利益のための行為だと想定できる。しかし、B8 の発話はあくまでも話し手の申し出となり、聞き手にとっては「声をかけたくない」かもしれない。そうであれば、話し手の申し出は聞き手の負担になると考えられる。これは、Leech（池上・河上（訳）1983）の「気配りの原則」で説明することができる。

自然会話「BTSJ」に見られる「ちょっと」は、日本語教科書に提出されている「ちょっと見せてください（初歩 14 課/文化 16 課）」、「ちょっと一枚だけ、やってみて（SFJ20 課）」、「いいみせですね。ちょっと行ってみませんか（話そう 2-2 課）」のようなものと同様な用法として用いられているのがわかる。つまり、自然会話における「ちょっと」は日本語教科書に反映されているということである。しかし、例１の文学作品ほど単純ではないという違いが見られた。

5.5. 自分の願望・行為・状態を控え目に表す「ちょっと」

この機能について、まず文学作品の会話部分では、次のような特徴が見られた。

例４　「ねえワタナベ君。私、ああいうの誰かに**<u>ちょっと</u>**やってみたい」　2742『ノルウェイの森』

例５　「**ちょっと**伺います」　1332『黒い雨』

例４、例５では、それぞれ「誰かにやってみたい」という自分の願望を、「ワタナベ君」が受け入れやすくなるようにすること、「伺いたい」という自分の気持ちについて、「ちょっと」を用いて控え目に表現している。これらはどのような動機が考えられるのであろうか。Leech（池上・河上（訳）1983）の原理で説明して見れば、「(a)自己と他者との意見の相違を最小限にせよ」という「合意の原則」によって動機づけられたものと見なすことができるが、Brown ＆ Levinson（1987）の理論で説明することは難しいと考えられる。

自然会話「BTSJ」では、Leech（池上・河上（訳）1983）の「合意の原則」に従うものもあれば、そうではないものもあった。まず、前者から見ていく。

例６　Ａ1：　今週は「試験名 02」だから=。

Ｂ2：　=あっ「試験名 02」か。

Ａ3：　っていうか、明日‘あした’だよ=。

Ａ4：　明日‘あした’、の夜。

Ｂ5：　漢字やってたら「言語名」やりやすくない?。

Ａ6：　うーんー、どーうだろう。

Ａ7：　=で、まー、旧漢字はあまり、<出てない>{<}。

Ｂ8：　<旧漢字?>{>}。

Ｂ9：　そうか、出ないの?、旧漢字。

Ａ10：　<だってね…>{>}【【。

Ｂ11：　】】そうだね、出ないよね。

Ａ12：　でもね、なんか、なんかの作家の小説ではね(うん)、旧漢字とか旧仮名使いが多くて、そういうの**ちょっと**“いいな”と思って。

Ｂ13：　ああー、そう、古い文体が…。

Ａ14：　そうそうそう=。　19－245-67

例６では、Ａは「（旧漢字とか旧仮名使いが多いものを）いいな」という自分の意見を素直に表現したいのがわかる。しかし、聞き手であるＢと共通の話題「試験」にかかわるもので、自分の考え方に対して聞き手Ｂは反対意見を持っているかもしれない。つまり、聞き手との意見一致を最大限、異議を最小限にしようとする話し手であるＡの努めを表現している。すなわち、これは、例４、例５と同じく、Leech（池上・河上（訳）1983）の「合意の原則」に沿う言語行動だと解釈できる。

しかし、次の用例はどうであろう。

例７　Ａ1：　私この間飲んでるのに、顔色悪いと言われて〈2 人笑い〉。

Ｂ2：　〈笑いながら〉えー、えへへへ、なにそれ?。

Ａ3：　え、そのときもう二日酔いで飲んでて。

Ｂ4：　〈笑いながら〉え、うそ、それどうよ?。

Ａ5：　どうよ?。

Ａ6：　向かえ酒どうよ?。

Ｂ7：　あはははは〈笑い〉、そうか。

Ａ8：　だんだんだんだん**ちょっと**気分はよくなってきたんだけど。

Ｂ9：　えっ、でも、むかえ酒って効くの?。

Ａ10：《沈黙　3 秒》どう、どうなんだろうね。　19-244-167

例７では、「むかえ酒」を飲んだＡは、「気分はよくなってきた」という自分の感情を表しているのがわかる。A8 では「だんだんだんだん」という程度の変化を表す状態であるため、「ちょっと」は程度を表すものとして考えにくく、また聞き手に同意を求めたり、聞き手に働きかけるような行為でもない。単に自分の気分の回復を強調しているように捉えられる。従って、ポライトネスの理論で説明しきれないものだと見なしうる。

このように、本節で分析した「自分の願望・行為・状態を控え目に表す」場合は、Leech（池上・河上（訳）1983）の原理で説明できるものが多いのに対して、Brown ＆ Levinson（1987）の理論で説明できないことがわかった。

次節から、表１で最も多く見られた否定的内容の前置きとしての「ちょっと」について考察していく。

5.6.　否定的内容の前置きとしての「ちょっと」

5.6.1. 文学作品の会話部分において

文学作品の会話部分では、否定的内容の前置きを表す「ちょっと」について、以下の２つの特徴が見られた。それぞれの代表例とともに見ていく。

（1）自分の不都合についての説明

例８　「かまわないわよ、ちっとも。 二階に上ってきてよ。私、今**ちょっと**手が放せないの」

724『ノルウェイの森』

例８における「ちょっと」は、自分の状態「手が放せない」が聞き手の負担を生じさせるというネガティブ・フェイスに対する配慮表現としての役割を果たしていると思われる。

(2) 第３者に対する批判

例９　「今朝の村長の壮行の辞は、**ちょっと**長すぎたなあ」　19『黒い雨』

例９では、「壮行の辞は長すぎる」という、村長に対する批判を「ちょっと」を用いて軽減し、Leech（池上・河上（訳）1983）の「是認の原則」に沿うよう努めている。また、批判という行為は、第３者である村長に対してではあるが、「他者に非難されたくない」というネガティブ・フェイスに対するネガティブ・ポライトネスとも考えられる。

このように、文学作品の会話部分では、「ちょっと」がどのような否定的内容の前置きとして表し、どのように配慮を示しているのかは、上記の用例のように明確であり、使用の単純さが見られた。また、その使用する動機については、Leech（池上・河上（訳）1983）はもちろん、Brown & Levinson（1987）の理論による説明もできることがわかった。

5.6.2. 自然会話において

次に、自然会話「BTSJ」に見られる否定的内容の前置きを表す「ちょっと」の特徴について見ていく。

例 10　A1：　じゃ、私と一緒に懐メロ歌おうよ。

B2：　ごめん、やっぱ私は一緒に歌えないみたい<2 人笑い>。

A3：　《少し間》借りてないから覚えられない。

B4：　借りておいでよ、今日あたり(<笑い>)。

A5：　嫌だ。

A6：　恥ずかしいじゃん。

B7：　や、別に平気でしょ。

A8：　それ、その、布施明だけ借りるの嫌だから、(うん)もう 1 枚ぐらい<笑いながら>(<笑い>)何か別の借りようかと思ったん<だけど>{<}。

B9：　<笑いながら><なに、**ちょっと**>{>}カモフラージュかもし出してる?。

B10：　<笑いながら>何で隠してるの?、そんな。

A11：　だって、その布施明だけ 1 枚借りられなくない?。

B12：　布施明の 2 枚借りれば?。

A13：　嫌だよ。　19-250-616

例 10 では、ＢはＡに対して「ごまかし」を指摘し非難しているのがわかる。それが露骨にならないよう、「ちょっと」を用いて小さくしようとするＢの気遣いを表している。つまり、Leech（池上・河上（訳）1983）の「是認の原則」によって動機づけられた言語行動だと考えられる。これはまた、Brown

& Levinson（1987）の理論に沿う聞き手の「他者に叱られたくない」というネガティブ・フェイスを侵害してしまうことに対するネガティブ・ポライトネスとしての役割とも見なされうる。

しかし、両者の理論による説明が難しいものも見られた。たとえば、

例 11　A1-1：なんか、こう、なんか、先月とかもね(うん)、寮の友達の部屋に蛾とか入って来て,,

B2：　イー[小さな悲鳴]こわっ、<こわっ‘怖い’>{<}。

A1-2：<まね、その子>{>}トラウマになっ<てるし>{<},,

B3：　<うー>{>}[叫び声]。

A1-3：私もかなりね、“ひーっ”ていう感じ<だったから>{<},,

B4：　<嫌だー>{>}。

A1-4：**ちょっと**、もう、もう、コンプレックスがもう(うん)、芽生えてしまって,,

B5：　やあー。　19-248-250・6

例 11 では、A1-4 の否定的内容は、「コンプレックスが芽生える」であり、例 10 で見たような聞き手に対する非難ではない。「もうもう～芽生えてしまって」という表現から程度の低さを表しているとも考えられず、「ちょっと」は単に、Aの虫に対する嫌悪感を強調しているように捉えられる

続いて、次の用例について見てみよう。

例 12　B1：　**ちょっと**ね、同居人の子の方がね、ゴキブリ本当だめでね(うん)、私もだめなんだけど、殺すのは平気だからね、私がいつも退治役なんですけど(<笑い>)、

A2：　<ビック!>{>}<2 人笑い>。やだー。

B3：　<笑いながら>すっごい勢いよかったの。あのね、飛んで、しかも。

A4：　<キャーキャー>{<}[悲鳴]。

B5：　<笑いながら><飛ばずに##に>{>}下手に追い詰めたらね、上に上がっちゃって、その後飛んで。

A6：　もう、私、卒倒するかも。

B7：　するよね、**ちょっと**ね。

A8-1：いや、私東京来るまでさ、なんか,,

B9：　あっ、うんうん。

A8-2：見たことなかったんだけど=。

B10：　=分かる分かる=。　19-248-275

例 12 では、まずＢ１の「ちょっと」は、第３者（同居人の子）の「ゴキブリがだめ」という非難を小さくする。例 10 と同じように Leech（池上・河上（訳）1983）「是認の原則」に沿うものである。しかし、Ｂ７の「ちょっと」はそれと異なるもので、Ｂは先行するＡ6 の「もう、私、卒倒するかも」と

いう否定的内容に対して、「するよね」と同意をしながらも、完全同意できないというＢの微妙な心理を「ちょっと」を用いて表している。つまり、Ｂ７の「ちょっと」は、Leech（池上・河上（訳）1983）の「合意の原則」に違反するものだけではなく、Brown ＆ Levinson（1987）の理論による説明も難しいと考えられる。

このように、否定的内容の前置きを表す「ちょっと」については、文学作品の会話部分と自然会話「BTSJ」を比べると、前者では、その否定的内容がわかりやすいのに対して、後者では、前後の文脈に強く依存し、それがなければ否定的内容がどうかは不明確であり、また、話題や文脈によって、使用の修飾関係が複雑で動態的であった。さらに、例 12 のように、文脈によって、「ちょっと」にかかわる表現の主体が、３人称から１人称に変わっていくという特徴も見られた。そして、「ちょっと」を使用する動機について、前者では、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown ＆ Levinson（1987）の理論で説明できるのに対して、後者では説明できないものもあった。

以上で見てきたように、「ちょっと」の扱い方については、自然会話「BTSJ」より、文学作品の会話部分のほうが、中国人学習者にとって、理解しやすいものであるかもしれない。しかし、日本語のレベルが上がるにつれて、高度なコミュニケーション・スタイルやより複雑な配慮表現に対するインプットの質も要求されるため、日本文学作品のような単純なものだけでは、そのニーズに十分に応えることができないと感じられる。中国人学習者により自然なかつ高度な配慮表現としての「ちょっと」のインプットを提出するには、自然会話が有効的であると言える。

5.6.3. 「ちょっと」の使用構造について

本項では、否定的内容の前置きを表す「ちょっと」が、その前後でどのような要素と共起しているのかについて見ていく。自然会話「BTSJ」と文学作品の会話部分を考察した結果から、大きくは２つの特徴が見られた。それを表２にまとめる。

表 2　「ちょっと」の前後の使用構造

「ちょっと」の前後の特徴	自然会話「BTSJ」	文学作品の会話部分
〈1〉 感動詞、副詞、終助詞との共起	・あ ＋ ちょっと ・やあー ＋ちょっと ・はあ ＋ちょっと ・ちょっと ＋もう ・ちょっと＋ね	
〈2〉 否定的内容の省略	・ちょっと、あれだけど。 ・ちょっとまっ…	

表２からわかるように、自然会話「BTSJ」では、「ちょっと」は感動詞、副詞、終助詞といった多様な表現と共起するという自然会話を構成する要素があるのに対して、文学作品の会話部分では見られなかった。つまり、実際の自然会話において、否定的内容を表す場合は、重層的に相手に対する配慮をより多く払う必要があると考えられる。

表２で見られた特徴について、実際の会話においてどのように用いられているのかを、具体例を用いて見ていく。

〈1〉感動詞、副詞、終助詞との共起

ここでは、感動詞を用いた代表例を、以下に示す。

例 13　A1：　しかも、なんか、去年だか一昨年とかも、別の子の部屋で(うん)、廊下の、廊下に面する自分、ま、つまり部屋の戸なんだけど(うん)、そこを開けっ放しにしたらゴキブリ入ってちゃった<っていう話があって>{<},,

B2：　<うーうー>{>}<嫌、嫌>{<}。

A3：　<もうそれ以来ね>{>}(うん)、あんまり長時間空けてたくないなって(はー)、(略)こう、なんか(うんうん)、その方を見張りながら、なんか、過すっていう感じ。

B4：　なんか、新しい網戸か目張りをするかしたいよね。

A5：　そうなの、そう。

A6：　まずは隙間テープ購入かなって、最近は。

B7：　そうだね。

B8：　<u>やあー**ちょっと**</u>、思い出したんだけど、私実はね、昨日ゴキブリ出たんですよ。

A9：　あーあー<あー>{<}[悲鳴を上げる]。　19-248-264

例 13 では、B8 における「やあーちょっと」は、つまり、これから言う「ゴキブリ」という否定的内容を予告し、聞き手に与えるであろうという心的負担に対する配慮の表れだと考えられる。

〈2〉否定的内容の省略

この特徴については、次のような会話を用いて見ていく。

例 14　B1：　そう、昨日、「友人 02 名前」の家に泊まったの。

A1：　あー、本当?。

B2：　本当に 10 時に起きる<笑いながら>気はなかった<2 人笑い>。

A1：　それはね。

B2：　目覚ましね、すごいいっぱいかけたの=。

A1：　でも、起きれないって。

Ｂ2：　うん。

Ｂ4：　で、なんか、もう、本当、<少し笑いながら>申し訳ないことをした。

Ｂ6：　せっかく(うん)、私 2 時間かかるじゃん。

Ａ7：　うん。

Ｂ8：　家、あっ、かかるんだけど(うん)、家から。

Ｂ9-1：なんか、ね、「友人 02 名前」家で“近い、20 分位で着いちゃうイエー”とか(ああー)思って<たのに>{<},,

Ａ10：　<「地名 01」>{>}だからね、ううん。

Ｂ9-2：<少し笑いながら>なんか、12 時半とかいう、**ちょっと**、あれだけど。

Ａ11：　いいよ、そう、たまにはそういうのが必要だよ。

Ｂ12：　そうだよね。　19-244-42-2

例 14 では、Ｂはせっかく友人の家に泊まったのに、早起きができなかったという内容が想定される。しかし、Ｂ4 の「本当、申し訳ないことをした」というのは、具体的に何のことを指しているのか文脈から見ても不明確である。つまり、「ちょっと、あれだけど」は、否定的なニュアンスが読み取れるが、具体的に何の否定的内容を表しているのかが正確に推察できないため、「ちょっと」の働きについての解釈も非常に難しいと思われる。このような複雑な言語現象は、高コンテクストである日本文化の特徴とも言えよう。

一方、文学作品の会話部分では、上記の自然会話「BTSJ」のような、複雑な要素と共起する特徴がなく、例 15、例 16 の下線部に示しているように、「ちょっと」の直後に、修飾すべき述語と共起する単純さが見られた。

例 15　「しかし、鏡のほうは、**ちょっと**受け合いかねるな」

1030『砂の女』

例 16　「それは**ちょっと**具合わるいわよ、いくらなんでも」

1825『ノルウェイの森』

以上、実際の用例を用いて、自然会話「BTSJ」と文学作品の会話部分における「ちょっと」の使用構造について見てきた。前者では、さまざまな要素と共起し、使用の修飾関係が複雑であるのに対して、後者では、日本語学習者にとってもわかりやすい形で使われているという違いがうかがわれた。また、自然会話「BTSJ」における「ちょっと」については、どのような否定的内容と共起しているのかが、たとえ文脈がわかっていても推察が難しいという、文学作品の会話部分にない特徴が観察された。

このように、中国人学習者にとって、文学作品の会話部分に比べ、自然会話「BTSJ」における「ちょっと」の扱いは、より複雑で理解しがたいものになろう。そのなかで、特に表２のような複雑な要素との共起、否定的内容の省略を表す「ちょっと」の用い方について、日本語母語話者のように運用するのは困難だと思われる。なぜなら、中国語では物事をはっきりと最後まで表す慣習があるからである。

次節では、文学作品の会話部分における「ちょっと」の中国語訳について見ていく。

5.7.　否定的内容の前置きとしての「ちょっと」の中国語訳との対照

以上で見てきたように、文学作品の会話部分における「ちょっと」の使われ方は、自然会話「BTSJ」より単純ではあった。本節では、「中日対訳」という訳文を原文と対照することで、さらに考察を進めていく。

本節では、表１に分類された文学作品の会話部分に見られた 21 個の否定的内容の前置きを表す「ちょっと」を中心に、日本語原文と中国語訳を比較して、それぞれがどのような特徴を持っているのかについて、対照分析の視点から考察していく。以下に、「ちょっと」の日中対訳の内容について、表３として示し、分析していく。

表３　否定的内容を表す「ちょっと」の日中対照

作品	No	日本文学作品の原文	中国語訳	中国語訳の役割
①『砂の女』	1	しかし、鏡のほうは、ちょっと受け合いかねるな。	可是，镜子嘛似乎难以保证。	副詞
	2	それにしても、部落の灯は、一体どこに行ってしまったのか？　いくら地形が複雑だからといっても、ちょっと、ひどすぎる。	然而，村落的灯究竟都到哪儿去了呢？就算地形再复杂，也有些不对劲了吧。	副詞
	3	///ちょっと、不真面目な印象をあたえすぎるんじゃないですか？……そうでしょうか？……いくら強烈な体験であっても、出来事の表面をなぞっただけじゃ、無意味ですからね。	///可会不会给人过多不正经的印象呢？……是嘛？……不管多么强烈的体验，如果只描写事件的表面，那实在太没意思了。	副詞
②『黒い雨』	4	僕の近くに立っていた乗客が、「ちょっと失敬します」と云って窓から嘔吐した。	一位乘客站在我身旁，说了声“对不起”，就从车窗口往外呕吐。	中国語訳省略
	5	「今朝の村長の壮行の辞は、ちょっと長すぎたなあ」	“早晨村长那番欢送辞，实在太长了。”	副詞

③『ノルウェイの森』	6	窓はぴたりと雨戸が開ざされていた。管理人に訊くと、直子は三日前に越したということだった。どこに越したのかは**ちょっと**わからないなと管理人は言った。	木板套窗关得严严实实。问管理人，说是直子已于3天前搬走了。**搬去哪里他不晓得**。	中国語訳省略
	7	「そうだ、少し遠くだけれどあなたをつれていきたい店があるの。**ちょっと**時間がかかってもかまわないかしら?」	″对了，有家饭店我想领你去一次，就是远些，花**点儿**时间不要紧？”	数詞「一」が省略されている
	8	「かまわないわよ、ちっとも。二階に上ってきてよ。私、今**ちょっと**手が放せないの」そしてまたガラガラと窓が閉った。	″没关系，一点不碍事儿。上二楼！**我现在脱不开手。**”接着，“哐”一声把窗关死。	中国語訳省略
	9	まあ半年間けっこう楽しくやったわよ。ときどきあれって思うこともあったし、なんだか**ちょっと**おかしいなと思うこともあったわ	半年时间里，尽管她的话听起来有时不觉一怔，**有时**感到纳闷儿，但总的来说还是满愉快的。	副詞
	10	私、あの日に起ったことを全部彼に話したの。レズビアンのようなことをしかけられたんだ、それで打ったんだって。もちろん感じたことまでは言わなかったわよ。それは**ちょっと**具合わるいわよ、いくらなんでも。	我把那天发生的事一五一十跟他说了一遍，说那女孩儿动手动脚地要搞什么同性恋那样的鬼名堂，所以才打了她。自然没有把自己的感受也说出来。那**毕竟**不大合适，不管怎么说。	副詞
	11	日曜日の朝にあなたの寮に迎えに行くわよ。時間は**ちょっと**はっきりわからないけど。かまわない?	星期天早上去宿舍接你，**时间倒说不准**。可以么？	中国語訳省略
	12	だってそうでしょ、やっと自由の身になって、行く先が旭川じゃ**ちょっと**浮かばれないわよ。	可你知道，好歹成了自由之身以后，除了旭川，**还想不出其他落脚处**。	中国語訳省略
	13	ただね、あの人今**ちょっと**頭がおかしくなり始めてるからときどき変なこと言いだすのよ。	只是，他脑袋已开始**不大**正常，常说怪话，叫你摸不着头脑。	副詞
	14	**ちょっと**頭がおかしくなってて ね、暴れたの。私にコップ投げつけてね、馬鹿野郎、お前なんか死んじまえって言ったの。	脑袋**有点**不正常，大发脾气。往我身上扔茶杯，骂我混帐东西，死了算了。	副詞
	15	「あの人**ちょっと**ここおかしいのよ」とレイコさんは言って指の先で頭を押さえた。	“那人这地方**有点**小故障。”玲子用手指戳着脑袋说。	副詞
	16	「**ちょっと**ね。寝不足なのよ。何やかやと忙しくて。でも大丈夫、気にしないで」	“**有点儿**。睡眠不足啊。这个那忙得团团转。不过也不打紧，别介意。”	副詞

	17	「女の子はもう少し上品に煙草を消すもんだよ」と僕は言った。「それじゃ木樵女みたいだ。無理に消そうと思わないでね、ゆっくりまわりの方から消していくんだ。そうすればそんなにくしゃくしゃにならないですむ。それじゃ**ちょっと**ひどすぎる。」	女孩子熄烟要熄得文雅一点。”我说，“那样熄，活象砍柴女。不要硬碾，从四周开始慢慢熄，那就不至于把烟头弄得焦头烂额的。你这熄法**太**残忍了。	副詞
	18	でも実の娘に向ってお前らがかわりに死にゃあよかったんだってのはないと思わない?それは**ちょっと**ひどすぎると思わない?	但也不至于说什么让亲生女儿替死那样的话，你说是不？你不认为**未免**过分了？	副詞
	19	もう苦しくないでしょ？もう死んじゃったんだもん、苦しくないわよね。もし今も苦しかったら神様に文句言いなさいね。これじゃ**ちょっと**ひどすぎるんじゃないかって。	不再痛苦了吧？已经死了，应该不会痛苦，要是现在还痛苦的话，那就找上帝算帐去，就说这也**太**和人过不去了。	副詞
	20	あの人そういう人なのよ、昔気質で。それなのに税務署員ってねちねちねちねち文句つけるのよね。収入**ちょっと**少なすぎるんじゃないの、これって。冗談じゃないわよ。	他就是那样的人，古板得很。尽管这样，税务员还是横挑鼻子竖挑眼，什么收入是不是**太**少了等等。笑话，	副詞
	21	///お姉さんが電話に出て、緑はまだ帰ってないし、いつ帰るかは**ちょっと**わからない。	///是她姐姐接的，说绿子尚未回来，什么时候回来**也**不清楚。	副詞（1人称が省略されている）

注：日本語原文における「ちょっと」の太字と下線、および中国語訳の太字と下線については筆者によるもの。

表３からわかるように、日本語原文における否定的内容の前置きを表す「ちょっと」は、中国語のさまざまな表現に翻訳されている。その中国語訳から、次の２の特徴が観察された。

- 中国語訳では、副詞の用法として訳されているものが顕著に見えた。詳しくは、No１“似乎”、No２“有些”、No３“可”、No５“实在”、No９“有时”、No 10“毕竟”、No 13 “不大”、No 14、15、16 で共通する“有点（儿）”、No 18“未免”、No 17、19、20 で共通する“太”、No 21“也”の 15 文となり、全体の７割以上占めているのがわかる。そのほか、数詞としての用法が 1 文（No7）見られた。つまり、日本語原文の「ちょっと」は、中国語では副詞として扱われる傾向が高いと言える。
- 「ちょっと」の中国語訳が省略されているものもある程度観察されている。詳しくはNo４、６、８、11、12 の５文から確認できる。このような訳し方について、遠藤（1989）によると、これ

は翻訳における減訳[6]という技法である。つまり、より中国語らしい表現になるような工夫がなされていることがわかる。

また、日本語原文と中国語訳を比較した場合に見られた相違点について、以下の特徴が挙げられる。

- 日本語原文において、「ちょっと」は、配慮表現として用いられているのに対して、中国語訳では、程度の高さを表すものとなっている。たとえば、No５の“实在”、No 17.19.20 の“太”といった表現に訳され、日本語で表現すると、程度が高い「とても」、「大変」となる。つまり、日本語原文では、相手に対する非難や批判に対して、対立的にならないよう、適度な距離を置き、「ちょっと」を用いて緩和するのに対して、中国語訳では、ストレートに表現しているように捉えられる。
- また、「ちょっと」の省略について、省略された５文は、数として多くないが、相手の不利益に対する配慮の表し方に違いが見られた。たとえば、No６の「(直子)どこに越したのかはちょっとわからないな」という日本語原文では、「わからない」と直言すると、直子の居場所を知りたい人にとっては、不利益になる。相手にもたらす不利益に対して、当然払うべき配慮を「ちょっと」を用いて表現しているという日本語母語話者の心構えを反映しているのであろう。一方、中国語訳の場合、「ちょっとわからない」を “不晓得（知らない)”と率直に表現している特徴があった。
- No８で見た日本語原文における「ちょっと」もNo６と同様な役割があると解釈できる。つまり、相手の２階に上がってくるという負担に配慮している。一方、中国語訳では“上二楼！我现在脱不开手”と直接的に表し、相手に配慮するような表現が見られない。しかし、中国語では、直接的に表すことによって、相手との距離が縮むことができ、相手に対する親しさの表れだという解釈が考えられる。
- そして、構文構成の視点から見れば、日本語原文において、「ちょっと」は配慮表現としての性格が強いため、オプショナルの成分となり、「ちょっと」の有無にもかかわらず、文としては自然である。しかし、中国語訳では、構文要素として訳されているため、文中では必須成分となり、それがなければ、不自然なだけではなく、文としても成り立たないという違いも見られた。たとえば、No15「あの人ちょっとここおかしいのよ」→“那人这地方有点小故障”のように、“有点”がなければ、文としては不成立になる。

以上で見た通りに、「ちょっと」について、日本語原文と中国語訳における扱い方には、異なる点が明らかな形で存在していることがわかる。このような違いが生まれた原因には、日中の文化差にあるのではないかと考えられる。

次節で、少し触れてみたい。

5.8. 否定的内容の前置きとしての「ちょっと」に見られる日中文化差

表３における日本語原文では、No４の「ちょっと失敬します」と、No17 の「それじゃちょっとひどすぎる」などでは、それぞれ相手に対する不利や非難を「ちょっと」を用いてやわらげ、相手との摩擦を緩和しようとする話し手の気遣いが示されている。また、No13.14.15 のように、相手に対する批判を、「ちょっと」を用いて小さくしようとする話し手の気配りも捉えられる。このような日本人の配慮に満ちた言語行動には、日本の文化と深いかかわりがあるように思われる。

日本では「察し」の文化、「和」を重視する文化であるようで、人との付き合いのなかで、言葉の理論性よりも、常に相手の機嫌を損ねないように気を遣い、些細なことでもお互いに不愉快な思いをしないように心掛ける。つまり、日本語母語話者はネガティブ・ポライトネスを重んじる志向が表わされる。これについては、日本語原文の No７「そうだ､少し遠くだけれどあなたをつれていきたい店があるの｡ちょっと時間がかかってもかまわないかしら?」と、No11「日曜日の朝にあなたの寮に迎えに行くわよ｡時間はちょっとはっきりわからないけど｡かまわない?」でも、反映されているように思える。No７と No11 において、話し手が取った行為は、相手の利益になるものにもかかわらず、さらに、「時間がかかること」と「正確な時間がわからないこと」などによって、相手に与えるであろうという不安を、「ちょっと」を用いて適度に調整するという話者の配慮を示している。つまり重層的な配慮を払っていることを意味している。

一方、中国語訳では、No ５ の「今朝の村長の壮行の辞は、ちょっと長すぎたなあ」➞“早晨村长那番欢送辞，实在太长了”のように、“实在”は「とても」という程度のはなはだしい表現に訳されている。また、No17 で見た「それじゃちょっとひどすぎる」➞“你这熄法太残忍了”のように、ここの「ちょっと」も“太”という「大変」、「とても」の表現に翻訳されている。これらの表現は、ストレートで相手の気持ちや面子[7]に考慮を欠けているように思われる。

このような直接的な表し方の背景には、中国語における物事をはっきりとする文化と関わりがあるように思われる。曹（2001，216）によれば、中国語では、“开门见山”（单刀直入に話す）、“直截了当”（言動などがはっきりする）、“推心置腹”（誠心誠意に接する）、“直言不讳”（直言してはばからない）という言行が好ましく思われる志向がある。これらの表現は配慮を欠けているように思われるかもしれないが、往々にして“开门见山”（单刀直入に話す）や “推心置腹”（誠心誠意に接する）といった言語行動を取ったことによって、相手に対する親近感を示す配慮の表れだと中国人は解釈しているように思う。

つまり、以上の日中対訳から、日本語は、相対的に対人的距離を大きく表すネガティブ・ポライトネスが優勢であるのに対して、中国語は、対人的距離を小さく示すポジティブ・ポライトネスが優勢であるという文化の差がうかがえた。

5.9. まとめ

本章では、文学作品における非会話部分と会話部分、および自然会話「BTSJ」の３つの文体における「ちょっと」の使われ方、および「中日対訳」における「ちょっと」について考察を進めてきた。その結果を、以下の６点にまとめる。

１）文学作品の非会話部分に用いられる「ちょっと」は、副詞としての「程度」や「量」を表す用法しか見られなかった。

２）「ちょっと」は、相手への負担要求を軽減したり、自分の願望・行為・状態を控え目に表したりするという配慮表現としての機能が自然会話と文学作品の会話部分の共通点として見られた。しかし、後者の用い方が単純であるのに比べ、前者の相手に対する配慮の表し方は複雑であった。また、自分の願望・行為・状態を表す場合、自分のことに対して、聞き手が違う意見を持っているかどうか予測することが求められていて、聞き手との意見不一致を避ける役割も考えられる。

３）否定的内容の前置きを表す「ちょっと」について、文学作品の会話部分では、その否定的内容がわかりやすいものであったが、自然会話「BTSJ」では、前後の文脈に強く依存し、それがなければ否定的内容がどうかは不明確となるものと、たとえ文脈がわかっていても推察が難しいものがあった。また、話題や文脈によって、否定的内容との修飾関係も複雑で動態的であった。さらには、文脈によって、「ちょっと」にかかわる表現の主体が、３人称から１人称に変わっていくという特徴も見られた。このような特徴は、意図が明確に存在する「依頼」、「断り」の場面との違いとして挙げられよう。

４）そして、「ちょっと」の機能について、文学作品の会話部分では、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown ＆ Levinson（1987）の理論による説明ができるのに対して、自然会話「BTSJ」では、説明できるものももちろんあったが、できないものもあった。さらに、「ちょっと」は単なるネガティブ・ポライトネスとしてではなく、相手との関係・距離を近づけるポジティブ・ポライトネスとしての性格もあるということが観察された。

５）また、日本語母語話者が、行っている微妙な心理の表し方については、実際の自然会話の分析を通じてしか観察できないように見える。つまり、中国人学習者にとって、文学作品の会話部分だけをインプットしていても、より複雑な自然会話での配慮表現を理解するためには、不十分であることがわかった。

６）否定的内容の前置きを表す「ちょっと」を中心に、中日対訳を比較することによって、日本語は、相対的に対人的距離を大きく表すネガティブ・ポライトネスが優勢であるのに対して、中国語は、対人的距離を小さく示すポジティブ・ポライトネスが優勢であるという文化の違いがうかがえた。

また、5.6.3 で言及した中国人学習者にとって、難しいと思われる「ちょっと」の使用構造である

「やあー（あ、はあ）ちょっと」、「ちょっと、あれだけど」のような複雑な要素との共起、および省略の使い方について指導する場合、たとえば、日本語母語話者はなぜこのような表現形式をしているのか、まずその使用動機について理解させるのが重要だと思われる。それを説明するには、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown ＆ Levinson（1987）のポライトネス理論が有効であろう。次に、本章で取り上げている自然会話のようなモデル会話を量的に提出し、イントネーションに注意しながら、シャドーイングをさせるような授業活動が有益であろう。

そして、本章の最後に取り上げている「ちょっと」に関する日中対照の考察は、書きことばを中心とした文学作品を対象にしたため、日中両言語の違いに見られたものは限られているのではないかと思われる。配慮表現の視点から両者の違いをより明らかにするために、自然会話を対象とする研究、また物事をはっきりとする中国人が、本当に相手のことを配慮していないのか、もしそうでなければ、どのような場合で、どのようなストラテジーで配慮を表しているのかについての考察を今後の課題としたい。

【付記】

本論文は、2013 年 8 月「第三回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム」において、発表したものを加筆、修正したものである。

【注】

1）周（1994）、三宅（2003）、彭（2004）、笹本（2006）、鄭（2011）などを参照されたい。

2）この場面について、宇佐美（2011）が「誘い」と名づけているが、実際の内容では、「誘い」に関する場面が少なく、ほとんど雑談の場面であった。また、「誘い」の場面がある場合は、聞き手が断ることなく、全部受け入れていることになっている。

3）たとえば、「おいちょっと待てよ、そんなに急に動けるわけないだろうって彼は言った。『ノルウェイの森』1829」の下線部分のような、完全に話しことばの特徴を持つ「おい」と「よ」のような表現があるため、分析の対象とした。

4）「ちょっと」の固定表現について、自然会話「BTSJ」では、「ちょっとしか$_{\times 2}$、ちょっとした$_{\times 1}$」の３個、文学作品の会話部分では「ちょっとしか$_{\times 1}$、ちょっとした$_{\times 8}$」の 9 個、文学作品の非会話部分では、「ちょっとしか$_{\times 1}$、ちょっとした$_{\times 11}$」の 12 個をそれぞれ分析対象から除外した。

5）自然会話「BTSJ」では、話者の２人について、JF01～JF16 という順で表記されているが、本章では、ＡとＢとして見ていく。

6）遠藤（1989，214）は、減訳について、次のように説明している。

減訳とは、原文のある一部の言葉を訳さないことである。不訳とも言われる。目的

はやはり、原文の意味を損なわないという前提のもとで訳文をわかりやすく的確な表現にするためである。

7）中国人にとって、面子は何により大切なものであり、中国人の行動を形成するキーワードとなっている。胡（1988）によれば、面子を使った中国語の表現には以下のようなものがあるという。各面子についての日本語訳と解釈は、園田（2001）によるものである。

・「顧面子（面子を顧みる）」：体面を取り繕い、周囲から悪く言われないようにするという。

・「争面子（面子を争う）」：　喧嘩している二人が「自分の方が正しい」と主張しあうようなケースを指す。

・「給面子（面子を与える）」：人を褒め称えたりおべっかを言うこと。

・「丢面子（面子を失う）」：　個人的、あるいは集団的な名誉が傷つけられた場合。

・「講面子（面子を語る）」：　自尊心が強いことを示す場合が多い。

・「留面子（面子を保つ）」：　実際に過ちを犯した人間も、自分が悪いことを内面では認めていながらも、人前で「留面子」しようとするため、どうしてもみずからの非を認めなくなってしまう。

・「増加面子（面子を増やす）」：社会的な評価を高めること。

・「借面子（面子を借りる）」：（他人）の社会的名誉を利用すること。

・「看面子（面子を見る）」：　顔を立てること。

第 6 章　まとめと今後の課題

6.1.　まとめ

本研究では、「ちょっと」がどのように使用されているのかについて、実際の自然会話における「依頼」、「断り」、「雑談」といった場面を通して見てきた。また、異なる文体における「ちょっと」の特徴を明らかにするために、携帯メールと文学作品も分析対象として考察を進めてきた。そして、「ちょっと」の機能は、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown ＆ Levinson（1987）のポライトネスの理論で説明できるかどうかについて分析を試みた。それぞれの結果を以下に示す。

第３章では、自然会話「BTSJ」における「依頼」・「断り」に見られた「ちょっと」を中心に、考察した結果は以下のようになる。

- 「依頼」に用いられる「ちょっと」は、依頼の前置き、または依頼の予告として「聞き手の心構えを作らせる」機能が見られた。また、依頼表現において、「ちょっと」以外の配慮表現として用いられているのは、１人称化の「～と思う」、３人称化の「っていう」、例示化の「～たり」、「笑い添加」といったストラテジーであるということが明らかになった。
- 一方、「断り」における「ちょっと」は、断りの事情やニュアンスを「ちょっと」を用いて暗示し、断りの明言を回避する「ほのめかし」の特徴が見られた。また、「ちょっと」を用いない場合、「謝罪」、「笑い添加」、「代替案提示」といったストラテジーが観察され、それが、相手との人間関係を維持するための配慮表現としての機能を担っていることが明らかになった。
- 自分の願望・行為・状態を表す「ちょっと」については、自分自身のことに対して、聞き手がどのような意見を持つかについての予測が困難のため、聞き手との意見相違を小さくするように、常に聞き手の気持ちを予測し、考慮する日本語母語話者の心構えも観察された。
- 否定的内容の前置きを表す「ちょっと」はネガティブ・ポライネスとして、「断り」では、さまざまな要素と共起しているという複雑さがあったが、そのかかり先が「不可」という否定的内容を表す単純さが見られた。それに比べて、「依頼」では、否定的内容との修飾関係が複雑であり、前後の文脈を十分に読まないとわからないような、高コンテクストな状態が前提となって、「ちょっと」の意味・機能が生まれるという特徴が見られた。
- そして、「依頼」と「断り」における「ちょっと」を使用する動機について、「依頼」では、依頼表現、または依頼の予告としてのものは、Leech（池上・河上（訳）1983）と Brown ＆ Levinson（1987）の理論で説明できるが、自分の願望・行為・状態を表す場合は後者による説明が難しいということがわかった。しかし、「断り」の場合、後者で説明できるのに対して、前者に違反していることがわかった。

第４章では、「目上」と「同等」からの依頼を携帯メールで断る場合について、日本語母語話者と中国人学習者の使われ方の違いについて調査した。また、携帯メールに現れる絵文字の表現効果を対人関係の調整機能に注目して分析した。次のような特徴が見られた。

・　両者の共通点として挙げられるのは、「目上」でも「同等」でも、「断り」の前後にある「謝罪」表現が多用されていることである。しかし、断り方には相違点が観察された。日本語母語話者は「目上」と「同等」に対して、断定的な断り方をしているのに比べ、中国人学習者は話しことばの特徴を持つ断り方をしているのが特徴的であった。

・　中国人学習者が用いた断り方のなかで、「ちょっと」という表現が目立ち、「目上」と「同等」で、同様に観察された。携帯メールの場合は、話しことばの特徴を持つ「ちょっと」は失礼な表現だという日本語母語話者の意見が得られ、携帯メールに用いられた「ちょっと」は、配慮表現としての機能が考えにくいと言える。

・　つまり、携帯メールを用いた断りでは、「ちょっと」というより、「謝罪」表現が相手に対する配慮の表れとして中心的な役割を果たすと言える。そして、それはBrown & Levinson（1987）の理論によって説明可能なものだと考えられる。

・　携帯メールに現れる絵文字は、良好な人間関係を保つポジティブ・ポライトネスの役割として、書きことばで欠如した顔の表情や身体の動きなどを補う上で、断ることによって生じた不快感を緩和して、友人関係を調節していることが、「同等」の場面で明らかになった。

第５章では、自然会話「BTSJ」と文学作品の会話部分における「ちょっと」について、「雑談」の場面を中心に分析した。また、日中対訳に見られた「ちょっと」についても考察し、以下のような結果が得られた。

・　「ちょっと」は、相手への負担要求を軽減したり、自分の願望・行為・状態を控え目に表したりするという配慮表現としての機能が自然会話「BTSJ」と文学作品の会話部分の共通点として見られた。しかし、後者の用い方が単純であるのに比べ、前者は相手に対する配慮の表し方が複雑であった。

・　自分の願望・行為・状態を表す「ちょっと」について、自分のことに対して、聞き手 が違う意見を持っているかどうかという予測をすることが求められていて、聞き手との意見不一致を避ける役割が考えられる。

・　否定的内容の前置きを表す場合、「ちょっと」は、ネガティブ・ポライトネスの役割として、文学作品の会話部分と自然会話「BTSJ」ではともに見られた。しかし、前者では否定的内容がわかりやすいものであったが、後者では、否定的内容との修飾関係が複雑で動態的であった。前後の文脈を読むことが強く要求され、たとえ文脈がわかっていても推察が難しいものがあった。さらには、文脈によって、「ちょっと」にかかわる主体が３人称から 1 人称に変わるという特徴も挙げることができた。

・　そして、「ちょっと」の機能について、文学作品の会話部分では、Leech（池上・河上（訳）1983）とBrown & Levinson（1987）の理論による説明ができるのに対して、自然会話「BTSJ」では、説明できないものもあった。さらに、今まで主にネガティブ・ポライトネスとして観察されてい

る「ちょっと」が、相手との関係・距離を近づけるポジティブ・ポライトネスとしての性格が新たに観察された。

・ 日本語母語話者が行っている微妙な心理、および人間関係の調整のあり方については、実際の自然会話の分析を通じてしか観察できないように見える。つまり、中国人学習者にとって、文学作品の会話部分だけをインプットしていても、より複雑な自然会話での配慮表現を理解するためには、不十分であることが言えよう。

・「ちょっと」の中日対訳を比較することによって、日本語は、相対的に対人的距離を大きく表すネガティブ・ポライトネスが優勢であるのに対して、中国語は、対人的距離を小さく示すポジティブ・ポライトネスが優勢であるという文化の違いがうかがえた。

以上の考察から得られた結論として、以下の４点が挙げられよう。

1）「ちょっと」は、「依頼」の場面では、依頼することによって、相手にかかる負担、相手の私的領域を侵害してしまうことに対するネガティブ・ポライトネスとして使われている。

2）「ちょっと」は、「断り」の場面では、断ることによって生じた相手の不利益に対するネガティブ・ポライトネスとして使われている。

3）携帯メールでの断りでは、「ちょっと」というより、「謝罪」表現がネガティブ・ポライトネスとしての役割が大きいと考えられる。

4）「雑談」の場面では、相手の利益のためになされる助言に用いられた「ちょっと」について、ポジティブ・ポライトネスとしての役割が観察された。

つまり、「ちょっと」、いかにネガティブ・ポライトネスとしての性格が優勢であるかということが明らかになった。この性格は中国語と比較した場合、より一層際立って見える。

また、日本語母語話者が用いる「ちょっと」の使用背景には、高コンテクスト文化である日本文化と密接な関係があるように思われる。人との対立を避け、角のない調和に重きを置く人間関係を作ることが大事にされている日本社会での特徴が、「依頼」、「断り」という人間関係の緊張感が高まる場面において、特に見られたように思う。また、「雑談」の場面において、そのつど自己と相手が置かれているさまざまな状況的な出会いのなかで、お互いのフェイスを配慮しながら、些細なことでお互いに不愉快な思いをしないという日本語母語話者のネガティブ・ポライトネスを重んじる心構えが、「ちょっと」をはじめとして配慮表現を重層的に使用することとつながっていると思われる。

本研究で得られた研究成果として、以下に示す。

第３章では、実際の自然会話における「依頼」、「断り」の場面を分析することによって、そこにおける「ちょっと」の使われ方、および配慮表現としての機能について、中国人学習者に自然なモデルとして提示するためには役立つと考える。また、「ちょっと」が用いられない場合、日本語母語話者が

どのようなストラテジーを用いて相手に配慮を表しているのかについての指導を行うための基礎的資料を提供できたと思う。これらは中・上級の日本語学習者により複雑かつ多様な配慮表現を獲得させることに役立つと考える。

第４章では、書きことばを媒体とする携帯メールを用いた断りの調査を通じて、日本語母語話者が文体の違いにより、使い分けをしていることが明確になった。また、中国人学習者は日本語母語話者と比較してはじめて、日本語のレベルとは関係なく、断り表現に関する話しことばと書きことばの区別ができていないという問題点が浮上した。それは、話しことばを主とした断り場面が出ている日本語教科書に影響されているためと思われる。従って、文体の異なる場面別に置かれた断り表現の重要度を検討する必要性が示唆される。

第５章では、「ちょっと」はポジティブ・ポライトネスとしての性格も持つ場合があると示すことができた。また、「ちょっと」の日中対訳を対照することにより、日本語では、対人距離を保つネガティブ・ポライトネスが重要視されるのに対して、中国語では、親近感を示すポジティブ・ポライトネスが大事にされているという日中の文化の違いに対する認識を深めた。

そして、中国人学習者にとってわかりにくい、ネガティブ・ポライトネスの役割を果している「否定的内容の前置き」を表す「ちょっと」について説明する場合、Brown & Levinson（1987）の理論で説明するよりも、Leech（池上・河上（訳）1983）の「他者に対する負担、他者に対する非難、自己と他者との意見相違を最小限にせよ」といった原則で説明した方がわかりやすいのであろう。

6.2.　今後の課題

今後の課題として、次の３点が挙げられる。

１）自然会話「BTSJ」で見てきた「依頼」、「断り」における「ちょっと」の使われ方に関する中国人学習者から見た場合の困難点について、筆者なりの見解を述べてきたが、それをより明確にし、有効的な指導ができるように、上級者の中国人学習者の使用実態を考察する必要がある。

２）携帯メールを用いた断りでは、日本語母語話者が書きことばか話しことばかによって、使い分けしているのに対して、中国人学習者はそうではないという点については、中国人学習者の誤用と言えるかどうか疑問が残る。また、便利なコミュニケーション手段としての携帯メールが、現代において、我々の日常生活に深く関わっているものとして認識されている。携帯メールを用いた対人コミュニケーションにおける対人把握のしかたや配慮の表し方について、日本語学習者に有益な指導ができるようにさらなる調査が必要だと思われる。

３）「ちょっと」に関する日中対照については、書きことばを中心とした文学作品を対象にしたため、日中両言語の違いに見られたものは限られていると思われる。配慮表現の視点から両者の違いをより明らかにするためには自然会話を対象とする研究、また物事をはっきりとさせることに価値を置く中国人は、本当に相手のことを配慮しないのか、もしそうでなければ、どのような場合で、

どのようなストラテジーを用いて表しているのかを明らかにすることが期待される。

【参考文献】

〈日本語の文献〉

Brown,P. and S. Levinson, (1987) Politeness: Some universals in language usage,Cambridge University, Cambridge. ［田中典子（監訳）,斉藤早智子,津留崎毅,鶴田庸子,日野壽憲,山下草代子（訳）(2011)『ポライトネス：言語使用における,ある普遍現象』研究社,東京］

Goffman,Erving (1967) interaction Rituals: Essays on Face-to Face Behaviour, Doubleaday Anchor,New York.［広瀬英彦・安江孝司（(訳）(1986)『儀礼としての相互行為』法制大学出版局,東京］

Grice,H.P.(1989)Studies in the Way of Words, Harvard University Press （邦訳：清塚邦彦訳（1998)『論理と会話』勁草書房）

Leech, G (1983) Principles of Pragmatics, Longman.(邦訳：池上嘉彦・河上誓作訳(1987)『語用論』紀伊國屋書店)

相原茂（2010)『講談社中日辞典第三版』　講談社

秋田恵美子（2005)「現代日本語の『ちょっと』について」創価大学別科紀要 17 号, 72－89.

飛田良文・浅田秀子（1994)『現代副詞用法辞典』東京堂

池上嘉彦・守屋三千代（2009)『自然な日本語を教えるために―認知言語学をふまえて―』ひつじ書房

生田少子（1997)「ポライトネスの言語学（敬語行動の今を探る)」『言語 26』6 号, 66-71.

石黒圭（2002)「分量表現」小池清治他編『日本語表現・文型事典』朝倉書店

宇佐美まゆみ（2011)「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2011 年版」(http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj2011.pdf)

―（2012)「母語話者には意識できない日本語会話のコミュニケーション」『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版

大山礼子(2003)『国会学入門（第２版）』三省堂

大島吉郎（2004)「対話文中における“有点儿”の機能」『語学教育研究論叢』21 号, 1－19.

岡本佐智子・斉藤シゲミ（2004)「日本語の副詞『ちょっと』における多義性と機能」北海道文教大学論集（5), 65－76.

―「『勧誘』と『断わり』における言語文化―日本語・英語・中国語・ロシア語の比較から―」『北海道文教大学論集』第４号

奥山和子(1999)「ポライトネス視点による会話の機能的解釈」神戸大学留学生センター紀要 6 号, 81－97.

金田一京助（1998)『例解　学習国語辞典』第五版　ワイド版　小学館

―（1997)『新明解国語辞典 』第 5 版(特装版)　三省堂

カノックワン・ラオハブラナキット（1995)「日本語における『断り』日本語教科書と実際の会話との

比較―」『日本語教育』87 号，29-33.
―（1997）「日本語学習者に見られる『断り』の表現―日本語母語話者と比べて―」『世界の日本語教育』７号，98-110.
川村よし子（1991）「日本人の言語行動の特性」『日本語学』第 10 巻第 5 号，51-60．明治書院
川崎晶子（1989）「日常会話のきまりことば」『日本語学』第 8 巻第 2 号，26-35.　明治書院
木村英樹（1987）「依頼表現の日中対照」『日本語学』6 巻 10 号，58－66.
工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実『副用語の研究』明治書院
―（2000）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法３　モダリティ』岩波書店
グループ･ジャマシイ(1998)『日本語文型辞典 ： 教師と学習者のための』くろしお出版
権英秀（2008）「『断り』表現の分析―フェイス複合現象の紹介―」『現代社会文化研究』NO.43
現代日本語研究会(2011)「『笑い』の意図と談話展開機能」『合本　女性ことば･男性ことば(職場編)』ひつじ書房
小池清治［ほか］（1997）『日本語学キーワード事典』朝倉書店
小島憲之他（1996）『新編日本古典文学全集３　日本書記②』小学館
坂野永理他（1999）『初級日本語げんきⅠ』The Japan Times
笹本明子（2006）『ちょっと』の発話機能について―行為要求文に表れる『ちょっと』を中心に―」同志社女子大学大学院文学研究科紀要 6 号，115－136.
佐内かおる（2013）「初級日本語教科書における会話文の調査と小考―配慮表現を中心として―」『日本語と日本語教育』41 号，145-159.
佐竹秀雄（2002）「変容する『書く暮らし』」『日本語学』21（15）：PP.6-15 明治書院
佐治圭三・真田真治（2004）改訂新版『日本語教師養成シリーズ①文化・社会・地域』凡人社
白井恭弘（2013）『ことばの力学―応用言語学への招待―』岩波新書
謝平（2007）「日本語の『ちょっと』と中国語の“有点”について」『ことばの科学』20 号，85－100.
―（2008）「現代中国語における副詞“有点”の共起制限について―参照点の視点から―」『多元文化』8 号，243－255.
周国龍(1994)「要求行為における『ちょっと～』の機能に関する―考察」『名古屋大学人文科学研究』23 号，167－178.
徐健霞（2012）『婉曲表現における否定要素について』　修士論文　山東師範大学
新屋映子(2003a)「配慮表現からみた日本語　④縄張りを避けよう」『月刊日本語』7 月号　アルク
―（2003b）「配慮表現からみた日本語　⑧終助詞を軽視しない」『月刊日本語』7 月号　アルク
―（2004）「配慮表現からみた日本語　⑩相手の志向に思いを致そう」『月刊日本語』1 月号　アルク
鈴木孝夫（1996）『ことばと文化』岩波新書
鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版

鈴木聡志（2007）『会話分析・ディスコース分析　ことばの織りなす世界を読み解く』新曜社
スリーエーネットワーク（1999）『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
外山滋比古（1992）『日本語の個性』中央公論社
園田茂人（2001）『中国人の心理と行動』日本放送出版協会　ＮＨＫブックス
曹泰和（2001）「『断り表現』における日中の認識差」『中国 21』風媒体
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』　研究社
田中春美・田中幸子（1996）『社会言語学への招待―社会・文化・コミュニケーション―』ミネルヴァ書房
陳原・松岡榮志訳（1992）『中国のことばと社会』大修館書店
陳淑梅（2003a）「配慮表現からみた日本語　⑥おかしな挨拶」『月刊日本語』7 月号　アルク
―（2003b）「配慮表現からみた日本語　⑨謙遜しているつもりなのに……」『月刊日本語』7 月号　アルク
筑波ランゲージグループ（1996）『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE VOLUME ONE:DRILLS』凡人社
辻周吾（2011）「日本語学習者の副詞「ちょっと」の習得について―中国人日本語学習者に対する指導方法をめぐって―」NEAR conference proceedings working papers NEAR, 1－18.
鄭栄愛（2011）「会話文における『ちょっと』の配慮表現について（2)」日本文学論集（35), 82－51. 大東文化大学大学院日本文学専攻院生会
デュルケーム.E〔田原音和訳〕(1971)『社会分業論』青木書店[Dukheim, E.(1983)[1960]De la division travail social. Felix Alcan [Presses universitaires de France].]
時枝誠記（1951）「対人関係を構成する助詞・助動詞」『国語国文』20-9
中島文雄（1987）『日本語の構造』岩波新書
中田智子（1995）「談話における副詞のはたらき」国立国語研究所『日本語教育指導参考書 19－副詞の意味と用法』大蔵省印刷局
中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係―単一社会の理論』講談社
中道真木男（1995）「副詞の用法分類―基準と実例―」国立国語研究所『日本語教育指導参考書 19－副詞の意味と用法』大蔵省印刷局
中村功（2001a）「携帯メールの人間関係」東京大学社会情報研究所（編）『日本人の情報行動 2000』285-303　東京大学出版会
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(1994)『岩波　国語辞典　第 5 版』岩波書店
日本大辞典刊行会（1975）『日本国語大辞典』　第 13 巻　小学館
原口庄輔（1982）『ことばの文化』こびあん書房
姫野伴子（1992）「負担と利益」『埼玉大学紀要人文科学編』第 41 巻, 埼玉大学教養部, 47-56.
―（2003a）「配慮表現からみた日本語　①利益って負担！」『月刊日本語』7 月号　アルク

―（2003b）「配慮表現からみた日本語　③迷惑？掛かってないよ」『月刊日本語』7 月号　アルク
―（2004）「配慮表現からみた日本語　⑪利益と負担、再び」『月刊日本語』2 月号　アルク
―（2004）「配慮表現からみた日本語　⑫日本語教育と配慮表現」『月刊日本語』3 月号　アルク
藤原浩史（2005）「副詞『ちょっと』の意味構造」『国文目白』44，左 68－78.
藤原安佐・阿部仁美・大井裕子・椿原博子・吉田則子「日本語教育における配慮に関わる表現の指導」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』108. 2009
北京・対外経済の貿易大学・北京商務印書館・小学館（2011）『日中辞典』小学館
彭飛（1991）『外国人悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』和泉書院
―（1994）『「ちょっと」はちょっと…』講談社
―（2004）『日本語の「配慮表現」に関する研究―中国語との比較研究における諸問題』和泉書院
―（2006）『日本人と中国人とのコミュニケーション－「ちょっと」はちょっと…ポンフェイ博士の日本語の不思議』和泉書院
堀江薫（2005）日本語教育学会編「共時・通時」『新版日本語教育事典』大修館書店
坊農真弓（2008）『日本語会話における言語・非言語表現の動的構造に関する研究』ひつじ書房
ポリー・ザトラウスキ―（1998）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』くろしお出版
真嶋潤子・濱田朱美（1999）「日本語初級教科書の分析試案―『ちょっと』の意味・用法から」『日本語・日本文化研究』(9)，27-44.
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法』くろしお出版
マスデン眞理子(2012)「曖昧な『ちょっと…』は丁寧か？―言わないことと聞き手の負荷をめぐって―」『熊本大学国際推進センター紀要』３，63－75.
松村明（1995）『大辞林』　三省堂
牧原功（2011）「日本語の配慮表現と取り立て詞」『関東学園大学紀要』19，157―165.
―（2005）「談話における『ちょっと』の機能」群馬大学留学生センター論集（5），1－11.
三宅和子・野田尚史・生越直樹（2012）『シリーズ社会言語科学１「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房
三宅和子（2011）『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房
森山卓郎（2005）「アノ・エート・マアーフィラー」『新版日本語教育事典』大修館書店
茂木俊伸(2007)「第７章　国会会議録を用いた外来語の分析――『イノベーション』を例として――公共媒体の外来語－『外来語』言い換え提案を支える調査研究－」国立国語研究所
守屋三千代（2003a）「日本語の配慮表現中国で作成された日本語教科書を参考に」『日本語日本文学』13 号，37-50.
―（2003b）「配慮表現からみた日本語　②贈り物って難しい」『月刊日本語』7 月号アルク

―（2003c）「配慮表現からみた日本語　⑤目上に対する言葉の掛け方」『月刊日本語』7 月号　アルク
―（2003d）「配慮表現からみた日本語　⑦意志をあらわにしない・させない」『月刊日本語』7 月号　アルク
―（2004）「日本語の配慮表現―文法構造からのアプローチ―」日本語日本文学 14 号，1－16.
森田良行（1998）『基礎日本語辞典』角川書店
山内博之（2000）『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』アクル
山口和代（1997）「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因―中国人および台湾人留学生を対象として―」『日本語教育』93 号，38-48.
山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現―日本語語用論入門』明治書院
山岡政紀（2008）『発話機能論』くろしお出版
―（2004）「日本語における配慮表現研究の現状」『日本語日本文学』14 号，17－39. 創価大学日本語日本文学会.
山田富秋（1999）「会話分析を始めよう」好井裕明・山田富秋・西阪仰（編）『会話分析への招待』世界思想社，1－35.
大和啓子（2008）「『～タリ（スル）』の意外性と配慮効果」筑波応用言語学研究（15）115-125.
劉徳有（2006）『日本語と中国語』講談社
廬濤（2005）「中国語における副詞の誤用について」『広島大学総合科学部紀要Ⅴ言語文化研究』31 号，159－185.
呂叔湘（1986）『現代中国語用法辞典』現代出版
姚灯鎮（2005）「配慮表現の日中対照研究」『日中言語対照研究論集』7 号，101－113.
渡辺実（1990）「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23 号，1－16.

〈中国語の文献〉

陈岩（2003）「日语『暧昧』的表达方式与『察する』规则 」『日语知识』第 02 期　东北亚外语研究杂志编辑部
胡先縉（1988）「中国人的面子観」『中国人的権力遊戯』（黄光国編）　巨流図書公司

【引用コーパス】

宇佐美まゆみ監修（2011）「BTSJ による日本語話し言葉コーパス（2011 年版）」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20－22 年度科学研究費補助金基盤研究Ｂ（課題番号 20320072）研究成果

【分析対象リスト】

NO	場面	分析対象	会話番号	発話時間	発話者と発話回数
1	4	データ　1	データ　1－53	1 分 54 秒	JBI01（依頼側）：　35 回 JOK01（断る側）：　35 回
2	4	データ　1	データ　1－54	4 分 21 秒	JBI02（依頼側）：　43 回 JOK02（断る側）：　40 回
3	4	データ　1	データ　1－55	6 分 03 秒	JBI03（依頼側）：　59 回 JOK03（断る側）：　83 回
4	4	データ　1	データ　1－56	1 分 11 秒	除外（「ちょっと」の使用なし）
5	4	データ　1	データ　1－57	1 分 41 秒	JBI05（依頼側）：　21 回 JOK05（断る側）：　25 回
6	4	データ　1	データ　1－58	2 分 39 秒	JBI06（依頼側）：　32 回 JOK06（断る側）：　41 回
7	4	データ　1	データ　1－59	1 分 18 秒	JBI07（依頼側）：　18 回 JOK07（断る側）：　18 回
8	4	データ　1	データ　1－60	1 分 30 秒	JBI08（依頼側）：　16 回 JOK08（断る側）：　19 回
9	4	データ　1	データ　1－61	0 分 57 秒	JBI09（依頼側）：　17 回 JOK09（断る側）：　16 回
10	4	データ　1	データ　1－62	1 分 48 秒	JBI10（依頼側）：　26 回 JOK10（断る側）：　27 回
11	4	データ　1	データ　1－63	0 分 45 秒	JBI11（依頼側）：　13 回 JOK11（断る側）：　15 回
12	4	データ　1	データ　1－64	1 分 32 秒	JBI12（依頼側）：　18 回 JOK12（断る側）：　20 回
13	4	データ　1	データ　1－65	1 分 15 秒	JBI13（依頼側）：　11 回 JOK13（断る側）：　14 回
14	4	データ　1	データ　1－66	1 分 49 秒	JBI01（依頼側）：　24 回 JSK01（断る側）：　20 回
15	4	データ　1	データ　1－67	2 分 36 秒	JBI02（依頼側）：　38 回 JSK02（断る側）：　35 回

16	4	データ　1	データ　1－68	1 分 30 秒	JBI03（依頼側）：　23 回 JSK03（断る側）：　23 回
17	4	データ　1	データ　1－69	2 分 31 秒	JBI04（依頼側）：　37 回 JSK04（断る側）：　34 回
18	4	データ　1	データ　1－70	2 分 13 秒	JBI05（依頼側）：　24 回 JSK05（断る側）：　24 回
19	4	データ　1	データ　1－71	3 分 24 秒	JBI06（依頼側）：　30 回 JSK06（断る側）：　38 回
20	4	データ　1	データ　1－72	3 分 24 秒	除外（内容同上）
21	4	データ　1	データ　1－73	1 分 39 秒	JBI08（依頼側）：　22 回 JSK08（断る側）：　19 回
22	4	データ　1	データ　1－74	2 分 52 秒	JBI09（依頼側）：　41 回 JSK09（断る側）：　43 回
23	4	データ　1	データ　1－75	2 分 24 秒	JBI10（依頼側）：　49 回 JSK10（断る側）：　41 回
24	4	データ　1	データ　1－76	2 分 24 秒	除外（内容同上）
25	4	データ　1	データ　1－77	1 分 17 秒	JBI12（依頼側）：　21 回 JSK12（断る側）：　20 回
26	4	データ　1	データ　1－78	0 分 55 秒	JBI13（依頼者）：　18 回 JSK13（断る側）：　13 回
27	4	データ　1	データ　1－79	1 分 22 秒	JBI01（依頼側）：22 回 JYK01（断る側）：17 回
28	4	データ　1	データ　1－80	1 分 49 秒	JBI02（依頼側）：　27 回 JYK02（断る側）：　17 回
29	4	データ　1	データ　1－81	3 分 00 秒	JBI03（依頼側）：　46 回 JYK03（断る側）：　40 回
30	4	データ　1	データ　1－82	3 分 34 秒	JBI04（依頼側）：　34 回 JYK04（断る側）：　27 回
31	4	データ　1	データ　1－83	2 分 59 秒	JBI05（依頼側）：　41 回 JYK05（断る側）：　34 回
32	4	データ　1	データ　1－84	2 分 59 秒	JBI06（依頼側）：　32 回 JYK06（断る側）：　37 回

33	4	データ　1	データ　1－85	除外	除外（データ自体見られない）
34	4	データ　1	データ　1－86	0 分 59 秒	JBI08（依頼側）：　19 回 JYK08（断る側）：　19 回
35	4	データ　1	データ　1－87	2 分 09 秒	除外（「ちょっと」の使用なし）
36	4	データ　1	データ　1－88	1 分 28 秒	JBI10（依頼側）：　27 回 JYK10（断る側）：　28 回
37	4	データ　1	データ　1－89	1 分 06 秒	JBI11（依頼側）：　17 回 JYK11（断る側）：　20 回
38	4	データ　1	データ　1－90	1 分 18 秒	JBI12（依頼側）：　16 回 JYK12（断る側）：　19 回
39	4	データ　1	データ　1－91	0 分 33 秒	JBI13（依頼側）：　10 回 JYK13（断る側）：　9 回
40	場面 19	データ 2	データ 3－243	19 分 47 秒	JF01（女性 1）：　261 回 JF02（女性 2）：　233 回
41	19	データ 2	データ 3－244	20 分 47 秒	JF03（女性 3）：　367 回 JF04（女性 4）：　281 回
42	19	データ 2	データ 3－245	24 分 52 秒	JF05（女性 5）：　386 回 JF06（女性 6）：　371 回
43	19	データ 2	データ 3－246	20 分 44 秒	JF07（女性 7）：　242 回 JF08（女性 8）：　215 回
44	19	データ 2	データ 3－247	20 分 44 秒	除外（内容同上）
45	19	データ 2	データ 3－248	15 分 44 秒	JF11（女性 11）：　187 回 JF12（女性 12）：　217 回
46	19	データ 2	データ 3－249	13 分 48 秒	JF13（女性 13）：　101 回 JF14（女性 14）：　157 回
47	19	データ 2	データ 3－250	30 分 35 秒	JF15（女性 15）：　370 回 JF16（女性 16）：　426 回